



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	帯広叢書別冊 吉田巖の「台湾学事視察旅行」関係資料
Author(s)	北村, 嘉恵
Issue Date	2014-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55052
Type	book
File Information	obihiro.pdf



帯広叢書別冊

吉田巖の「台湾学事視察旅行」関係資料

2014 年 1 月

帯広市教育委員会

序 言

本書は、日本学術振興会科学研究費補助金「台湾先住民族の教育をめぐる歴史的動態」(2011～13年度、研究代表者北村嘉恵、若手研究(A)、課題番号 23683022)の交付を受けて行った調査・研究の成果報告として、吉田巖氏(1882～1963年)が遺した資料群の中から「台湾学事視察旅行」(1927年5月27日～6月30日)に関する資料を翻刻・紹介するものである。

本研究にあたり、「吉田巖遺稿資料」の閲覧・公刊に種々のご助力をいただいた帯広市図書館に、深い感謝の意を表する。

本書とともに、「吉田巖遺稿資料」所収の台湾関係資料の目録を公刊した*。あわせて参照いただきたい。

2014年1月

北村嘉恵

* 「「吉田巖遺稿資料」所収の台湾関係資料：概要と目録」(『教育史・比較教育論考』第21号、2014年)。本書で用いる「目録番号」は同目録に準拠している。同目録のPDF版は「北海道大学学術成果コレクション」(HUSCAP)の下記ウェブサイトから閲覧可能である。
(<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/index.jsp>)

吉田巖の「台湾学事視察旅行」関係資料

目 次

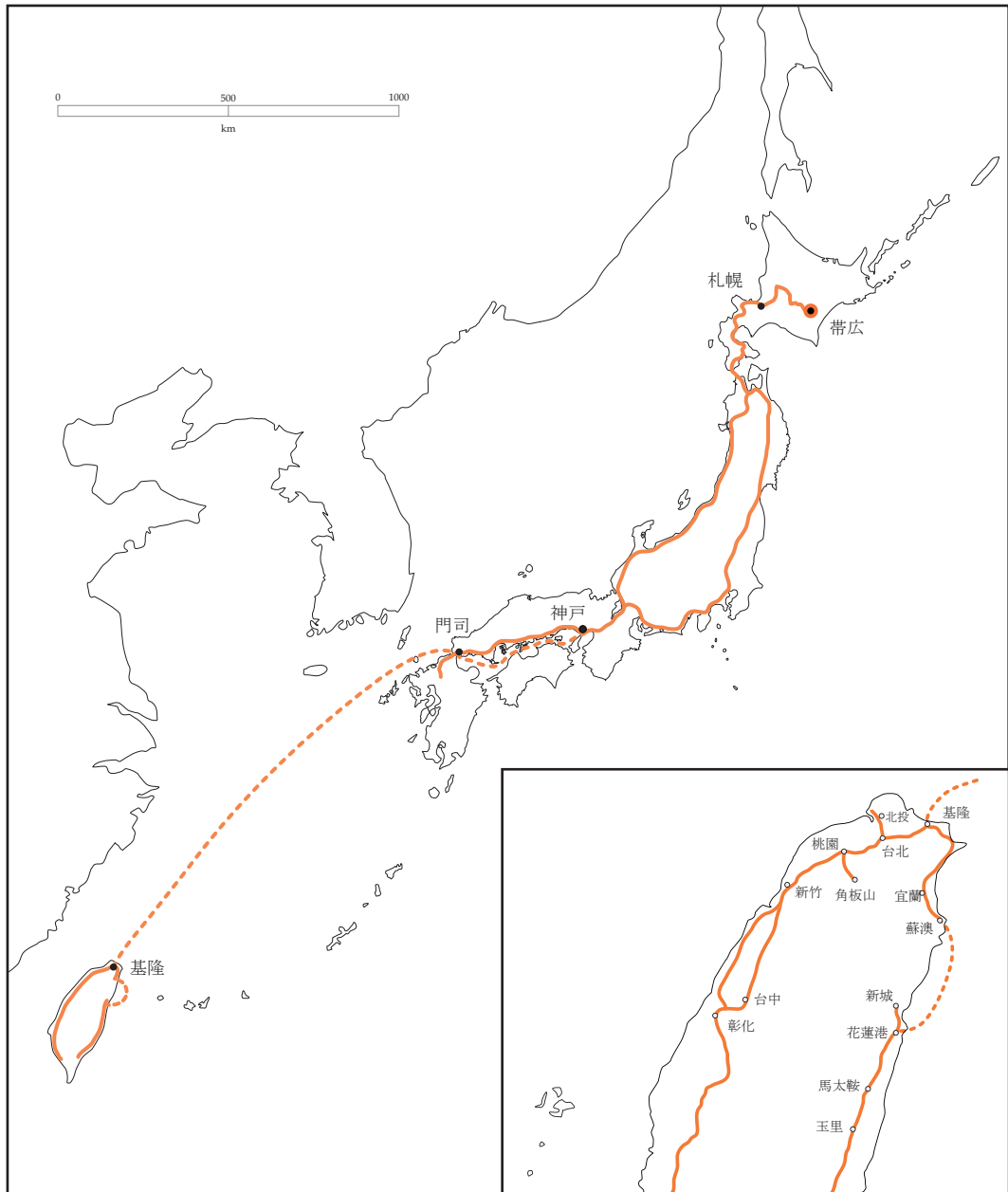
序言

目次

図 「台湾学事視察旅行」の経路

解説		1
凡例		9
資料細目		10
資料		12
1. 文書		12
2. 書翰		110
3. 「吉田巖日記」		111
4. 新聞記事		116

図 「台湾学事視察旅行」の経路



*主な発着日程 (1927 年)

- 5 月 27 日帯広発 — 5 月 31 日神戸着 (陸路)
- 6 月 1 日神戸港発 — 6 月 4 日基隆港着 (海路)
- 6 月 21 日基隆港発 — 6 月 23 日門司港着 (海路)
- 6 月 23 日門司発 — 6 月 30 日帯広着 (陸路)

*詳細な旅程は、「視察日程経過要覧」(目録番号 I-i-A-3-23)を参照のこと。

解 説

1. 本書の目的

本書は、北海道の虻田、平取、帯広等を拠点としてアイヌ児童の教育やアイヌ文化・郷土史の調査研究に従事した吉田巖氏（1882～1963 年）が遺した膨大な資料群の中から、「台湾学事視察旅行」（1927 年 5 月 27 日～6 月 30 日）に関する資料を翻刻・紹介するものである。

吉田自身がとりまとめた「吉田巖旅行年譜」によると、吉田は、1906 年に福島から北海道へ移住して以降、晩年の 1957 年までの約 50 年間に、計 6 回の道外旅行を行っている（下表）¹。これらの旅行の目的・訪問先からは、吉田の関心や人脈の広がりとともに、吉田の活動に対する社会的な評価の一端を窺うことができる。このなかで、1927 年の台湾旅行は、吉田の生涯を通じて最も長期間・長距離にわたる旅程であった。

（表 1）吉田巖の北海道外旅行の概要

旅程	主な目的	主な訪問・視察先
① 1922 年 8 月 1 日 -8 月 21 日	府県の教育・社会施設視察	東京（皇室博物館、下谷万年学校、宮城ほか）、名古屋（熱田神宮、信徳夜学校幼稚園ほか）、奈良（皇室博物館、橿原神宮、洞部落ほか）、兵庫、大阪、京都（桃山御陵、皇室博物館、崇仁托児所ほか）、長野、福島、山形、秋田、函館
② 1927 年 5 月 27 日 -6 月 30 日	台湾および府県の学事視察	函館（私立大森尋小）、大阪（市立有隣尋小）、台湾（台北、花蓮港、台東、屏東、高雄、台南、台中、新竹ほか）、福岡（太宰府ほか）、東京（宮城、本所納骨堂ほか）、栃木（日光東照宮）
③ 1935 年 4 月 12 日 -5 月 4 日	第 6 回全日本方面委員大会（熊本）、 府県の社会事業視察	東京（市社会局・府主催座談会、下谷産院、深川宿泊所ほか）、京都（市児童院ほか）、大阪（天王寺方面委員事務所ほか）、岡山（方面委員代表との懇談会ほか）、博多（松本無料住宅保育院ほか）、熊本（全日本方面委員大会）、出雲、金沢
④ 1935 年 10 月 31 日 -11 月 9 日	新宿御苑観菊会（東京）	東京（内務省、北海道庁出張所、宮城、新宿御苑、東京府美術館、啓明会事務所ほか）
⑤ 1940 年 11 月 5 日 -11 月 18 日	「紀元 2600 年」記念式典（東京）	東京（内務省、全日本方面聯盟本部、宮城ほか）、福島（墓参）、函館
⑥ 1943 年 2 月 26 日 -3 月 11 日	全国貯蓄功労者懇談会（東京）	東京（宮城、靖国神社、貯金局、海軍館、歌舞伎座ほか）、福島（墓参）、宮城（吉田本家）

これら 6 回の道外旅行については、それぞれ一定のまとまった記録が「吉田巖遺稿資料」（以下、「遺稿資料」と略記）や吉田巖の著作のなかに確認できる²。このうち学事や社会事業の視察を主目的とした①～③については、日記とは別にポケットサイズの手帳がそれぞれ残されている。とくに台湾旅行に関しては、旅行出発前の下調べの情報から、旅行中の日誌や覚え書き、帰着後の復命書草稿や講演・著作の構想にいたるまで、詳密に書き込まれた手帳が複数冊確認できる。加えて、旅

行の計画から実現に至る過程での北海道庁や河西支庁、さらには台湾総督府や台湾の地方庁との公文書のやりとりや、帰道後に執筆した復命書や講演原稿等がまとまって残されている。吉田の道外旅行に関する資料の一部は「帯広叢書」として翻刻・刊行が進んでいるものの、台湾旅行についてはほとんど未刊行である。吉田の渡道第20年目に計画された台湾視察の足跡をたどることは、北海道における吉田の日常的な活動を理解するうえでも有意義ではないだろうか。

吉田の台湾視察旅行に早い時期から注目したのは、竹ヶ原幸朗である³。近代アイヌ教育の特質を通史的な視野から追究してきた竹ヶ原は、アイヌ学校の教員である吉田が植民地台湾の学事視察を行い、視察の対象として台湾の先住民学校とあわせて、函館の「貧民学校」や大阪の「部落学校」を選んだという事実に着目し、そこに「被抑圧民衆・民族をトータルに把握する視点」を見出すとともに、その吉田を回路としてアイヌ教育の思想・実践を検証するという課題を提示している。

上述したように、「遺稿資料」にはこの台湾学事視察旅行に関わる多彩な資料がまとまって残されている点が特長である。旅行前後にわたり吉田が書き綴った詳細な手記はもとより、関係者と交わした公私文書や視察先で入手した学校資料等の中には国内外の他機関では確認できない貴重な資料が数多く含まれている。これらは、これまでほとんど活用されてこなかったが、狭義の台湾史研究にとって貴重な資料群であるにとどまらず、竹ヶ原が示した視座を引き継ぎながら歴史認識・叙述を深化させていくための手がかりとなるはずである。

既往の研究において、アイヌ政策と台湾先住民政策との類似性が指摘されることはあったけれども、資料の乏しさと資料吟味の乏しさとがあいまって短絡的な指摘にとどまっている感を否めない。ここに吉田巖が集積した台湾関係資料の翻刻テキストを公開し、基礎資料の充実と研究の深化へとつなげたい。

2. 本書の内容

本書には、「吉田巖遺稿資料」中の台湾学事視察旅行関係資料のなかから、とくに、他では入手が困難な情報が含まれる文字資料を優先的に載録することとした。ただし、来翰については、著作権の関係から割愛した。吉田巖による手書きの地図類や、証票等については、画像を含めた紹介が適当であり、別の機会に譲ることとしたい。別稿において「遺稿資料」所収の台湾関係資料の全容と書誌情報を整理・紹介しているので、本書とあわせて参照いただきたい⁴。

「遺稿資料」の多くは、他では得難い濃密な記録である一方、プライバシーや個人の尊厳に関わる問題を含むものも少なくない。既刊の帯広叢書や『吉田巖書誌』においては、資料の公開にあたり、プライバシー侵害のおそれのある情報は伏せるなどの配慮がなされてきた。本書が収録対象としたのは公務による出張の記録ではあるが、なかには個人的な情報も含まれている。資料の利用にあたっては慎重な配慮を要する。

吉田の手記や講演原稿、公刊物の中には、台湾住民に関して、書籍や同行の案内者から得たとおぼしき当時のステレオタイプの把握や描写が散見される。また、それをもとにアイヌと台湾先住民との「類似性」を強調する叙述も少なくない。しかし、多彩で分厚い資料群の中で吉田の詳密な記録を読み解いていくと、一見目につきやすい叙述にのみ着目した議論を拒むような記録が集積さ

れているように感じる。記録・発信の媒体や主な受け手（吉田が想定する読み手、聞き手）によって、叙述の焦点や表現がかなり異なる点も特徴である。本書に掲載する翻刻資料が、アイヌ（政策）と台湾先住民（政策）とを短絡的に比較したり関連づけたりする認識や議論を再生産するのではなく、アイヌ史、台湾先住民史それぞれの研究の深化と、相互の議論の基盤形成につながることを願う⁵。

3. 「台湾学事視察旅行」の実現に至る経緯

資料紹介に先立って、吉田巖の「台湾学事視察旅行」が実現に至る経緯を確認しておきたい。

1926年10月12日、日新尋常小学校に来訪した高橋鋼三（河西支庁視学）と小柳藤太郎（北海道庁学務部属）に対して「道外視察の希望」を切り出した吉田は、「言下にそれはよからん」との同意を得、同年度予算より旅費300円支給の可能性を示されたという⁶。これが具体的な動きとして確認できる最初である。もっとも、「但し単独にて」との条件を視学らが付していることから、吉田が打診したのは個人ではなく団体による視察旅行であった可能性がある。また、当初より「道外視察」の目的地のなかに台湾が含まれていたかは定かでない。

その後、11月9日に「学事視察出張方認可申請」を河西支庁長宛に提出して以降、2度の申請書出し直しを経て、年度を越えた1927年5月19日に北海道庁の出張命令を受け取り、河西支庁との日程協議のうえ、5月28日に慌ただしく帯広を出立する。この間、予期に反して道庁の出張命令はなかなか下りず、吉田の視察計画は二転三転している。1927年正月早々の出発を予定し準備を進めていた吉田は、出立時期の見通しが立たないなかで「沙汰止みになったのではないか」との妻テイの問いかけに不興を隠さず（1927年2月14日条）、年度を越えて高橋視学より書類再提出の指示を受けた際には「熱もさめた今日、実は迷惑でもある」（1927年4月17日条）との所感を日記に記している。台湾の官庁や知友に視察予定を伝え、冬季休業を返上して長期出張に備えていただけに、発令遅延による差し障りは小さくなかったのである⁷。

「遺稿資料」所収の3度にわたる出張認可申請書を対照すると、視察の経路や目的地が変転していることに気づく。吉田の「台湾学事視察旅行」の性格を考えるうえで重要だと思われるので、表2に3度の申請内容の概要を掲げる。

これらを通覧してまず目を引くのは、視察目的として台湾先住民教育の占める位置が変化していることである。すなわち、当初の日程案では台湾よりも本州・九州の視察に多くの日程を割り（移動日を除く21日間のうち13日間）、そのうち郷里福島への訪問が小さくない位置（5日間）を占めていたが、河西支庁（視学、第一課長、支庁長等）との協議を経て、2回目の申請書では福島訪問が削除されるとともに、台湾総督府の「蕃人等教化事業」と府県の「普通教育、特殊教育並ニ社会教育」とがほぼ同じ比重となる。さらに3回目には、書類上の視察目的地が台湾総督府管内に限定される。台湾総督府管内「蕃人等教化事業」の視察は、申請当初より旅程の一部を占めてはいたが、道庁による認可決定が遅延する過程で視察目的の焦点になってきたといえる。

(表2) 吉田巖の台湾旅行に関わる「学事視察出張方認可申請」の概要

回	作成・提出時期	視察地	視察事項	視察日程
1	「学事視察出張方認可申請」(1926年11月9日付、目録番号 I-i-A-3-3b)			
	1926年11月1日、帯広停車場にて台湾行きの陸海経路・時間・運賃等を確認。	台湾総督府管内 福岡、大分、広島、 石川、福島管内	・台湾総督府管内「蕃人等教化事業ノ一般」 ・五県管内「普通教育並ニ社会教育教化事業ノ施設」	時期: 1927年1月6日～2月28日の期間中 日数: 全35日間
	11月9日、河西支庁に出向き、近田第一課長、高橋視学と協議。申請書は「受付あずかり」。			8日間 台湾総督府管内 8日間 福岡、大分、広島、石川 5日間 福島県管内 10日間 陸路往復(帯広-門司) 4日間 海路往復(門司-基隆)
2	「学事視察出張方認可申請」(1926年12月27日付、目録番号 I-i-A-3-12b)			
	1926年11月23日、校長会議の機に那須支庁長より希望日程の打診。	台湾総督府管内 大阪、兵庫、福岡、 大分、広島、長野の管内	・台湾総督府管内「蕃人等教化事業ノ一般」 ・六府県管内「普通教育、特殊教育並ニ社会教育教化事業ト施設」	時期: 1927年1月7日～2月10日 日数: 全35日間
	11月24日、河西支庁に出向き、高橋視学、那須支庁長に面会し、新年早々出発を希望。		・「ソノ他教育上参考事項」	11日間 台湾総督府管内 10日間 六府県管内 10日間 陸路往復(帯広-門司) 4日間 海路往復(門司-基隆)
	12月27日、河西支庁に出向き、高橋視学、近田第一課長、金子属らと日程等打合せ。			
	12月28日、自宅にて申請書調製。			
	12月29日、河西支庁にて金子属と面会。			
3	「学事視察出張方認可申請」(1927年4月27日付、目録番号 I-i-A-3-13)			
	1927年4月17日、官舎に高橋視学を訪問、道庁との協議経過を聴取、書類再提出の指示。	台湾総督府管内	・「蕃人等教化事業ノ一般」 ・「一般教育ノ施設中特色アルモノ」	時期: 1927年度中の校務繁忙を見計らい選定 日数: 全35日間
	4月27日、河西支庁に出向き、高橋視学に申請書提出。		・「ソノ他教育上参考事項」	19日間 台湾総督府管内 10日間 陸路往復(帯広-神戸) 6日間 海路往復(神戸-基隆)

一方、これらの申請書と書翰や日記を対照すると、台湾島内の視察が具体化する経緯が浮かび上がってくる。表3に示したように、吉田は視察の準備過程で複数の台湾関係者より視察地点・経路に関する情報を得ている。このうち台湾総督府文教局学務課長のほかは、個人的な交友関係のある人々である。まず最も古くからの知己である森要人(福島県相馬郡出身)は、吉田の鹿島尋常小学校勤務時(1903～06年)の同僚であり、以来、書翰や短歌のやりとりを重ねてきた間柄である。次いで、花蓮港庁立小学校・公学校の校長3名(山本英雄、山道万寿亀、奥村純太郎)は、1924年6月北海道・樺太学事視察の途次に道庁の紹介により帯広の吉田を訪問しており、これを機縁として絵はがきや児童作品の交換が始まっていた。とくに、猫公公学校や新城公学校の訓導・校長を歴任し、先住民族・漢民族の教育に従事する山本英雄との交流は、吉田が台湾先住民族に具体的な関心を向けるきっかけとなっている。台湾総督府臨時台湾旧慣調査会補助委員、旧慣調査会補助委員として10年以上台湾先住民族の調査に従事した経験^{ペロン}を有する佐山融吉とは、1926年夏に佐山の帯広来訪を機に書翰や絵はがきの交換が始まったばかりである。

(表3) 吉田巖の台湾旅行に向けた主な情報収集

時期	情報源	主な照会事項
1926年11月24日 (12月23日返書)	台湾総督府文教局学務課長	・教育施設一般事項 ・「蕃人教育教化上」特殊施設事項 ・以下の視察候補地・順路 「蕃人教化機関及村落 同化著シキモノ 割合ニ同化ノ度低キモノ」 「内地人蕃人其ノ他混合教育所」
1927年1月4日	三島桂五郎 (帯広中学校長)	・台湾視察談(1926年11～12月に全国校長会議 出席のため台湾出張) ・視察日程、視察箇所、台湾概況
1927年1月21日		・角板山往復交通費
1927年1月9日 (1月14日返書)	佐山融吉 (元台湾日慣調査会補助委員、東京在住)	・「蕃界視察」の経路、必見地点
1927年1月9日 (1月19・21日返書)	山本英雄、山道万寿亀、奥村純太郎 (花蓮港立小・公学校長)	・東部台湾の気候、交通 ・勤務校への順路 ・紅頭嶼視察の可否
1927年1月9日 (1月20日返書)	森要人 (同郷・元同僚、台南中学校教諭)	・台湾旅程案

主な典拠：「昭和二年 台湾旅行」(目録番号 I-i-A-3)、「台湾視察手帖1」(目録番号 I-i-B-3)、「通信簿」(「吉田巖遺稿資料」コピー製本番号155)。

表3に示した視察準備のうち吉田の関心の所在を窺ううえで興味深いのは、次の諸点である。第一に、総督府文教局学務課長宛の照会文書において、視察希望箇所として、先住民教化機関・集落のうち「同化著シキモノ」と「割合ニ同化ノ度低キモノ」、および、「内地人」「蕃人」「其ノ他」の「混合教育所」を挙げていること⁹。第二に、佐山融吉宛の書翰において、「表は学事視察」だが「内容は蕃界の一般状況と出来るならば彼等の家に寝食を共に一泊なりとして見たいといふ希望」を表明していること¹⁰。第三に、東部台湾の先住民居住地——とくに、山本英雄らの勤務地を足がかりとして離島・紅頭嶼の視察を希望していること¹¹。先住民に対する教化・教育の「成果」とともに先住民「本来」の文化・生活を見たいという欲求は当時の台湾視察者のなかにしばしば見られる傾向であるが、吉田の場合はとくに「寝食を共に」との希望を示している点が特徴的である。「混合教育」への言及については、「表」向きの書面ではあるにしても、アイヌ児童と和人児童との「別学」「共学」をめぐる吉田の実践的な関心と無関係ではないだろう¹²。

佐山、山本、森らより得た詳細な返書の内容は、3回目の認可申請書(1927年4月27日付)に反映しているほか、手帳の冒頭に転記されている。実際の台湾島内の視察行程は、台北到着後、台湾総督府文教局学務課にて警務局理蕃課と協議のうえ確定することとなるが¹³、「特に余の希望を参考として」¹⁴作成されたというその行程表にも、各人の助言の主要な内容および勤務校が盛り込まれている。吉田の台湾島内視察行程が具体化するうえで台湾関係の知己からの情報は重要な意味を有し、さらには、台湾在住の知己の存在そのものが台湾視察実現の土台であったといえる。

¹ 小林正雄・帯広市教育委員会社会教育課編『吉田巖伝記資料 帯広市社会教育叢書 No.9』(帯広市教育委員会、1964 年)。以下、『帯広市社会教育叢書』(No.1-15) および『帯広叢書』(No.16-65) をあわせて、「帯広叢書」と略記する。

² 全 6 回の道外旅行に関する主要な資料を、「遺稿資料」、吉田著作(刊行物)、「帯広叢書」に大別して以下に掲げる。

①遺稿資料:「〔大正十一年 関西出張視察手帖〕」*

帯広叢書:『吉田巖日記 第十三』(帯広叢書 No.32)**

②遺稿資料:「台湾旅行資料」(箱番号 40)、「〔台湾視察手帖 1〕」、「〔台湾視察手帖 2〕」、「台湾視察に関する講演要旨」(箱番号 40)

吉田著作:『台湾学事調査復命書(写)』(清田印刷所、1927 年)、『台湾の旅』(清田印刷所、1927 年)、『心の碑』(北海出版社、1935 年)

③遺稿資料:「北海道社会事業視察団視察経過報告書(写)」(箱番号 79)、「北海道社会事業視察団視察日程」(箱番号 79)、「北海道社会事業視察団視察団員名簿、調査資料目録」(箱番号 79)

帯広叢書:「日記 3-11 吉田巖日記(昭和 10 年 4 月～6 月)」(『吉田巖資料集 12』帯広叢書 No.46、2001 年)、「調べ書き 2 昭和 10 年全日本方面委員大会・参加出納簿他」(『吉田巖資料集 14』帯広叢書 No.48、2002 年)、「調べ書き 3 昭和 10 年全日本方面委員大会・旅中メモ他」(同前)

④遺稿資料:「観菊御会御召宴拝載の光栄に対して」(箱番号 79)、「観菊御会御召宴拝戴記」(箱番号 94)

吉田著作:「観菊御会御召宴拝戴記」(『北海道社会事業』第 44 号、1935 年 12 月)、「観菊御会御召宴の光栄に浴して」(『帯広市教育』第 4 号、1936 年 1 月)

帯広叢書:「日記 3-13 吉田巖日記(昭和 10 年 10 月～昭和 11 年 3 月)」(『吉田巖資料集 14』帯広叢書 No.48、2002 年)、「著作原稿 1 観菊御会御召宴拝戴に対する祝辞類」(『吉田巖資料集 15』帯広叢書 No.49、2003 年)

⑤遺稿資料:「紀元 2600 年式典参列記」(箱番号 79)

吉田著作:「紀元二千六百年式典・奉祝会参列記」「式典・奉祝会に参列して」(『北海道社会事業』第 103 号、1940 年 12 月)

⑥著作(発言記録):『篤志家に聴く 貯金奨励の体験』(貯金局、1943 年 6 月)

* 資料名は、吉田巖「吉田巖蔵品目録」によった。

** 1922 年の日記には、「八月一日より二十三日まで府県の教育、社会施設視察のため記入はない。(別冊に復命書として記録。)」(『吉田巖日記 第十三』帯広叢書 No.32、17 頁)と記載があるが、この「復命書」は未見。

以上のほか、①③④⑤⑥については、吉田自身が手記や日記から関連記事を転写し、稿本「吉田巖紀行文集」(1946 年 12 月 28 日付)としてとりまとめている(箱番号 40)。なお、小川正人編『吉田巖書誌』(北海道立アイヌ民族文化研究センター、2008 年)では、これらのほかに関連文献・記事を総覧することができる。

³ まとまった論述があるものとして、①「吉田巖の台湾学事調査」(『朝日新聞』1978 年 1 月 31 日付夕刊)、②「吉田巖の台湾学事調査」補論」(『道歴研会報』第 14 号、1978 年 11 月)、③「アイヌ教育(史)研究の視点」(『地方史研究』第 29 巻第 5 号、1979 年 10 月)、④「近代日本のアイヌ教育 一同化教育の思想と実践」(『北海道の研究 6 近現代編Ⅱ』清文堂、1983 年)。このうち③④は、『竹ヶ原幸朗研究集成 第 1 巻』(社会評論社、2010 年)に再録。

⁴ 前掲「「吉田巖遺稿資料」所収の台湾関係資料：概要と目録」(『教育史・比較教育論考』)。

⁵ この点に関わって、「被抑圧民衆・民族をトータルに把握する視点」の重要性を早い時期から見据えていた竹ヶ原が、その後の研究において、アイヌ教育と台湾先住民教育との対比や関連づけを急ぐのではなく、個別実証研究を蓄積しつつアイヌ教育史の通史叙述を深化させてきたことの意味は小さくないと考える。

⁶ 井上寿・吉田ヨシ子編『吉田巖日記 第十四』(帯広叢書 No.33、1992 年)。

⁷ 道庁が出張命令を決裁する過程で、日新尋常小学校の授業や校務への影響はほとんど考慮されていない。吉田としては年始および冬季休業期間を活用するつもりで準備を進めていたが、1927 年 1 月 6 日付で北海道庁属小柳藤太郎より「二月上旬か下旬派遣致度考慮中」ゆえ「其の以前は休業せずに授業を続け待命相成度」との内報を受ける(目録番号Ⅲ-ii-17-1)。これにしたがい冬季休業期間中も臨時時間割で授業を継続したところ、2 月末になっても辞令はおりず、3 月 1 日に冬季休業の繰り下げ実施に踏み切る。吉田が支庁視学より「二月頃は学務部長もあまり日が短いので、季節がわるいといふ理由でそのままになって居た」との経緯を伝え聞いたのは 4 月半ばである(「吉田巖日記」1927 年 4 月 17 日条)。結果的に、新学期開始後まもない時期に 1 ヶ月以上の不在を余儀なくされる。

⁸ 福島訪問については、「明治三十九年渡道以来二十年日ノ祖先展墓ヲ兼ネ実兄(本家)ノ病氣看護ノタメ」、視察日程の一、二日間を郷里滞在に割きたいとの希望が申請書に記されている。

⁹ 「〔発翰控 台湾総督府文教局学務課長宛〕」(目録番号 I-i-A-3-5)。なお、同照会への回答としては、台湾総督府編『台湾の教育』と台湾教育会編『台湾の旅』を受領したことを確認できるのみで、学務課長名の返書は未確認である。

¹⁰ 「〔発翰控 佐山融吉宛〕」(目録番号 I-i-A-3-8)。

¹¹ 「〔発翰控 新城、吉野、玉里各学校長宛〕」(目録番号 I-i-A-3-7)。

¹² 台湾には日本人と先住民との「混合教育所」と捉えうるような初等教育施設は存せず、「混合教育」のケースはごく例外的である。この事実を吉田がどのように見たのか、復命書等において直接的な論述はみあたらない。関連しそうなことがらとして、帰道後のメモに、「制度ノ上 内台蕃 ヲ通シテ義務制ヲシカズ」「国語常用非常用ニテ学校ヲ異ニシ何等種族的特異ノ区別ナシ」との記述がある(「〔手帖 台湾談、秩父宮奉迎送〕」目録番号 I-i-B-5)。普通行政区域における初等教育制度が小学校・公学校の二系統からなり、前者は「国語ヲ常用スル者」、後者は「国語ヲ常用セサル者」を対象とすること、いずれも本国の小学校令の定める就学義務が制度上適用されないことへの言及である。制度上の区別が「種族」を指標としたものではない点に関心を払っているかのようである。

¹³ 「北海道日新尋常小学校長視察日程」(目録番号 I-i-A-3-28b)。

¹⁴ 「〔台湾視察手帖 1〕」1927 年 6 月 6 日条(目録番号 I-i-B-3)。

凡 例

1. 旧字・俗字・異体字は、原則として現行通用のものに改めた。変体仮名や合字は、現行通用の平仮名とした。
2. 平仮名・片仮名の表記、および、濁点の有無は、原則として資料にしたがった。
3. 句読点は、適宜これを補った。
4. 振り仮名は、原則として資料にしたがい表記した。難読地名等に振り仮名を付す場合には、〔 〕内に記した。
5. 誤記・脱字と判断される箇所に関しては、傍注として〔ママ〕を付すか〔 〕内に正しいと思われる表記を示した。
6. 資料に空白がある場合には資料にしたがい空白とし、空白の内容を推定できる場合には傍注として〔 〕内に記した。
7. 判読不能の箇所には、おおよそ文字数分の□を記した。
8. 個人情報を伏せた箇所には、xxxを記した。
9. 吉田自身が字句を削除している場合、判読可能な場合は〔 〕内に記した。ただし、煩瑣にわたる場合、適宜省略した。
10. 吉田自身が行間や欄外等に字句を挿入している場合、本文に挿入し〈 〉内に記した。筆記具等の異同から追記だと判断される場合も、〈 〉内に記した。
11. 編者による注記・補記は、上記の例を含め、〔 〕内に記した。
12. 本書で用いた「目録番号」は、北村嘉恵「吉田巖遺稿資料」所収の台湾関係資料：概要と目録』（『教育史・比較教育論考』第21号）に準拠している。注記等においては【 】内に記した。

資料細目

1. 文書

- 1 「身分証明書」(目録番号 I-i-A-1)
- 2 「台湾学事調査出張命令」(目録番号 I-i-A-2)
- 3 「昭和二年 台湾旅行」(目録番号 I-i-A-3)
 - 3-1 台湾学事調査復命ニ関スル件〔控〕
 - 3-2 土人小学校教員出張ニ関スル件
 - 3-3a 教員学事視察出張方認可申請ニ関スル件〔控〕
 - 3-3b 学事視察出張方認可申請〔控〕
 - 3-4 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕
 - 3-5 〔発翰控 台湾総督府文教局学務課長宛〕
 - 3-6 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕
 - 3-7 〔発翰控 新城、吉野、玉里各学校長宛〕
 - 3-8 〔発翰控 佐山融吉宛〕
 - 3-9 〔発翰控 台湾総督府文教局学務課長宛〕
 - 3-10 〔発翰控 新城、吉野、玉里各学校長宛〕
 - 3-11 発翰控 台湾総督府文教局学務課長宛〕
 - 3-12a 学事視察出張方認可申請ニ関スル件〔控〕
 - 3-12b 学事視察出張方認可申請〔控〕
 - 3-13 学事視察出張方認可申請〔控〕
 - 3-14 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕
 - 3-15 〔発翰控 新城、吉野、玉里各学校長宛〕
 - 3-16 〔発翰控 台湾花蓮港庁長中田秀造宛〕
 - 3-17 〔発翰控 台湾総督府文教局学務課長宛〕
 - 3-18 〔発翰控 台湾総督府理蕃課長宛〕
 - 3-19 〔発翰控 台湾花蓮港庁宛〕
 - 3-20 〔発翰控 台湾台東庁宛〕
 - 3-21 台湾ニ学事調査ノタメ出張拝命ニツキ陳述事項
 - 3-22 〔発翰控 台湾総督府文教局学務課長宛〕
 - 3-23 視察日程経過要覧
 - 3-24 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕
 - 3-25 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕
 - 3-26 台湾学事調査復命書提出期限ニ関スル件
 - 3-27 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕
 - 3-28a 台湾学事調査復命ニ関スル件〔控〕
 - 3-28b 北海道日新尋常小学校校長視察日程
 - 3-29 〔台湾学事調査復命書(写)寄贈の件〕
 - 3-30 〔台湾学事調査復命書(写)寄贈の件〕
 - 3-31 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕
 - 3-32 〔発翰控 河西支庁視学高橋綱三郎宛〕
 - 3-33 〔台湾学事調査復命書(写)贈呈の件〕
 - 3-34 〔発翰控 河西支庁視学高橋綱三郎宛〕

- 3-35 〔台湾学事調査復命書（写）発送の件〕
- 3-36 台湾学事調査復命書（写）受領ノ件
- 3-37 〔台湾学事調査復命書（写）配付の件〕
- 3-38 〔台湾学事調査復命書（写）受領の件〕
- 3-39 出版物発行届〔控〕
- 3-40 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕
- 3-41 請求書〔控〕
- 4 〔台湾視察手帖 1〕（目録番号 I-i-B-3）
- 5 〔台湾視察手帖 2〕（目録番号 I-i-B-4）
- 6 〔手帖 台湾談、秩父宮奉迎送〕（目録番号 I-i-B-5）
- 7 〔購入物品一覧〕（目録番号 I-i-B-11）
- 8 〔購入絵はがき一覧〕（目録番号 I-i-B-12）
- 9 〔蓬萊小学校長より聞きたる美談〕（目録番号 I-i-B-15）
- 10 「「台湾視察」ニツキ講演要旨」（目録番号 I-i-B-17）
- 11 「帯広仏教青年会ニテ講演大要」（目録番号 I-i-B-18）
- 12 「アイヌ学校教師の目に映じたる生蕃人」（目録番号 I-i-B-19）
- 13 「台湾学事関係文献資料」（目録番号 I-i-B-20）
- 14 「花蓮港庁新城公学校 種族別部落別児童一覧」（目録番号 I-i-C-1）
- 15 「台東鉄道全通記念 蕃曲」（目録番号 I-i-C-7）
- 2. 書翰（吉田巖発翰）
 - 1 絵はがき 日新尋常小学校児童一同宛（目録番号 Ⅲ-i-2）
 - 2 はがき 吉田テイ宛（目録番号 Ⅲ-i-3）
- 3. 「吉田巖日記」
 - （『吉田巖日記 第十四』帯広叢書 No.33）
- 4. 新聞記事
 - 〔日新〕
 - 1 「吉田新校長 蕃童学校視察」『十勝毎日新聞』（目録番号 V-1）
 - 2 「生蕃教育調査」『旭川新聞』（目録番号 V-2）
 - 3 「日新小学校長 台湾出張」『十勝毎日新聞』（目録番号 V-3）
 - 4 「〔消息〕」『小樽新聞』（目録番号 V-4）
 - 5 「愛奴研究の吉田先生が 生蕃研究の報告を発表」『十勝新報』（目録番号 V-5）
 - 6 「新刊紹介 台湾学事復命書（写）」『十勝新報』（目録番号 V-6）
 - 7 「帯広在伏古のアイヌ学校」『東京日日新聞』（目録番号 V-12）

1. 文書

1 「身分証明書」(目録番号 I-i-A-1)

身分証明書

北海道河西郡帯広町基線西二十五番地

吉田 巖

明治十五年七月六日生

右本校訓導兼校長タルコトヲ証明ス

大正十五年八月十八日

北海道河西郡日新尋常小学校校長吉田巖〔公印〕

一、本証明書ハ他人ニ貸与シ又ハ譲渡スヘカラス

一、本証明書ハ乗車船中必ス携帯スヘシ

一、本証明書ハ鉄道係員ノ請求アリタルトキハ何時ニテモ呈示スヘシ

一、本証明書ヲ亡失シタルトキハ直チニ学校長ニ届出ツヘシ

一、新ニ証明書ノ交付ヲ受ケタル場合又ハ職員ニシテ其ノ職ヲ退キ学生生徒ニシテ進級シ若シクハ卒業退学ニヨリ学籍ヲ離レタルトキハ直チニ本証明書ヲ学校ニ返附スヘシ

一、本証明書有効期間ハ発行ノ日ヨリ一ヶ年間トス

- ▶ 7.9cm×12.0cm、両面。ペン書き。「台湾視察手帖1」に記された携帯品一覧のなかに「身分証明書」とあり(【I-i-B-3】)。

2 「台湾学事調査出張命令」(目録番号 I-i-A-2)

北海道河西郡日新尋常小学訓導兼校長

吉田巖

学事調査ノ為台湾ニ出張ヲ命ス

昭和二年五月十五日

北海道庁

- ▶ 「吉田巖履歴」(『吉田巖伝記資料』帯広叢書 No.9)所収。日記に「午前九時半、台湾学事調査のため出張命令書郵着。ここにはじめて一安堵」と記述あり(1927年5月19日条)。

3 「昭和二年 台湾旅行」(目録番号 I-i-A-3)

- ▶ 19.5cm×28.0cm。こより綴じて厚紙表紙を付した簿冊。表紙に「昭和二年 台湾旅行」と鉛筆書き。以下の【3-1】～【3-41】を所収。

3-1 台湾学事調査復命ニ関スル件〔控〕

昭和二年九月五日

北海道河西郡日新尋常小学校校長

吉田巖

北海道庁

台湾学事調査復命ニ関スル件

本年五月十七日附御発令ニカ、ハル 小職台湾学事調査報告別冊復命書ノ通りニ有之候条此段及提出候也

右調査ニ対シ特ニ台湾総督府文教局学務課ニ於テ同理蕃課ト打合セラレタル結果視察日程ヲ示サレ府管内関係官公衙学校ニ通知ノ上便宜ヲ与ヘラレタル謄写物一葉為念添付致候

- ▶ 本文中「別冊復命書」の写しにあたるのが、吉田巖『台湾学事視察復命書(写)』(清田印刷所、1927年)。
- ▶ 本資料【3-1】と後掲【3-28a】は同一内容。形態上に以下のような相違点あり。【3-1】は「河西郡公立日新尋常小学校」罫紙、「契」の割印2箇所、「謄写物一葉」添附なし。【3-28a】は無地、「契」の割印1箇所、「謄写物一葉」添付あり(【3-28b】)。
- ▶ 日記に関連記事あり。

3-2 土人小学校教員出張ニ関スル件

教第五二六号

昭和二年五月十八日

河西支庁長那須正夫〔公印〕

日新尋常小学校長吉田巖殿

土人小学校教員出張ニ関スル件

別紙ノ通り出張命令相成候処左記御了知相成度
此段及通牒候也

記

一、旅費 金貳百円支給

一、視察終了帰校ノ上ハ五十日以内ニ実行日程
ニ詳細ナル復命書ヲ提出スルコト

- ▶ 「別紙」欠。
- ▶ 1927年5月16日付小柳藤太郎来翰にて、本
庁より旅費200円支給に決定、いずれ支庁よ
り正式通牒ある旨の内報あり(【Ⅲ-ii-17-3】)。

3-3a 教員学事視察出張方認可申請ニ関スル件

〔控〕

伏第三〇号

大正十五年十一月〈九〉日

河西郡日新尋常小学校長吉田巖

〈河西支庁長那須正夫殿〉

教員学事視察出張方認可申請ニ関スル件
当校吉田訓導提出ニカ、ハル学事視察出張方認
可申請書壱通別紙ノ通りニ候条御詮議被成下度
進達ニ及ヒ候也

3-3b 学事視察出張方認可申請〔控〕

学事視察出張方認可申請

日新尋常小学校 受	付 大正十五年十一月九日
--------------	--------------

私儀

左記要項ノ予定ヲ以テ学事視察致度候ニ付御詮
議被成下度此段申請候也

大正十五年十一月〈九〉日

河西郡日新尋常小学校訓導

吉田巖

〈河西支庁長那須正夫殿〉

記

一、出張期間 自大正十五年一月六日至同二月
二十八日期間ニ於テ約五週間(但例規ニヨ
ル毎年一月二十日ヨリ二月八日ニ至ル二十
日間ノ冬季休業ヲ含ム)校務ノ繁閑見計ラ
ヒ次第トス

二、視察地 台湾総督府管内及福岡、大分、
広島、石川、福島五県下管内

三、視察日程

往復陸路(帯広門司間)十日、同海路(門司
基隆間)四日 計十四日ヲ控除シ他ノ二十
一日間ノ配当左ノ予定

八日間 台湾総督府管内

八日間 福岡、大分、広島、石川四県管内

五日間 福島県管内

四、視察事項

イ、台湾総督府管内蕃人等教化事業ノ一般
ロ、福岡外五県下普通教育並ニ社会教育教化
事業ノ施設

備考

イ、旅費 特別旅費額適宜御支給被成下度

ロ、汽車、汽船ノ日時延長ノタ〔メ〕實際ニ
十一日間配当府県下予定ノ如クナラサル場
合ハ臨機短縮スルコト

ハ、郷里福島県中村ハ明治三十九年渡道以来
二十年目ノ祖先展墓ヲ兼ネ実兄(本家)ノ
病氣看護ノタメ視察日程ノ一二日間ヲ容認
被成度

- ▶ 日記によれば、1926年11月9日、放課後に
河西支庁へ出向き近田留四郎第一課長と面会、
「府県出張の件」につき協議。

3-4 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕

拝啓 晩秋之候貴官益御隆昌に涉らせられ候段
奉大賀候 さてかねて申上置候道外視察の件に
つき 小職その恩命を拝しこゝに実現の榮に浴し
候ことこれひとへに貴官格別御尽力の賜に外な
らす千万有り難く厚く御礼申上候 且又過額の
旅費まで特に御計上被成下候御厚配に預り居候
由 那須河西支庁長殿並に高橋視学殿を通して
拝聴深く感謝罷在候 就候ては年末にも差迫り
居候まに第二学期のくゝりをつけ来年一月早々
出張致度希望に有之かたへ当支庁には口頭にて
具申致置候 一月一日以降二月八日の間は年
始冬季休業を通し前後約四週間例規による休業
を利用し其の間に約十日の正課日を支障なき範
囲に於て繰合せ度見込 あはせて開申致置候条
御含置被成下 此上とも何分の御厚配相仰上度
伏して奉願上候 いづれ往復機を得て参庁拝姿
御礼相述可中心组に候へとも右乍略儀書中を以
て不取敢御挨拶の□□辞迄申上度 乍末筆時下
向寒の砌御自愛專一に遊され度奉祈上候 謹
言

大正十五年十一月二十六日

日新小学校長 吉田巖

北海道庁学務部属小柳藤太郎殿

3-5 〔発翰控 台湾総督府文教局学務課長宛〕

拝啓 愈々御隆昌ニ涉ラセラレ候段奉大賀候
サテ 私事目下肩書ノ通り在勤候処 今般北海道
庁ヨリ 貴府管内学事視察ノタメ出張命令相受
来十六年一月二日任地発ノ予定ニ有之候ニ付テ
ハ此ノ際御繁務中誠ニ恐縮ニ存候ヘ共追テ参庁
親シク左記事項特ニ御垂教相仰上度候中心组ニ候
条何卒特別ノ御詮議ヲ以テ御便宜ヲ垂レタマハ
リタク右予メ奉悃願候 敬具

大正十五年十一月二十六日

北海道河西郡日新尋常小学校長

吉田巖

〔課〕
台湾総督府学務部長 殿

記

- 一、貴府管内教育施設一般事項
- 二、貴府管内蕃人教育教化上特殊施設事項
- 三、貴府管内日程約七日ヨリ十日間ニシテ左記
ノ一般ヲ視察シ得ヘキ地点並ニ順路

イ、蕃人教化機関及村落 同化著シキモノ
割合ニ同化ノ度低キモノ

ロ、内地人蕃人其ノ他混合教育所 ソノ他

以上

備考 私事明治三十九年以来北海道旧土人教育ニ
従事 胆振、日高旧土人学校ヲ経テ肩書ノ
庁立土人学校ニ十一箇年勤続、旧土人保導
委員ヲ道庁ヨリ囑託セラレ カタハラ土俗
ノ研究ニモ趣味ヲ有シ居リ候ニツキ今回ハ
カラスモ年来ノ希望渡台ノ機ヲ得候ハ、短
時日ニ於テ予期ノ幾分ナリトモ調査致度
ヒトヘニ御援護奉願上候 別便アイヌ民話、
当校要覧、同絵葉書、各壺部御参考マテニ
献呈致候条御査収被成下度奉願上候

3-6 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕

拝啓

御諒闇につき謹んで年頭の賀詞御遠慮申上居候
然る処此度は貴庁の格別なる御詮議を以て道内
教員若干名府県視察の恩命に接すべく 二月中
御派遣の御内儀の趣 態々御内報忝ふし謹んで
感謝仕候 不肖もその壺名に御加へ下され候趣
の旨これ皆ひとへに 貴台御始め辱知各位の深
厚なる御庇援の賜と偏に感銘此事に存候 つき
候ては御仰越の通り精々校務滞なく処理待命可
仕中心组に御座候 右不取敢御挨拶まで申上度如
此に御座候 敬具

昭和貳年壹月九日

日新尋常小学校長 吉田巖

北海道庁学務部教育課

北海道庁属小柳藤太郎殿

3-7 〔発翰控 新城、吉野、玉里各学校長宛〕

拝啓 御諒闇のため謹んで年賀欠礼いたしました

さて先年 貴台御一行遠く御来道の途次 特に当校に御来駕を忝ふしまして頗る感銘いたし
爾来日夕貴府管内御教育状況にあこがれの目を
以て憧憬を禁じえませんでした 然る処北海道
庁に於て府県視察者若干名二月中派遣の内儀に
有之 小職もその一名に加へらるゝを仕合せを得
まして夫々準備中であります つきましては
貴総督府にも御伺ひ参考資料等御恵与を忝ふし
て大要は知悉いたすことは出来ましたが 主に
西海岸は割合交通も易きかと想像いたしますが
小職の目的並に参考いたしたい東海岸の交通要
所は遺憾ながら予備知識を有しません まことに
恐入りますが殊に御繁忙中失礼であります
が左記事項御承知の範囲に於いて御高教を仰くを
得ますれば幸甚これに過ぎません 何卒ひとへ
によりしく御願申上げます 先は御無音御詫と
共に御願まで申上げます 敬具

昭和二年一月九日

北海道帯広町伏古

日新小学校内 吉田巖

記

- 一、貴校への順路、里程（海路、陸路）並に汽船賃等（蘇澳又ハ高雄ノ イツレヨリスルヲ便トシマスカ）
- 二、二月頃の服装並に雨具等の要不要
- 三、貴地方に限り特に旅行上の注意
- 四、紅頭嶼ハ視察容易デセウカ

3-8 〔発翰控 佐山融吉宛〕

拝啓 筆硯益御豊にあらせられますことをおよろこび申上げます

昨夏は特に御来駕を忝ふしまして まことに失礼申上げましたことを おくれなから御詫申上げます 御令兄様の御邸に伺出ましていろいろ
拝承爾来御無沙汰申上げましたにかゝらず
却りて御鄭重なる御芳墨再度まで頂戴いたし深謝いたす次第であります 何分将来よろしく御指導の程伏して祈上げます

さて 私事公務の都合上 来月初旬頃当地発 台湾に一ヶ月ほど出張の予定であります 但私事とことなり思ふほどに蕃界の視察は遂げ得られまいと遺憾に存じます のみならずこの方面の予備知識悉無之事とて一層の不便を感じる処であります 大要西海岸を北より南に 出来得れば紅頭嶼に寄り 台東から花蓮港庁東海岸の蕃地をめぐって蘇澳に出てゝ一週したいと考へますが ほんの素人の計画で可能かどうかわかりませんが 何と申してもこの道に於かせられて第一人者としてかくれなき 貴台の御指導を仰かねば叶はぬことを痛感いたします。単に表は学事視察ではありますが 内容は蕃界の一般状況と出来るならば彼等の家に寝食を共に一泊なりとして見たいといふ希望であります つきましてはまことに申かねますが この研究方面より見て是非見おとすへからさる地点やあらかじめ心得おくべき参考事項の一つなりと万に御垂教の榮に浴することか出来すれば幸甚これにすぎません 右御無沙汰のごあいさつをかね失礼ながら御繁忙中をかへり見す御願まで申上げます 末ながら御令兄様並に御令姉様にもよろしく御鳳声の程伏して祈上げます 拝具

昭和二年一月九日

吉田巖拝

佐山融吉様

御侍史

3-9 〔発翰控 台湾総督府文教育局学務課長宛〕

拝啓 益御清穆御座遊され候段奉慶賀候 さて客年中 小職貴府管内に出張準備のため参考事項御伺のため呈書仕候処早速御聞届被成下特に「台湾の教育」並に「台湾の旅」各壺部御恵与之榮に浴し忝く拝受仕候 御蔭様にて詳細の知識を得視察の上に意を強う致し候事を感謝仕候尚出発期日は北海道庁よりの内報に接し 二月中に繰下処理の都合に相成申候に付 自然参庁の期も相おくれ申す可く 然様御諒承たまはり度 先は遷延ながら御礼の辞迄申述度如此に御座候 敬具

昭和貳年壹月九日

北海道河西郡帯広町

北海道庁立日新尋常小学校長吉田巖
台湾総督府文教育局学務課長殿

3-10 〔発翰控 新城、吉野、玉里各 schools 校長宛〕

拝啓 益々御清適御座遊され候こと、奉遥賀候さて本年一月九日附を以て 貴府管内視察上参考事項御伺上申上候ものに対し 早速御聞届の上 御懇篤なる御教示を賜はり千万鳴謝奉り候右拝受は二月二日のことゝて 恰も出発予定の二月中にはまことに好都合に有之一層計画上期待多く 是非貴庁管内に伺上度意を強うし発令相待居候も 何等かの事情によると相見え二月中遂に公報に接せず甚遺憾に存居候 最早年度末新年度始にて こゝしばらくは発令覚束なく随つて折角の御厚志にも今直ちに拝眉御礼申述候運びと相成兼候ことを残念に不堪候 然しなから御蔭様にて意外なる知識を得候上 更に他日の好資料と相成候をくれへも感謝仕候 先は其の後の経過御報告をかね乍遷延御礼と御詫まで如此に御座候 敬具

昭和二年三月一日

北海道帯広町伏古

日新尋常小学校内 吉田巖

〈山本新城、山道吉野、奥村玉里各校長〉殿 侍史
当十勝地方ハ本年に限りめづらしくも降雪の度少く寒気は最低三一・四度に止り雪は庭前二三尺位有之候 三、四月頃に時々大積雪を見候へども 客年十一月十四日初雪以来三日位にて今日まで晴つゞき十勝風のみ強く荒み居候
〈御恵与の地図 御芳情の程永く記念として活用可仕候〉

▶ 罫紙欄外に「契」の割印 3 箇所押印。それぞれに「山本」「山道」「奥村」と墨書。

3-11 〔発翰控 台湾総督府文教育局学務課長宛〕

拝啓 益々御清穆奉慶賀候 さて本年一月九日付を以て御礼をかね申上置候 小職貴管内出張の予定期間二月中と相成居候処 昨末日まで庁よりの発令に接せず候ため自然延期或は中止等いつれの確報を見ざるにより遂にその期を逸し候次第 何分の御賢察仰上度 右御詫かたへ御届申上候 敬具

昭和二年三月一日

北海道河西郡帯広町

北海道庁立日新尋常小学校長吉田巖
台湾総督府文教育局学務課長殿

3-12a 学事視察出張方認可申請二関スル件〔控〕
伏第三七号

昭和元年十二月二十七日

河西郡日新尋常小学校長吉田巖

河西支庁長那須正夫殿

学事視察出張方認可申請二関スル件

別紙教員学事視察出張方認可申請書壺通御詮議被成下度進達ニ及ヒ候也

3-12b 学事視察出張方認可申請〔控〕

学事視察出張方認可申請

私儀

左記要項ノ予定ヲ以テ学事視察ノタメ出張致度候ニ付御詮議被成下度此段及申請候也

昭和元年〈十二〉月〈二十七〉日

河西郡日新尋常小学校長吉田巖

河西支庁長那須正夫殿

記

一、出張期間 自昭和二年一月七日至同年二月十日往復五週間ノ予定

二、視察地 台湾総督府並ニ大阪府、兵庫県、福岡県、大分県、広島県、長野県各管内

三、視察日程

月 日 摘 要

一月七日 任地発、根室本線帯広ヨリ函館、青森

一月十一日 汽船連絡、羽越、信越、北陸、山陰各本線經由直行

一月十二日 門司着、連絡船ニ乗り台湾基隆ニ向フ（舟中三泊）

一月十五日 基隆上陸、台北下車 一泊

一月十六日 台北市、総督府、博物館、蓬萊公学校視察 一泊

一月十七日 台北発、桃園下車、角板山蕃童教育所部落視察 桃園一泊

一月十八日 桃園発、台中着 一泊

一月十九日 台中市場ソノ他視察 彰化一泊

一月二十日 彰化発、台南着 一泊

一月二十一日 台南市内各公学校ソノ他視察、基隆ニ向フ（車中一泊）

一月二十一日 基隆下車、花蓮港庁ニ向ケ乗船（船中一泊）

一月二十二日 花蓮港庁上陸、東海岸、吉野公学校視察 吉野泊

一月二十三日 吉野発、玉里公学校視察 玉里泊

一月二十四日 玉里発、新城公学校視察 新城泊

一月二十五日 花蓮港庁、乗船、基隆寄港

一月二十六日 基隆ヨリ門司直航（舟中三泊）

一月二十九日 門司上陸、日豊線宇佐着 一泊

一月三十日 宇佐発、大分下車 県庁、学校視察

一月三十一日 大分発、博多着 一泊

二月一日 福岡県庁ソノ他視察、門司帰着 一泊

二月二日 門司発、山陽線広島着 一泊

二月三日 広島県庁、高師学校視察、山陽線岡山下車 一泊

二月四日 岡山発、山陽本線、兵庫県立土山学園視察、尼崎着 一泊

二月五日 尼崎発、大阪下車、大阪市立有隣尋常小学校視察 一泊

二月六日 大阪発、名古屋經由、長野下車 一泊

二月七日 長野市役所、県庁出頭、長野発

二月八日 北陸本線、信越、羽越各線經由

二月九日 同函館本線、函館発、帯広ニ直行

二月十日 帰任

四、視察事項

イ、台湾総督府管内蕃人等教化事業ノ一般

ロ、府県下普通教育特殊教育並ニ社会教育教化事業ト施設

ハ、ソノ他教育上参考事項

備考

イ、交通機関ト天候等トノ都合ニヨリ日程ニ多少変更ノ止ムナキ場合ニハ臨機ノ処置ヲ講スルコトアルヘシ

ロ、旅費ハ特別旅費トシテ適宜補助セラレムコトヲ願候

- ▶ 日記によれば、1926年12月27日午後、河西支庁へ出向き、高橋綱三郎視学、近田留四郎第一課長、金子英三属らと面会、出張日程につき協議。翌28日には「終日、報告書や視察出張認可書調製にてひきこも」り、29日に改めて支庁を訪れ、金子属と面会。

〇3-13 学事視察出張方認可申請〔控〕

学事視察出張方認可申請

私儀

別記要項ノ予定ヲ以テ学事視察ノタメ出張致度
候ニ付御詮議被成下度此段及申請候也

昭和二年 月 日

河西郡日新尋常小学校長

吉田巖

殿

〈四月二十七日河西支庁ニ直接提出ス〉

記

一、出張期間 昭和二年度内ニ於テ校務繁閑季
節ヲ選ミテ往復五週間以内ノ予定

二、視察地 台湾総督府管内

三、視察日程

日 次 摘 要

第一日 任地発、根室本線帯広ヨリ函館青森汽
船連絡、羽越、信越本線等經由、山陰
本線神戸直行

第二日

第三日

第四日 前記直行着、神戸基隆間連絡船ニテ基
隆直航

第五日

第六日

第七日 前記直航基隆着上陸、台北下車、台湾
神社参拝 一泊

第八日 市内、総督府、博物館、蓬萊公学校、
研究所、龍山、劍潭寺視察 北投一泊

第九日 北投発、桃園下車、大溪經由、角板山
ニ向フ

第十日 角板山蕃童教育所部落視察、帰来、桃
園着 一泊

第十一日 桃園発、台中着 一泊

第十二日 台中市市場、八卦山視察、彰化着 一泊

第十三日 彰化発、鹿港視察、嘉義下車、呉鳳廟
視察 一泊

第十四日 嘉義発、森林鉄道ニヨリテ阿里登山
一泊

第十五日 下山、嘉義ヨリ北港ニ着、媽祖廟等視
察、台南着 一泊

第十六日 台南市各公学校、開山神社、孔子廟、
赤崁楼等視察、高雄着 一泊

第十七日 東海岸台東行汽船ニテ高雄発直航（紅
頭嶼寄港）

第十八日 台東上陸、附近蕃社視察 一泊

第十九日 台東発、鉄道ニヨリ玉里下車、公学校
視察、瑞穗着 一泊

第二十日 瑞穗発、馬太鞍、太巴・両蕃社公学校
視察、鳳林着 一泊

第二十一日 鳳林発、寿下車、同小学校、初音、洞
門各小学校、^{〔薄〕}蒲々公学校視察 一泊

第二十二日 ^{〔薄〕}蒲々発、花蓮港庁小学校、同公学校、
農業補習学校視察、吉野着 一泊

第二十三日 吉野発、同小学校視察、新城着、同公
学校及北埔校、蕃社視察 一泊

第二十四日 花蓮港庁ヨリ連絡船ニ乗り東海岸蘇
澳ニ向ケ直航

第二十五日 蘇澳上陸、同地ヨリ鉄道ニヨリ基隆ニ
着、下車

第二十六日 基隆神戸間連絡船ニヨリ神戸ニ向ケ
直航

第二十七日

第二十八日

第二十九日 神戸上陸 一泊

第三十日 神戸発、名古屋經由、東海道線ニヨリ
東京ニ向フ

第三十一日 前記直行ニテ東京下車 一泊

第三十二日 宮城、多摩陵遥拝
上野駅発、常磐線岩沼駅經由

第三十三日 東北線ニヨリ青森ニ着、函館ヨリ任地
ニ前線經由ス

第三十四日

第三十五日 任地帰着

四、視察事項

イ、蕃人等教化事業ノ一般

ロ、一般教育ノ施設中特色アルモノ

ハ、ソノ他教育上参考事項

附記

前日程ノ考案ハ 主トシテ視察目的ノ遂行上必要ナル予備知識取得ノ方便トシテ 左ノ三項目ノ下ニ指針ヲ得タリ

一、参考図書ノ閲覧

現行国定教科用書、大日本地名辞書、趣味の小学地理、台湾生蕃人物語、台湾生蕃伝説集、鉄道案内、旅行案内地図、最近の台湾（始政三十年記念）

二、書信ニヨル照会

台湾総督府文教局学務部長殿^{〔課〕}

台南中学校教諭 森要人氏

生蕃人研究家 在東京府 佐山融吉氏

台湾花蓮港庁玉里小学校長 奥村純太郎氏

同 吉野小学校長 山道万寿亀氏

同 新城公学校長 山本英雄氏

前記ノ中学務部長殿以外ノ五氏ハ夫々旧知ニシテ台湾通ノ實際家ナリ

総督府ヨリ「台湾ノ旅」「台湾ノ教育」ノ冊子各一部宛ヲ特ニ交付セラレ ソノ他五氏ヨリハ関係図面、有益ナル旅行ノ實際知識ヲ懇切ニ指導セラレタリ

三、実地視察家ノ指導

現北海道帯広中学校長三島桂五郎氏 客秋全国中等学校長会議ニ出席親シク台湾ノ實際ヲ視察セラレタルヲ以テ 日程、視察個処、風土、民情、スヘテノ疑問ニ対シテ痛快ナル指

導ニ接スルヲ得タルヲ感謝ス

右三項ニヨリ オホロケナカラモ台湾地方中澎湖島、紅頭嶼ヲ除ケルソノ他主要部ノ想像ヲ画クヲ得タリトイヘトモ要ハ百聞唯一見ニ如カサルヲ痛感セラル

西海岸ハ交通概シテ容易ニ周知ノ地方ナルニ反シ 東海岸ハ海路ノ交通ト共ニ割合ニ不便ニシテ 教化事業ノ如キモ将来ニ於テ見ラルヘキ有様ナルヲ以テ 我カ主力ヲ致スヘキ目的地ハ自然東海岸地方ニ在リ 前記書信ニヨル三学校長ノ現任地モ尽クコノ東海岸地方ニ在ルハコレニ基因ス 而シテ最モ視察ヲ実現シタキハ紅頭嶼ノ蕃社ナリ 遺憾ナカラ毎月南航北航各一回ツ、ノ寄航定期小蒸気船ノ便アルノミニテ冬季ノ如ク海路困難ノ候ハ殆絶望ニ属スト 五週ノ予定日数ノ中五分ノ二ハ往復日数ニシテ在台視察日数ハ五分ノ三ナルハ東海岸ノ不便ナル海路ヲ踏破スルニ止ムナキニ出ツ

花蓮港略図〔略〕

- ▶ 日記によれば、1927年4月27日放課後、河西支庁へ外向き、高橋綱三郎視学に旅行認可申請書を直接提出。

これより先に、吉田は高橋視学を官舎に訪問して経過を聴取した際、「予備知識やその他の程度をかいて出してもらっての上に」との道庁学務部長からの意向を伝え聞いている

（1927年4月17日条）。本資料はこの指示に応じて作成したものと考えられる。

3-14 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕

拝啓新緑の候 貴官益々御清穆奉慶賀候 さて不肖管外出張の件に関し 客秋以来多大の御芳情御尽力に預り居候にもかゝらず遂に出札御挨拶申上候機を不得欠礼汗顔此事に存申候 然る処今度格別の御詮議を以て右御発令の恩命に

接する様御決裁被成下候旨 再度の御内報忝うし有り難く感銘仕候 尚又多額の旅費御給与の典に浴し過分の榮と致す次第に御座候 即刻出札参庁御指示相仰へき筈に有之候処 貴官御出張前即二十二日前 愚妻 亡母七回忌墓参のため 愚妻 釧路市外に兩三日私事旅行方止むを得ず御認可を得 校務手不足等の関係上 誠に勝手がましきは候へども 来る二十八日午前九時までに参庁仕度愚存に罷在候間 何卒様御思召被成下 此上ともよろしく御願申上候 那須支庁長殿、高橋視学殿にも拝姿の上右手續可仕心組に御座候 委細は拝姿の節と相譲り 先は取りあへず御礼相かね拝参まで申述度如此に御座候 敬具

昭和二年五月十八日

日新尋常小学校長 吉田巖

北海道庁学務部教育課

北海道庁属小柳藤太郎殿

3-15 〔発翰控 新城、吉野、玉里各学校長宛〕

拝啓其の後ハ御無音申上候処益御清榮に涉らせられ候事と遥賀罷在候 さて 小生愈時機を得て出張命令に接し本日当地発 貴管内に参上相叶申候につきては 来月中拝姿を得候ものと楽しみ居り候 実ハ曩にも深厚なる御懇書拝受 いつかな御芳志に副ふやう機を待ち居り候処 実現を見たるを感謝仕ると共に何分の御指導偏へに奉仰上候 その内参府之上大体の日程等相定まり候節は更めて申上可く 誠に失礼ながらあらかじめ得貴意度 時下御自愛專一に成下され度先ハ御挨拶まで如此御座候 敬具

昭和二年五月二十七日

吉田巖

〈奥村玉里、山道吉野、新城山本〉校長三氏 殿

3-16 〔発翰控 台湾花蓮港庁長中田秀造宛〕

拝啓仕候 益御清榮に涉らせられ候段奉慶賀候 さて 私儀今回北海道庁より貴府管内学事調査のため出張拜命不日参趨御指導に預り度懇願致候処□ 私儀渡道二十年来主として旧土人教育に従事罷在候関係上及ふ限り生蕃その他□□関係調査仕度 既に一応客秋貴府学務部長殿まで申上置候 且主として花蓮港庁管内に目的を置き度希望に御座候 何分にも不案内にて予備知識も不十分に有之いかゞと懸念罷在候 然る処客秋以来くかつて渡道 御来訪ありし〉新城山本校長、玉里奥村校長、吉野山道校長各位宛に 貴地方の状況一応御内報に預り明瞭と相成候ことを感謝致候も 他に知己もなく不安の折柄 兩三日当前校に御出張の北田徳太郎様より尊台の現官に御榮転被遊候趣拝承 且かねて相馬郷友会名簿にて尊名は拝承致居候も偶然目的地に尊台のあらせらるゝことを意を強うしたる次第に御座候 就候てはまことに恐縮の至りには御座候へども蕃界生活並に教育等実地調査の上は何卒尊台の御慈悲を以て特に便宜を与へたまはる様伏して合掌仕候 いづれ参府の日 日程等も大体相わかり可申 六月中下旬頃参庁相叶候かと思考罷在候

先ハ唐突失礼をもちかへり見ず右御願まで申上度委細ハ拝姿の節万縷御挨拶申上可く候 恐懼謹言

昭和二年五月二十七日

北海道十勝国河西郡帯広町伏古

日新小学校長 吉田巖

台湾花蓮港庁長中田秀造殿

- ▶ 中田秀造(1876年生、福島県相馬郡出身)は、1900年渡台後、警察官として島内各地に勤務。蕃地調査委員会幹事等を経て、1927年花蓮港庁長。

3-17 〔発翰控 台湾総督府文政局学務課長宛〕

拝啓 私儀本月十七日附学事調査ノタメ当北海道庁ヨリ台湾ニ出張命令相受候ニツキテハ不日参府ノ予定ニ有之候間ソノ節ハ何分ノ御援護御指導仰上度此段御願申上置候 敬具

昭和二年五月二十七日

北海道庁立日新尋常小学校
訓導兼校長 吉田巖

台湾総督府文政局
〔課〕
学務部長殿

3-18 〔発翰控 台湾総督府理蕃課長宛〕

拝啓 私儀本月十七日附学事調査ノタメ当北海道庁ヨリ台湾ニ出張命令相受候ニツキテハ不日参府ノ予定ニ有之候間ソノ節ハ何分ノ御援護御指導仰上度右予メ御願申上置候 敬具

昭和二年五月二十七日

北海道庁立日新尋常小学校
訓導兼校長 吉田巖

台湾総督府
理蕃課長殿

3-19 〔発翰控 台湾花蓮港庁宛〕

拝啓 私儀本月十七日附北海道庁ヨリ学事調査ノタメ貴府管内ニ出張命令相受候ニツキテハ六月中参庁ノ予定ニ罷在候間ソノ節ハ恐縮ナカラ何分ノ御援護御指導仰上度此段予メ御願申上置候 敬具

昭和二年五月二十七日

北海道庁立日新尋常小学校
訓導兼校長 吉田巖

台湾花蓮港庁御中

3-20 〔発翰控 台湾台東庁宛〕

拝啓 私儀本月十七日附北海道庁ヨリ学事調査ノタメ貴府管内ニ出張命令相受候ニツキテハ六月中参庁ノ予定ニ罷在候間ソノ節ハ恐縮ナカラ何分ノ御援護御指導仰上度此段予メ御願申上置候 敬具

昭和二年五月二十七日

北海道庁立日新尋常小学校
訓導兼校長 吉田巖

台湾台東庁御中

3-21 台湾ニ学事調査ノタメ出張拝命ニツキ陳述事項

台湾ニ学事調査ノタメ出張拝命ニツキ陳述事項

本月十七日附標記拝命ニツキテハ ソノ選ヲ忝ウシタル光栄ヲ感謝スルト同時ニ最善ノ努力ヲ払ヒテ使命ニ副ハムコトヲ覚悟ス

惟フニ従来満鮮支那方面学事視察ノタメ小学校教員ノ派遣セラレタルハ先例アレトモ台湾派遣ハ其ノ筋ノ特例ヲ開カレシモノニシテ ソノ任ヲ完ウスルト否トハ直チニ将来ノ壮挙ニ対シテ消長ノ関スルモノ ソノ責決シテ輕カラス

凡視察調査ノ主トスル所ハ彼此ノ異同ヲ比較研究シ採長補短教育ノ充実完成ヲ催進セムトスルニアリ 而シテソノ方便トシテ目標及目的地ノ選定モコレニヨリテ其ノ分野ヲ決スヘシ 視察地ノ目標ハ常ニ優良ノ位置ニ在リトセラル、モノニ就クハ殆常例ニシテ且通則ナルカ如シ コレ一般教育ニ在リテハ当然ナリトス

然ルニ職ニ北海道土人教育実務者タル 小職ニ在リテハモトヨリ一ノ特殊教育ノ領域ニ属スルヲ以テソノ選ヲ異ニスヘキモ自然ノ趨勢ナリ優秀ナル一般普通教育ノ実績ヲソノ地ソノ学校等ニツキテ求ムヘキハモトヨリ効果少ナシトセ

ストイヘトモ文化低キ旧土人ノ現状ヨリ見テ今日ノ一般小学校トノ間ニナホ幾多ノ径程ヲ存ス即チ今日ノ文化ニ到達セル道程ヲ求ムルトキハ寧目標ヲソレ以下ニ措キテ調査ヲ遂ケヨリテ以テ改善ノ余地ヲ研究スヘキニアラサルナキカ
本道ト台湾トハヒトシク領土内トハイヘ旧土人ト生蕃人トハヒトシク皇民ナリトハイヘ南北風土民情ヲ殊ニシタリ 均シク特殊教育ノ立場ヨリスルモ同一視スヘカラス 然レトモ一般未開人ノ教育ニヨリテ文化向上ヲ見ルノ径程ニアリテハソノ間必スヤ彼此ノ類似共通ヲ発見シ長短取捨宜シキニ叶ハハ視察ノ効果空シトセス 況ンヤ此ノ種教育ノ實際ハ存在ヲ示シツ、殆光明下ニ葬ラレタル暗黒界ナルヲヤ

実地ニ先ツヘキ予備調査ノ必要更ニモイハス関係図書新聞雑誌写真モトヨリ宜シ ソノ地在住者實際視察家ノ文書談話モトヨリ宜シ 而カモノノ参考ニ過キス コレ等ニヨリ大体ノ台湾ノ輪郭概念ヲ得タルノミ 進ンテ実地ニ臨マハ百聞一見ニ如カサルコトヲ体験スルヲ得ムカ

我カ北海道ヲ想像セル人ノ予備知識ノ意外ニモ単ニ「熊トアイヌ」ノ国。トセルカ如ク 台湾ヲ単ニ「生蕃人」ノ国。トノミ曲解シ危険島トノミ警戒スルカ如キ必シモ然ラサルヘク コレ実地ニ就キテ実相ヲ目撃シ前後左右上下ヨク凝察セハ台湾ノ実相亦我カ北海道ノ誤解ヨリ救ハル、ト同様ナルベシト信ス 而シテ蕃人ノ教化ノ実績ヲ我カ旧土人ノソレト対比考察スルハ興味アル問題タリ得ヘシ

台湾視察ノ主トスルコロ、目的地、目標ヲコ、ニ置クアヘテ叙上ノ理由ニ外ナラス コレカ調査ハ蕃人教育ヲ主トシ他ハコレヲ副トス 而シテ方便上東海岸地方ヲ主トシ西海岸地方ハ自然副トス

西海岸地方ハ交通容易ニシテ調査上支障少キカ如キモ東海岸地方ハ之ニ反スカ如シ 危険モコ

レニ伴フモノノ如シ

調査ニ処スル上ニ 予備調査ノ際 文書ヲ以テ一応 台湾総督府文教局学務課、理蕃課及 台東、花蓮港庁等ノ援護指導ヲ仰クヤウ 且 蕃社学校長二、三ニ宛特ニ援助ヲ依頼セリ カクシテ教育ヲ中心ニ生活状態、土俗方面等 時間ノ許ス範囲ニ於テ材料ヲ蒐集セムコトヲ期セリ

日程限リアリ 許スナキハ止ムナキモ幸ニシテ今回ノ光榮ヲ記念スヘク及ハスナカラ最善ノ努力ヲ払ヒ以テ使命ノ万一二副ハムコトヲ以テ答辞トス

昭和二年五月二十七日

北海道河西郡日新尋常小学校校長吉田巖

- ▶ 北海道庁属小柳藤太郎からの来翰(1927年5月24日付)によれば、道庁出入の各新聞道政記者が「生蕃の教育状況視察は今回初めての企」であると注目し、道内各社に打電するとともに、種々質問あり。よって、出札までに今回の視察に対する覚悟等を取りまとめて陳述の備えをするよう吉田に要請(【Ⅲ-ii-15-4】)。
- ▶ 「台湾視察手帖1」の1927年5月28日条に、「陳述書ハ明日ノ小樽紙ニ掲載スヘク支局ニ小柳氏ハ持参」したとの記述がある(【Ⅰ-i-B-3】)。
- ▶ 1927年5月29日付『小樽新聞』は、「消息」欄にて吉田が「生蕃教育視察のため」出発したと報じているものの、とくに陳述書に関わる記述は見当たらない(【Ⅴ-4】)。

3-22 〔発翰控 台湾総督府文教局学務課長宛〕

〔略〕

- ▶ 前掲【3-17】と同一内容。

3-23 視察日程經過要覽

年	月	日	曜	天候	出発時刻 並二同地点	到着時刻 同地点	視察個処	宿泊地点
昭和二	五月	二十七日	金	晴	午後9時30分 任地日新校			汽車中
		二十八日	土			午前7時35 札幌駅		
							北海道庁、教育課、社会課、道史編纂室、札幌神社	
					午後7.35 札幌駅			汽車中
		二十九日	日			前6.20 函館駅		
							函館市長公舎、函館図書館、私立大森尋常小学校	
					" 5.30 函館棧橋駅	后10. 青森棧橋		
					后11.10 青森駅			汽車中
		三十日	月					汽車中
		三十一日	火	晴		前5.30 大阪梅田駅		
							大阪府庁、同市役所、市立有隣尋常小学校	
					午后1. 梅田駅	后8 兵庫県須磨		須磨 温泉旅館
	六月	一日	水	前曇 后晴	前7.30 須磨	前9.59 三ノ宮	須磨遊園地、須磨寺	
					正午12 三ノ宮			汽船中
		二日	木	前曇 后晴		前5 門司		
					正午12 門司			汽船中
		三日	金	曇雨				汽船中
		四日	土	晴雷雨		后2 基隆		
					后基隆	后 新北投		新北投 松濤園
		五日	日	大雷雨	前8. 新北投	前9 台北駅	北投公学校○	
							台湾神社○、円山公園、動物園○、博物館○	台北市本町 摂津館
		六日	月	曇且雨	前8 摂津館		台湾総督府学務課○、蓬萊公学校○、第三高等女学校○、第一中学校○、殖産局陳列所、専売局、中央研究所	台北市本町 摂津館
		七日	火	雨	前8 摂津館		総督府○	
					前11.10 台北駅	后6.30 蘇澳		
					后10 蘇澳			汽船中
		八日	水	曇且雨		前6 花蓮港		
						后5	花蓮港庁○、測候所○、吉野尋常高等小学校○、薄々蕃社○、薄々公学校○、花蓮港高等女学校○、同公学校○、同農業補習公学校○、同附属寄宿舍○、同農業実習園○	花蓮港街 近江屋旅館
		九日	木	曇且雨	前9 近江屋旅館	前11		
							研海支庁○、タイヤル蕃社、タツキリ橋○、殉難者招魂碑○、新城公学校、新城尋常高等小学校○、蕃社○、頭目宅	新城公学校
		十日	金		前7	前8.45 近江屋旅館	研海支庁長官舎○、新城両校○	
					前9.27 花蓮港駅	后0時45 馬太鞍駅		
							馬太鞍公学校○、太巴塢公学校並二通学区家庭○	馬太鞍駅 香川旅館

年	月	日	曜	天候	出発時刻 並二同地点	到着時刻 同地点	視察個処	宿泊地点
		十一日	土		前9 香川旅館	正午12 玉里駅		
						后6 玉里	玉里尋常高等小学校○、玉里第二公学校○、玉里庄役場○、下勝湾溪、蕃社、頭目宅	玉里 璞石閣
		十二日	日	晴	前6.23 璞石閣	后5 台東		
						后7 台東	馬蘭公学校、同部落頭目宅○、卑南公学校、同部落、共同精米所○、台東尋常高等小学校、台東公学校○、同寄宿舎○、農事試験場○、台東庁○	台東 台東ホテル
		十三日	月	前晴 后雷雨	前5.27 台東駅	后4.30 花蓮港		花蓮港 近江屋旅館
		十四日	火	晴	前7 近江屋旅館		花蓮港庁	
					前10 花蓮港	后3 蘇澳		
					后4.15 蘇澳	后9.50 基隆		基隆 基隆旅館
		十五日	水		前11.55急行 基隆旅館	后3.15 竹南	基隆市場、基隆公園	
					后3.16 竹南（ノリカヘ）急行	后5.40 彰化		
							彰化市街○、孔子廟○、公園○、八卦山○、北白川宮殿下御遺跡○	彰化街 古月園
		十六日	木		前3 古月園			
					前3.18 彰化駅	前7.45 高雄駅		
							高雄庁	
					前9.55 高雄駅	前11.10 屏東駅		
							屏東郡役所、屏東公園、屏東神社、農事試験場○、パイロン族石室、屏東公学校	
					后2.20 屏東駅	后6.10 台南駅		
						后7.30 台南口	台南州庁、台南市役所、市視学官舎	台南市 森要人方
		十七日	金	晴	前8 森要人方		孔子廟、県社開山神社、台南神社、ゼランジャ城跡、媽祖廟、州庁、市役所○	
					后2.45 台南駅	后8.19 台中駅		台中 塩田旅館
		十八日	土	晴 驟雨	前7 塩田旅館		台中州庁、台中市役所、台中公学校、台中第一尋常高等小学校、台中バナハ市場、行啓記念館、市営公設市場	
					后1.38 台中駅	后5.12 新竹駅	四・三六竹南ノリカヘ	新竹 塚之[廻]家旅館
							新竹第一公学校長官舎	
		十九日	日	曇	前7 塚之[廻]屋		新竹第一公学校	
					前8.19 新竹州	前10 桃園		
					前 桃園	前 大溪		
					前11.30 大溪	后4.30 角板山		角板山 薰風館
							角板山蕃童教育所、並二蕃社家庭、物品交易所	
		二十日	月		前6 角板山	前8.45 大溪		
					前9 大溪	前10 桃園		
					前10 桃園	前11.30 台北		
					后2.35 台北駅	后2.45 士林駅	芝山巖遺跡	
					后3 士林	后5.30 台北駅	台湾總督府○、教育課長外官舎	
					午后 台北駅	后11 基隆		同市 基隆旅館
		二十一日	火	曇	前9 基隆			汽船中

年	月	日	曜	天候	出発時刻 並二同地点	到着時刻 同地点	視察個処	宿泊地点
		二十二日	水	曇 后雨				汽船中
		二十三日	木	半晴 后雨		后1.10 門司		
					后1.45 門司駅	后4.40 博多		
							宮崎八幡宮	福岡市 朝日旅館
		二十四日	金	晴	前7 博多			
					前8 二日市	前11.45 二日市	太宰府	
					后0.43 二日市		福岡県庁社会課、保安課、福岡物産陳列所	
					后6.20 博多	后8 門司		
					后9.10 門司	后9.30 下関		下関市 丸谷旅館
		二十五日	土	半晴			赤間ヶ関市内、赤間ノ宮、春帆楼、ソノ他巡視	
					前8.40 下ノ関			汽車中
		二十六日	日			前10.10 東京駅		
							宮城遙拝、市内展望、本所被服廠納骨室	
					后11.20 上野駅			汽車中
		二十七日	月	曇		前2.22 宇都宮		
							国幣中社二荒山神社	
					前6 宇都宮	前7 日光駅		
							別格官幣社光照宮	
					前11.15 日光駅	后 郡山		
					后6 郡山			汽車中
		二十八日	火			前 青森		
					前11 函館			
					后1.40 函館	后9.42 札幌		札幌 山形屋旅館
		二十九日	水		前8 山形旅館		北海道庁、教育課、社会課、道史編纂室、大学植物園、博物館	
					后9.42 札幌駅			
		三十日	木			前帯広駅		汽車中
						前8 帰任		

3-24 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕

拝復時下酷暑の砌益清栄に涉らせられ奉賀候
さて過般参庁の節は御繁忙中にもかゝはらず格
別御芳情に預り有り難く奉鳴謝候 帰任後処理
事項嵩み 何かと取込思ひつゝも御無音に打過
心外に有之候ところ 今度却って御懇書に預り
恐縮仕候

学校長会議御召集の件は大正四年予算編制前に
於て御招集の御内定の由拝承仕候 年度はじめ
にあらされば旅費支出後等にて支障ある向も可
有之旁御意見に御一任申上度候 トタン張その
他経費の件につき 去る十七日両校打合例会を
当校に開催 高橋視学殿御臨席を願ひ右所要額
並に方法等打合せ 今夏中着手竣功致す様に内
定致し 就ては概して消耗費の一部を右に流用
支出方御承認願出候手配に有之候間御合置被成
下度願上候

次に台湾学事調査復命書 材料整理も精々取ま
とめ急々印刷を了し度心組にて夫々執筆過半は
出来致候も こゝ一週間後にて原稿頁数その他
判明の上にて印刷費等も推算の運びと相成可申
都合に有之候条 右に対し特に経費の点御厚配
御照会忝ふし有り難く感謝仕候 いづれ近日更
めて御回報御厚配相仰度 取おくれ甚申訳これ
なく候へとも不悪御海容被成下度先は御礼かた
がた得貴意申上候 拝具

昭和二年七月二十八日 吉田訓導

小柳属殿

浦河管内御出張被遊候由 かの方面は亦格別御
参考と相成候事と拝察仕候 校舎土台セメント
の件も実現につとめ度 右十七日申合せ置申候

- ▶ 北海道庁属小柳藤太郎からの1927年7月22日付来翰(【Ⅲ-ii-15-5】)への返書。日記に関連記事あり。

3-25 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕

拝啓盛夏の砌貴官益御隆昌のことゝ奉慶賀候
さて 小職視察復命書整理印刷方につき先便拝
答申上置候処 実ハ取急ぎ提出可致様整理罷在
候も 何かと仕事に逐はれ 昨今漸く完稿印刷
に附する運びと相成候 然るに原稿は約一頁六
九〇字詰半紙型製本二百頁に近く 復命書と日
記等合冊に致せば相当嵩み 且印刷部数を少数
とすれば経費にも相当関係を来す都合上 更に
材料を取捨の上 原稿を(一)復命書の部約七
五頁、(二)日記等の部約五五頁の二部に分冊
前者は五拾部以内 後者は多少余分に製本致す
へきかと考慮の上 日限も切迫の折柄製本まで
十三四日を要する見込みに有之 昨日参庁一応
高橋視学殿にも申上度希望致し候へとも 既に
御出札後のことゝて拝面を不得 右日限の都合
も有之候□□適宜取計らひ止むを得ず当印刷株
式会社清田活版所に印刷を命し置申候 就候て
は止むなき場合は本年度かねて御配付の消耗品
費の一部分御補助を与へられ候様願上候も 小職
旅費の一部を以て埋合せ処理致候様御内諾を願
上度 その中 高橋視学殿御帰庁の節委細申上
度 右単価其の他の義もその節御報告申上度此
段得貴意申上候 敬具

昭和二年八月四日 吉田学校長

北海道庁学務部教育兵事課

属小柳藤太郎殿

- ▶ 日記に関連記事あり。

3-26 台湾学事調査復命書提出期限二関スル件 日第四二号

昭和二年八月十六日

河西郡日新尋常小学校校長吉田巖

河西支庁長北崎巽殿

台湾学事調査復命書提出期限ニ関スル件
本年五月十七日附北海道庁ヨリノ命ニ依り出張
ニカ、ハル標記復命書別紙理由ニヨリ期限内提
出致兼候ニ付テハ本月末日マテ特ニ御猶予方御
詮議被成下候様此段相願候也
追テ復命書内容目次添付候也

理由書

一、提出期限

昭和二年八月十九日（六月三十日帰任ノ日ヨ
リ五十日以内）

一、復命書材料整理完稿

七月十八日以後八月三日迄ノ間ニ於テ從事日
数十二ニシテ 完稿カク遅レタルハ不在中ノ
庶務整理ト多数来観者応接等ニ主要ノ時間ヲ
削ラレタルニヨル

一、原稿印刷

八月三日帯広町清田印刷所ニ向二週間以内製
本出来ノ予定ヲ以テ印刷ヲ命ス
製版着手印刷ノ結果活字ニ非常ノ不足ヲ告ケ
之レカ補填ノタメ札幌等ヨリ着荷ヲ待ツノ止
ムナキニ至リ一時印刷中止セラレ空シク日数
ノ経過ヲ見タルハ遺憾ノ次第ナリ
補填活字ハ十五日着荷セルヲ以テ 本日ヨリ
特急作業中ナリ

一、復命書ハ最初ヨリ印刷ノ予定ヲ以テ 印刷 所ニ廻付原稿一部ノミニテ写ナシ

台湾学事調査復命書

目次

視察日程経過要覧

一 台湾学制一般

教育ノ沿革

台湾人教育ノ沿革 - 蕃人教育ノ沿革 -
内地人教育ノ沿革

教育令発布ト改正

教育ノ現況

二 初等教育機関施設ノ実例

公学校ノ部

台湾人公学校例 二 - 蕃人公学校例 四

小学校ノ部

内地人小学校例 一

三 附録

官立学校概覧

蕃童教育ノ沿革及現状

社会教化団体状況

一般衛生状況

教育経常費比較

備考

（半紙判一頁約七〇〇字詰八〇頁ノ見込）

3-27 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕

拜啓秋気相催候処 貴台益御隆昌奉賀候 さて
客月四日附書状を以て申上候復命書印刷の件
その後高橋視学殿まで希望申上置候も 実ハ該
復命書は帰任後五十日以内提出可仕筈なるにも
かゝはず既に二週間以上延引致居候儀は 小職
怠慢の罪まことに申訳なき次第に御座候 去月
十六日附河西支庁長殿宛を以てその遷延の理由
及八月末日まで御猶予相仰度旨公文にて陳述致
置精々印刷取急き申候処 本日漸く印刷済にて
一両日中提出可致都合に有之候間幾重にも御諒
察之程奉仰上候

次に復命書内容目次 河西支庁長殿を経て申上
置候筈之処 蕃人教育資料として主なる記載は
致候も調査の必要上一般教育資料としての内容
に自然渉り候観をまぬかれず 然れば此際特に
関係旧土人学校以外にも出来得べくは教育資料
として寄贈致度甚僭越の至りとは存申候へ共
当河西支庁管内小学校貳百五校外教育会、町村

役場等漏なく一部つゝの見込を以て三百部印刷致し この分は 小職渡台を記念せむかため 当河西支庁又は十勝教育会の御採納御援助の下に 夫々贈呈の運び致度希望に御座候 就てはかねて印刷費の上に格別貴台御始め高橋視学殿よりも御厚配に預り居ことは存候へ共 小職の希望御承認被成下全部の費用 小職の負担として処理可致然様御許容の程奉願上候 高橋視学殿とも御協議申上 本年度御配付の旅費の一部を印刷費に流用云々など御詮議も有之候へしも 小職の希望は右の次第にて御厚意を無視するか如きをおそるゝ次第に有之候 尚当管内 手元は貳百六拾部程必要に候へ共 貴庁にて御受理たまはるへき部数は最初の御下命をかへりみ貳拾部乃至それ以上如何にて被遊候哉御仰出され度 更めて伺上申候 尚印刷都合により日記その他ハ追て印刷の都合に有之候条御含置たまはり度願上候 先ハ遷延なから右経過申上度幾重にも御許容之程奉願上候 敬具

昭和二年九月二日
吉田日新小学校長
北海道庁属小柳藤太郎殿

〈二白両校ともおかけ様にて校舎住宅トタン葺屋根工事過般夫々手続を了し竣功致候条 御礼申上候〉

3-28a 台湾学事調査復命二関スル件〔控〕
昭和二年九月五日
北海道河西郡日新尋常小学校長
吉田巖 〔公印〕
北海道庁
台湾学事調査復命二関スル件
本年五月十七日附御発令ニカ、ハル 小職台湾学

事調査報告別冊復命書ノ通りニ有之候条此段及提出候也

右調査ニ対シ特ニ台湾総督府文教局学務課ニ於テ同理蕃課ト打合セラレタル結果視察日程ヲ示サレ 府管内関係官公衙学校ニ通知ノ上便宜ヲ与ヘラレタル謄写物一葉為念添付致候

3-28b 北海道日新尋常小学校校長視察日程
北海道日新尋常小学校校長視察日程

月	日	曜	発 発所	時刻	着 着所	時刻	泊	視察箇所
六月	七日	火	台北	午後 4.00	蘇澳	午後 9.48		
			蘇澳	午後 10.00			船中	
	八日	水			花蓮港	午前 5.00	花蓮港	吉野、新城各小学校、 薄々蕃社
	九日	木	花蓮港					花蓮港小学校及公学校、 農業補習学校
	十日	金	花蓮港		鳳林		鳳林	寿小学校、初音、銅門 各小学校、薄々公学校
	十一日	土	鳳林		玉里		玉里	途中馬太鞍下車、同 公学校、太巴塢蕃社、 瑞穗下車、同小学校
	十二日	日	玉里		台東		台東	蕃社、小公学校視察
	十三日	月	台東		花蓮港		花蓮港	
	十四日	火	花蓮港	午前 8.00			船中	
	十五日	水			蘇澳	午後 2.00		
			蘇澳	午後 4.25	八堵	午後 8.32		
			八堵					急行
	十六日	木			屏東	午前 8.57		高雄着 17.7.15 同発 8.03 公学校、公園、試験場
			屏東	午後 2.20	高雄	午後 3.23		築港、砲台山、寿山館
			高雄	午後 8.15	台南	午後 9.26	台南	公学校、孔子廟、赤崁 楼
	十七日	金	台南	午後 2.45	台中	午後 8.19	台中	バナナ市場、公園、行 啓記念館
	十八日	土	台中	午後 1.38	新竹	午後 4.30	新竹	公学校、其ノ他
	十九日	日	新竹	午前 8.16		午後 3.00	角板山	蕃童教育所
	二十日	月	角板山	午前 9.00	台北	午後 3.50	台北	市内見物
	二十一日	火	基隆	出帆				

3-29 〔台湾学事調査復命書（写）寄贈の件〕

御願

一 台湾学事調査復命書（写）印刷物 貳拾部
右本道庁立旧土人小学校ニ一部ツ、教育参考
資料トシテ寄贈致度候ニ付テハ 微意御採納被成
下配本方何分ノ御厚配相仰上度此段相願候也

昭和二年九月五日

河西郡帯広町日新小学校内

吉田巖

北海道庁学務部教育課御中

3-30 〔台湾学事調査復命書（写）寄贈の件〕

御願

一 台湾学事調査復命書（写）印刷物
右河西支庁管内各町村立小学校ニ一部ツ、漏ナ
ク教育参考資料トシテ寄贈致度候ニ付テハ <微
志>御採納ノ上何分ノ御厚配相仰上度此段相願候
也

昭和二年九月五日

河西郡帯広町基線西貳拾五番地

十勝教育会々員 吉田巖

十勝教育会長代理

副会長近田留四郎殿

3-31 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕

拝啓時下益御健勝奉賀候 さて去る二日申上置
候件 全五日当河西支庁を経由復命書印刷物式
通提出致候につきては 同時に差上候筈の貴庁
並に各土人学校分実ハ校正表その他脱頁の有無
調査等のため自然相おくれ 別便本日書留小包
便にて左記の通り差上申候間 何卒御査収被成
下度 尚日記等の別冊は都合有之製本暫く相お
くれ可申 乍遺憾同時に発送致かね候条 不悪
御含置被成下度得貴意候 尚特に御許容を願ひ

て当管内二町一六ヶ村役場並に二百七校宛本日
より約一週間内に夫々寄贈をいたすべきことに
取運び申候条 為念申上置候 先は右経過御報
告をかね此上にも誠に恐縮の至りとは存候へと
も御配本方伏して可然御願申上候 敬具

昭和二年九月十一日

日新小学校内 吉田巖

北海道庁属小柳藤太郎殿

記

一、九部

但 贈呈名札入の分

学務部長殿、前河西支庁長殿、小柳属殿

寺本視学殿、若木視学殿、門崎属殿、

西田囑託殿、竹内道史編纂主任殿、

以上各位に一部つゝ、外売部は予備として

右は貴意のまゝに適宜御高配可然御願申上候

一、十四部

旧土人学校に一部宛の分

以上

3-32 〔発翰控 河西支庁視学高橋鋼三郎宛〕

拝啓時下愈々御健勝奉賀候 さて本月五日御承
認並に御厚配仰上置候印刷物の件 その後校正
表添付脱頁有無調のため本日まで延引致居候処
〔暫く〕本日より向一週間以内順次各町村役場
に夫々発送の都合に有之候間此上とも万々恐縮
に存候へとも何卒可然様御厚配たまはり度偏に
御願申上候 拝具

昭和二年九月十一日

河西郡帯広町

日新尋常小学校内

吉田巖

高橋鋼三郎殿

3-33 〔台湾学事調査復命書（写）贈呈の件〕

拝啓仕候時下益御健勝奉慶賀候 さて 小生過般
其の筋の命によりて台湾に学事調査のため出張
致候処 該復命書写印刷物出来致候に就きては
渡台記念のため特に河西支庁、十勝教育会の御
承諾を得て 貴^町村 役場並に貴管内各小学校、
分教場、特別教授場に一部つゝ贈呈致度 何等
かの御参考と相成候を得ば幸甚に存候 就候て
は 微志御採納被成下特に御配本の便をたまはり
候様偏に御願申上候 敬具

昭和二年九月 日

河西郡帯広町日新小学校内

吉田巖

〈十勝〉〈六〉郡 〈二町十六村〉 長殿

〈追申

本文印刷物別便にて〈式百式拾五〉部発送致
候に付 御査収の程願上候〉

- ▶ 十勝支庁管内二町十六村の寄贈先および発
送月日については、〔「台湾学事調査復命書（写）
寄贈先一覧」〕（【I-i-B-16】）、および、郵便物
受領証【65～81】と照合可能

3-34 〔発翰控 河西支庁視学高橋鋼三郎宛〕

拝啓 度々申上候も御迷惑相かけ誠に申訳これ
なく候 別紙の通りかねて御厚配をたまはりた
る一件 おかけ様にて段落を告げ申候条御礼を
かね御報告申上候 拝具

昭和二年九月十四日

吉田巖

視学高橋鋼三郎殿

3-35 〔台湾学事調査復命書（写）発送の件〕

御届

本月五日御願申上置候寄贈印刷物左記ノ通り全
部発送（書籍小包便）ヲ了シ候ニ付此儀及御届
候也

昭和二年九月十四日

帯広町基線西二五番地

吉田巖

十勝教育会長代理

副会長近田留四郎殿

記

一、台湾学事調査復命書（写）印刷物 式百
式十五部

但 河西管内二町、十六ヶ村各役場並に町
村立各小学校に一部宛寄贈分

3-36 台湾学事調査復命書（写）受領ノ件

大正教第四七九号

昭和二年九月十四日

河西郡大正村長鈴木重次〔公印〕

日新尋常小学校長吉田巖殿

台湾学事調査復命書（写）受領ノ件

標記ノ件 當場並当村内各小学校へ教育資料ト
シテ御寄贈被下厚ク御礼申上候 就テハ御送付
書籍夫々配本致シ候条此段回答候也

3-37 〔台湾学事調査復命書（写）配付の件〕

拝啓

益御多祥奉賀候 陳者御送付の復命書は部長以
〔外〕下に配付致置候 尚土人学校に対しては
本日公文書を附し夫々交付を了し候間御了承相
成度 右御返事迄

かしこ

九月十二日

小柳属

吉田学校長殿

3-38 〔台湾学事調査復命書（写）受領の件〕

拝啓

時下秋涼之砌益々御清勝之段奉賀候

陳者今回ハ台湾学事復命書写御寄贈に相成候処
昨日豊頃村役場を経由し難有拝受仕候 早速内容
を通覧するに 巻中収むる所本島初等教育に
関する事項は細大漏さず採録せられ真に好箇の
教育資料と感激仕候 先づは右不取敢御礼詞迄
如斯御座候

拝具

昭和二年九月十六日

中川郡農野牛尋常小学校校長桜井忠〔公印〕
吉田巖殿

3-39 出版物発行届〔控〕

出版物発行届

一、題号 台湾の旅
一、発行年月日 昭和二年九月二十日
一、著者住所氏名 北海道河西郡帯広町基線
西貳拾五番地 吉田巖
一、届出年月日 昭和二年九月二十日
右出版法ニ依り出版致候条 成本貳冊相添此段
御届候也

昭和二年九月二十日

右発行人

吉田巖

内務大臣鈴木喜三郎殿

3-40 〔発翰控 北海道庁属小柳藤太郎宛〕

拝啓秋冷相加はり候処益御健勝に涉らせられ慶
賀の至りに奉存候 さて本月十二日附貴翰拝受
学務部長殿並に各位と旧土人学校に 小職復命書
写印刷物早速御配本方特に御厚配忝うし候趣
格別の御芳情有り難く奉万謝候
引続き印刷罷在候「台湾の旅」漸く出来 これ

亦前復命書に譲らぬ内容の貧弱と杜撰とかれこ
れ誠にお辱しきばかりにては候へ共 出来の今
日如何とも致方これなく せめては今回に限り
殊更御許を得て非公式に私より夫々直接御郵送
致し候方 穩にはあらざるかなどとも考慮致候
へども 同時に出来致さは過般添送申上へき事
にありしものとも考へ とに角に別便三十部献
本仕候間 万々一御支障も御認めあらせられず
候は、全然取捨を貴台に御一任申上度 為念土
人学校分は今回のみ郵券二拾八錢也 白紙封筒
十四枚同封申上候間 御査納被成下度願上候
趣味中心に執筆の「アイヌと蕃人」の単行本に
て写真版等を入れ別に手頃のものをなど考案は
致候へとも いづれ実現にははかにもまゐりか
ね候 この辺御賢察たまはり度 本印刷物は台
湾を中心と致すべきに枝葉を臆面なく書きつら
ね候などまことに誠に不忠実の段恐懼の段恐懼
の次第これ亦御諒察仰上度 右謹んて奉願上候
敬白

昭和二年九月二十四日

日新小学校校長吉田巖

北海道庁属小柳藤太郎殿

3-41 請求書〔控〕

請求書

日新尋常小学校 受	昭和二年十一月十五日
--------------	------------

一 金〈貳百円也〉

但学事調査ノタメ台湾ニ出張命セラレ昭和二
年五月二十七日出發同年六月三十日帰着往復
三十五日間旅費別紙明細書ノ通り

右請求候也

昭和二年十一月〈十五〉日

河西郡日新尋常小学校訓導

四級下俸 吉田巖

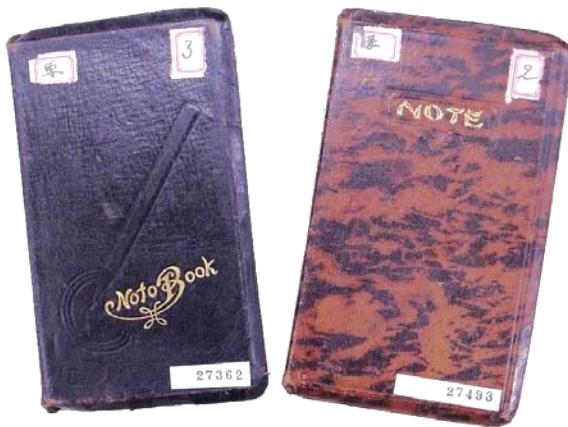
河西支庁長北崎巽殿

前書ノ金　〈貳百円也〉　正ニ領収候也

右 吉田巖

昭和二年　　月　　日
河西支庁長北崎巽殿

旅費明細書〔略〕



「台湾視察手帖 1」(左)、「台湾視察手帖 2」(右)
(目録番号 I-i-B-3、I-i-B-4)

4 〔台湾視察手帖 1〕(目録番号 I-i-B-3)

▶ 7.8cm×13.5cm×1.2cm、黒革表紙。万年筆、鉛筆書き。1927 年 1 月旅行準備の記録から同年 6 月 12 日までの旅行記録。

〔見出し一覧〕

- 1 旅中メモ(表紙見返し)
- 2 旅前メモ
- 3 旅中日記: 5 月 28 日～6 月 6 日
- 4 旅中メモ 1
- 5 旅中日記: 6 月 7 日～10 日
- 6 旅中メモ 2
- 7 旅中日記: 6 月 11 日
- 8 旅中メモ 3
- 9 旅中日記: 6 月 12 日～13 日
- 10 移動記録
- 11 旅中メモ 4
- 12 旅中メモ 5
- 13 旅中メモ 6
- 14 旅中メモ 7
- 15 発信記録: 5 月 28 日～6 月 7 日
- 16 発信記録: 6 月 9 日～14 日
- 17 出納記録: 5 月 27 日～6 月 7 日〔略〕
- 18 出納記録: 6 月 7 日～11 日〔略〕
- 19 出納記録: 6 月 13 日～14 日〔略〕
- 20 短歌 1: 6 月 4 日～7 日
- 21 短歌 2: 6 月 7 日
- 22 短歌 3: 6 月 7 日～8 日
- 23 短歌 4: 6 月 9 日
- 24 短歌 5: 6 月 10 日～12 日
- 25 短歌 6: 6 月 12 日～14 日
- 26 短歌 7: 6 月 14 日
- 27 旅中メモ(表紙見返し)

手帖の翻刻に関する注記

- ▶ 手帖には、日記、メモ、短歌、スケッチ等が混在して記されている。本書では、便宜上、記録・内容のまとまりごとに見出しを付して〔 〕内に記した。この見出し一覧を各資料の冒頭に掲げた。
- ▶ 旅中に記された発信記録と短歌は資料の末尾にとりまとめ、おおよその時期順に配列した。
- ▶ 罫線外のメモは、原則として＊を付して二字下げで記した。
- ▶ 改頁の箇所を適宜「---」で示した。

〔旅中メモ(表紙見返し)〕

甲種船舶検査証明写

吉野丸

総噸数 八九九八噸八二

旅客	一等室	四二人
	矩艇甲板上	一三人
	遊歩甲板上	二九人

二等室 壺〇八人
 上甲板上中央室 四九人
 船尾樓室 五九人
 三等 五四七人
 上層旅客甲板上
 第一前室 壺貳八人
 第二前室 壺參八人
 汽罐室右側 參七人
 第一後室 四八人
 第二後室 八七人
 第三後室 八參人
 船尾樓甲板室 貳六人
 壺六〇人（内賄六〇）

所有者 大蔵省
 汽機種類 四聯成
 汽罐 笛形両口
 種類 笛形
 汽圧制限 貳貳〇封度
 端艇 壺貳艇
 甲種船長 谷口元吉
 信号符字 S A W F
 船籍港 東京市
 昭和二、二、二八 通信局

〔旅前メモ〕

◎ 携帯品調

イ、身元証明書 〔壺〕貳枚
 ロ、乗車割引証 拾貳枚
 ハ、貯金通帳 貳冊
 ニ、名刺 〔七拾〕一百枚（1函）
 ホ、北海タイ
ムス附録日本鉄道 壺枚
 ヘ、本手帳 〔壺〕貳冊
 ト、万年筆 壺本
 チ、懐中時計（鎖付）壺個
 リ、洋服ハケ 壺個

ヌ、眼鏡 壺個
 ル、公務日誌 壺綴
 ヲ、学校要覧 壺冊
 〔 〈部落調 壺冊〉 〕
 ワ、学校絵葉書 五組
 カ、〔トランク〕皮カバン 壺個
 ヨ、蝦蟆口 壺個
 タ、記念帖
 レ、空気枕 壺個
 ソ、旧土地資料 壺冊
 〈統計一らん〉
 〈自然と人生 壺冊〉

手拭 壺筋
 鼻紙 壺帖
 ハンケチ 半打
 毛楊子 壺本
 齒磨粉 壺袋
 半紙 壺帖
 靴バケ 壺個
 胴巻 壺個
 洋〔服ハケ〕傘 壺個
 靴下
 〈全国テツドウリヨカウアンナイ 一冊〉
 猿又
 外套
 靴
 〈ハガキ 30 枚〉
 封筒
 台湾の教育 壺冊
 台湾の旅 壺冊
 〈財布 一〉
 〔襟巻〕
 帽子
 〈水牛印 一個〉
 辞令 一枚

コップ	一	米沢市東部小学校	米沢奎助
ナイフ	一挺	山形市下条町伝昌寺住職	平沢高岳
とんぷく	一包	新潟中学	吉成新太郎
始政三十年	一冊	新潟市 xxx	仁木英策
		" xxx	佐藤重信
ノシガミ ニフダ 名刺入 耳かき		長岡市女子師範学校	東神田・藤巻直治
ニンシンイキス [頓服] 包紙 紐		高田市作東町歩二六旅団司令部	曾根田賢治
めがね はさみ 西洋かみそり		" 師範	竹田操
		青海（西頸城村）	中野喜一
*地図（佐山氏）			安田重治郎
（森氏）		須原校	太刀川判次
（始政三十年）		原校	渡辺寛一
		上石立校	丸山喜作
*ネクタイ 二		〈神通中学	小西清正、長坂嘉一郎〉
		富山市県庁属	前田治吉
*電信柱に花かさく		" 女子師範	蛭原源助
		富山製品工場	藤本康次
*文教局学務課長		高岡市役所 xxx	上埜安太郎
		油町	藤平長門
		金沢地方専売局（主馬町広下）	世良田勝元
◎ 知己調		大聖寺 石川郡 xxx	星好文
函館市役所	佐藤孝三郎	福井市元足羽郡役所書記	田中九平
" 専売局長	末広喜久治	三方郡八村 浄蓮寺	山名貫道
若松小学校長	江花松蔵	舞鶴無線所長	佐藤州雄
旭町 xxx	光三郎	" 明倫尋高校	水谷隆吉
青森市司令部	志賀清身	宮津小学校	高津丈夫
" 師範学校	那須正一		松崎敏行
弘前市	石郷岡文吉	松江中学校	久村潔
大館病院	塚脇篤太郎	杵築町	千家尊統
土崎小学校長	倉田保美	松江高女	谷田民夫
	常世千代喜	島根県庁土木課長技師	庄司清
秋田鉄道建設事務所	星忠義	台北第一中学校（市龍口町一ノ四）	佐藤広 ○
秋田市	井上広居	台北市 xxx	荒卯三郎
秋田県庁社会主事補	菅豊治	台北市 xxx	村上義雄 11
秋田大林区	岩崎直人	台北土地会社	横山史郎
" 大町二丁目新聞社	小西忠三	台北逓信局	大内 貢

台北市 xxx	大関義雄	福岡市九州大学助教授	伊藤兆司
市下 xxx	福迫忠亮	田川中学校	室伏力次郎
栄街 xxx	(和田奈々吉)	築上中学校	井上忠次
新竹	金谷雄貫	広島県内務部長	後藤多喜蔵
新竹州大溪郡三坑子公学校	渡辺広衛 10	三原町	泉田 寧
台中 商業学校	佐藤義宣	岡山県	泉対信之助
彰化市 (台中県)	古日園 小倉乙松	清輝小学校	森 作太
嘉義庁北港支庁内	鈴木勇喜	上西川町一五四深抵小学校	藤野源一
台南中学校	広江万次郎		平賀 善
"	菊地新太郎		名越文治
" 幸町 xxx	森要人	門田 xxx	三浦作助
台南庁財務課	志賀春雄	神戸高女	横山賀彦
台南庁 xxx	佐藤留太郎 4	土山学園	池田千年
台南市 xxx	渡辺宗重	福原町 xxx	藤沢キク
屏東尋高校	岩崎一栄	明石高女	中村光夫
高雄州鳳山郡 xxx	志賀春雄		生沼勝
高雄州警務部	立谷円治 4	住吉村 xxx	山本茂安
花連港庁吉野	山道万寿亀	芦屋甲南小学校	堤 恒也
" 新城公学校	山本英雄	西宮高女	山鳥吉五郎
" 玉里	奥村純太郎	〈大阪府知事	田辺治通〉
台東庁視学	安倍明義	尼崎高女	荒川宗太郎
阿猴庁潮州支庁 xxx	荒欽治郎 3	芦屋字藤ヶ谷	谷本 富
" 新園里 xxx	管野喜八郎	大阪有隣校	奥田貞三
打狗 xxx	高栢甚四郎	" 府庁衛生課	阿部直衛
大分県立高女校	和田信一	天王子 ^{〔寺〕} 中学西北側	馬場篤郎
" 国東高女校	原沢義太郎	天王子 ^{〔寺〕} 小学校	石橋信太郎
海部郡大在小学校	枝井市五郎	天王子 ^{〔寺〕} xxx	八巻嘉根造
鹿児島県立第二高女校	太田藤一郎	大阪毎日堂島	小笠原語咲
" 伊作	井上佑命	撫順炭大阪支店	大森純一
シブシ	和田信二	西区 xxx	野村忠助
タカラベ	太田栄二	京都市 xxx	赤松智城
末吉	松野 忍	" 七条校	武藤茂吉
熊本クマ郡大畑尋高校	養毛国三郎	" 上京区 xxx	木幡啓蔵
医専学校	鹿児島茂	〈天王子 ^{〔寺〕} 師範	江口豊造〉
伊万里町	柳喜久治 5	奈良女子高女師範	佐藤小吉
福岡市県庁保安課技手 xxx	安部幸六	田辺中学	八谷嘉作

田辺	南方楠熊		
宇治山田	磯部精一	仙台市 xxx	星教宥
"	佐藤正人		
津市励精館中学	小野奎次郎	南一条西四丁目	小樽支局
四日市々立第五小学校	大川 蓊		
名古屋撫順炭販売株式会社支店	竹内徳三郎	〈宜蘭女子公学校 石井清（鹿島出身）〉	
名古屋新聞社	森 一兵		
名古屋高等工業校	田峯栄	白藤ステッキ（台湾産）	
電気局	愛沢求馬		
松本市高等学校長	大渡忠太郎		
高女校	渡辺 表	◎ 日程表	
県立女学校	唐沢貞治郎	1.2 日	
長野県諏訪郡豊平校長	細川隼人	後 10.47	根室本線帯広駅発
上伊那郡中津村小学校	近藤徳道	3 日	
	北村正	前 3.27	同線下富良野駅着
北佐久郡	下島文彦	" 3.35	発
長野運輸事務所	竹越一美	" 5.12	函館本線滝川着
長野県松本片岡製糸場	菅宇七郎	" 5.18	発
若松栄町 xxx	佐藤良三	後 4 ^時 30 ^分	函館下車
福島市 xxx	三田四郎	" 5.30（1 等寝台 150 銭）	棧橋発 乗船
平高女	二宮哲三	" 10	青森着上陸
磐城中学校長	只野 清	" 11.10	羽越線 青森発 羽越線マハリ
"	滑川一郎		大阪行ノニノル
平第二小学校	堤 光顕	4 日	
仙台 xxx	松本義美	前 4.27	" 秋田発
" xxx	星 教宥	" 11.44	" 新津着 下車セス
福島市 xxx	佐々亀喜	" 11.51	信越本線 新津発
羽前鶴岡市 xxx	村田 浩	後 3.32	" 直江津着
福島県庁	林 五郎		（ノリカヘ）
	横田 荘	" 3.43	北陸本線 直江津発
		" 7.43	" 高岡下車（一泊）
札幌市 xxx	品川義介	5 日	
札幌市 xxx	星教村	後 1.28	" 高岡発
札幌市 xxx	寺本菊次郎	" 7.06	北陸本線 敦賀下車
札幌市 xxx	小柳藤太郎	" 7.40	小浜線 敦賀発
幸震村 xxx	武田ナミ	" 10.05	" 新舞鶴（下車一泊）

6 日

前 5.5 マヒヅル線 新舞鶴発
" 綾部着
" 7.24 山陰本線 綾部発
後 4.48 " 出雲今市下車ノリカへ
" 5.12 大社線 大社着下車（一泊）

7 日

前 11.26 " 大社発
" 11.43 " 出雲今市着
" 11.52 山陰本線 出雲今市発
後 7.52 小郡着
" 8.48 山陽本線 小郡発
" 11.05 " 下の関下車
" 11.20 下の関発乗船
" 11.35 門司上陸

8 日 門司乗船発

9 日

10 日

後 0.35 基隆発
" 1.33 台北着（一泊）

11 日 着台

総督府打合 市内公園 神社参拝
北投温泉（泊）
后 4.55 台北発 5.30 北投着（淡水線）

12 日

前 5.40 北投発 6.35 台北着
" 7.38 台北発 8.42 桃園下車
〔板〕
角蕃山ヲ見 帰来（桃園）
后 5.11 分発 同 8.15 台中着（泊）

13 日

バナナ市場見物
前 11.10 発 11.43 彰化下車
〔基〕
八罰山ヲ見 小倉氏訪問（泊）

14 日

前 10.10 彰化発 后 2.30 台南着
森要人氏訪問（泊）

15 日

台南神社ソノ他巡覧 発 車中泊

16 日

基隆ヨリ乗船 花蓮港上陸
吉野訪問（泊）

17 日

吉野発 玉里訪問 新城ニ入ル（泊）

18 日

花蓮港ヲ辞シ 基隆ヨリ乗船

19 日

20〔日〕

門司上陸
後 3.05 門司発（九州本線）人吉行列車
" 6.07 二日市着（泊）

21〔日〕

前 8 時発 ケイベン
後 6 時帰着
後 7.46 分 九州本線 二日市発
" 10.50 " 門司着（泊）

22〔日〕

午前 7.10 日豊本線 門司発
" 9.44 宇佐着
" 10. 宇佐発（参宮鉄道）
" 10.14 宇佐八幡 下車
后 0.10 " 発
" 0.44 宇佐着
" 2.18 " 発
" 4.19 大分着（泊）

23〔日〕

前 6.20 大分発
6.45 大在着 板井校長ヲ訪フ
" 11.38 " 発
后 6.50 門司着
" 7.10 門司発 レンラクセン
" 7.25 下ノ関着
" 9.5 " 発 特急

24 日
午前 8.31 土山〔姫路〕着下車
尼崎（泊）

25
大阪下車
有隣校訪問 奈良泊

26
奈良発 松本泊

27
高女訪問 大井泊

28
東京訪問 泊

29
東京発 平泊

30
平発 鹿島着

31
鹿島発 中村着

1 日
中村西校ヲ訪フ
中学校ヲ訪フ

2 日
山上小学校 山上泊

3 日
中村発 車中泊

4 日
"

5 日
着札下車

6 日
帰着

◎〔人名リスト〕

道庁学務部長 池田繁治

" 視学 寺本菊次郎

" 属 小柳藤太郎

河西支庁長 那須正夫

一課長 近田留四郎

視学 高橋鋼三郎

属 高田政弘

" 金子英三

" 高橋正男

" 喜多章明

帯広町長 飯田誠一

教育主任 山本芳江

土木主任 小野保次

書記 三条鶴一

帯広校長 金耕太郎

柏校長 朝枝文裕

伏古校長 広田竹蔵

朝枝裕

広田巖水

安田直

青柳鶴治

庄島鹿六

森義平

林茂

毎日新聞社

小倉三之助

日新校児童

土田丑之丞

木幡富常

木幡小多郎

星教育

" 忠義

" 好文

大橋渉

渡部守治

園部亀三郎

◎ 経費予算

18 ^円 01	帯広門司間 1445 哩 4	汽車賃
40.00	門司基隆往復 1500 哩	汽船賃
12.46	基隆高雄間往復 498 哩 2	汽車賃
7.45	門司鹿児島間往復 477 哩 6	汽車賃
22.08	門司ヨリ帯広マデ迂曲經由汽車賃見込	
100 円		

上記ノ二割引 20 円ハ自動車電車等宛見込

75.00	25 日間旅館宿泊料一日三円平均
25.00	32 日昼食ソノ他 1 日 78 銭強ノ割
100	

2.00	郵便	20.00	テイ分	記 念 品
1.50	小包料	10.00	シン分	
2.00	観覧料	4.00	新分	
1.60	理髪	1.00	マサ分	
0.50	薬品	10.00	自己分	
1.40	荷保管	40.00	郷里土産	
10.00	雑品	10.00	心づけ手当	
5.00	自家記念エハガキ	58.50	予備金	
7.50	ブック アルバム		記念帖	
15.00	土産用記念品（有志）			
200.00	計 諸雑費			
400.00	総 計			

◎ 視察要項

イ、教育

特殊、蕃人、混合、一般ノ学校ノ施設ト實際

同上特殊ノ施設ノ長所欠陥

指導ノ上ニ最モ困難ナル事項

同上矯正改善方策

ロ、社会

青年処女ノ指導ト活動ノ實際

新旧思想ノ調和

同化ノ施設経過

模範部落、中心人物

ハ、産業

特殊産業ノ発達状況

副業等ノ研究

ニ、風俗

ホ 神社参拝、人物訪問

ヘ、名所、遺蹟（教授訓育資料トシテノ）

ト、参考品蒐集

チ、雑

各地ノ名物、地名、人名、人情、気温、天候、
動植物、旅館ノ設備ト気分、衣服、住居、飲
食、言語、農作物、便所研究、美談、宝物、
都市、山、川、湖、温泉、各地ノ記念品蒐集、
記念絵葉書

〔ママ〕
タタ（卑南蛮女）

女頭目系統

日の丸ノ旗ヲ立テ、^{リュウ}竜 トクシヤウ

女大夫 樺山総督

29 年 芝山〔巖〕

*卑南頭目 — 卑南公学訓導

*大原駅 - □金

〔壱〕
都歴と鉄砲取上げ

蝦子崙ノ火□

コレガヤカレテカラ コンクリート

◎ 事前聴取情報

昭和二年一月四日 三島帯広中学校長台湾視察
ニ関スル余ノ質問ニ対スル談話ノ一節。

イ、順路一神戸ヨリ基隆ニ直航。門司ヨリ乗船
ナラ下ノ関ニマツテキレバ ランチガ来ルカ
ラ ノリコス必要ナシ

ロ、荷物ハ神戸、門司夫々案内所ニ托シテ舟ニ
ノルガ便利

ハ、吉野、蓬莱ニノツタガ 甲一、二、三等ト
アツテ 甲二ニ入レテモラツタ セツビ十分、
但甲三等ハ神戸カラ三十円 コレデ大丈夫ト
見ラレタ

ニ、基隆ニ着ト同時ニ総督府ノ説明者ガ居テ
夫々全管内トコデモ皆説明シテモラツタが見
ル処多クキクコトオビタバシク食傷ニタヘヌ、
ムシロダマツテ見ルガヨク、アマリキクコト
ハコノマシクナカツタ。人力車賃1町1銭平
均デアル

ホ、東海岸ハミナカツタノデ説明ノ材料ハモタ
ヌ

ヘ、回帰線ヲ南北ニ ハ目下雨季 南ハ乾燥季
ヤハリ蝙蝠傘ハ出来ルナラ携帯ガ便 ヒガサ
トモナリ雨ガサトモナル 丁度北ハ梅雨季節
ノヤウデアル

ト、夏服ハ用意シテキタガ遂ニ一日シカキヌ、
オーバモ春秋モノヲ終始用キタ 台湾外ハ冬
物

チ、見オトスベカラヌ主要ナモノ

台北 台湾神社、総督府、博物館、中央研究所、
専売局、龍山寺、製茶工場、蓬莱公学校、
台北医院

北投。桃園。大溪（風光明媚）。角板山。

（台中）ニトマルナラ嘉義ガヨイ タマバナ、
市場ノミ

日月潭ニアソバナカツタノハ第一ノ遺憾

嘉義ノ東方二里半 呉鳳廟

阿里山

台南 開山神社 孔子廟

龍山寺 開山神社 孔子廟 呉鳳廟ハ専ラ
支那気分ニヒタルニヨイ

リ、高雄ヲヨルノ八時二十分発走行 翌六時ニ
台北ニ着 約十時間カ、ル

ヌ、蕃人ハ六種アリ、東海岸ハ殊ニオモシロイ
サウダガ交通ノ便ヲツマビラカニシナイ 紅
頭嶼ノ蕃人ナラ実ニ研究ノ好資料ナラン。九
州ニ寄ル予定ハ時間ノ都合デ全クカナハナカ
ツタ

ル、台湾デハ支那料理ハヤハリタベベキモノ

以下、地名辞書ニヨル 未開蕃数 11 万 5245 人

⁽²⁾アタイヤル 26004 ⁽⁴⁾ブヌム 14698

⁽⁷⁾ツォオ 2246 ⁽⁵⁾ツァリセン 13880

⁽³⁾パイワン 20866 ⁽⁶⁾プユマ 6655

⁽¹⁾アミス 28472 ⁽⁸⁾ヤミ 1667

（パイポオ）熟蕃 47189

諸族 289 万 0485 人 日本民族 57309 人

台北一泊 5 円 其ノ他南部都合 6 円

角板山 2 円 40 銭 阿里山一泊 3.50

桃園大溪迄 自働車往復 1.30

大溪角板山 往復台車賃 2.73(上等)

○ 連絡船宮崎丸 午後十時蘇澳発 翌未明花蓮
港に着、こゝより奥1里の所に（アミ族）あ
り 俗化せり 一見の価値あり

○ 紅頭嶼は（ヤミ族） 物々交換 人形とイツ
ベ ハリガネ持参 駐在所に依頼
基隆—高尾行間汽船にのり花蓮港台東により
次に火烧島—紅頭嶼により高尾にいたる（4
円、5 円）

○ 角板山（タイヤル）

○ 台北の本島人町（大稻埕）

○ 彰化駅下車 軽便にて鹿港に こゝは海賊に
そなへた市街構造

○ 嘉義に下車 軽便にて北港に こゝは媽祖廟

- 理蕃課（午前九時台北着） 市街 北投温泉見物 途中台湾神社参拝（汽車） 神社の下に名刹劍潭寺参り
- 翌日角板山 一第一警察署に出頭案内を乞ふ（一泊）
- 翌朝嘉義に参り阿里山登山一泊 高山鉄道、新高山見物
- 翌日台南一泊 市街 赤崁楼、台湾人師範学校
- 翌日阿緱へ参り蕃山入、マカザヤザヤ社、パイワン社、カピヤン社
〔ママ〕
（蕃山入山前必ス庁ノ理蕃課へ出頭シテ許可証ヲ受クルコト、総督府ノ理蕃課ノ紹介アル時ハ入蕃許可証ヲ要セス ソノ辺理蕃課ニテ照会ノコト）
- 約四日ノ予定ニテ（充分パイワン族チャリセン蕃ヲ）視察シ 潮州へ出て自働車にて桓春^{〔恒〕}に参り 船にて台東に渡り多分紅頭嶼は断念（船の便なき時は陸路横断するか牡丹社を視察するか、冬期は海上不穩なれば桓春^{〔恒〕}へ廻らず陸路台東へ参る方得策
- 台東にて馬蘭社、卑南社視察 両社間一里公学校あり
- 汽車にて花蓮港へ 途^{マクアン}中馬太鞍社、^{タバロン}太巴塢社視察。太巴塢公学校へ一泊。
- 翌日花蓮港 蒲々^{〔薄〕ボボ} 公学校視察
- 陸上或ハ船にて帰北 屈尺蕃視察 台北ヨリ新店マテ汽車 ソレヨリ徒歩輿ニテ四里 温泉アリ 公学校アリ 蕃社アリ。俗ニウライといふ（蕃語温泉の意）。
- 午前 10 時 10 分基隆発一蘇澳着 同地後 7 時出航宮崎丸にて→翌早朝花蓮港に着
汽車賃 2 等 3 円以内 <2 円 75 銭>
2 等 6 円・3 等 3 円 50 銭
花蓮港玉里間汽車賃 2 円 60 銭位
- 花蓮港吉野間自働車片道 3 円 往復 5 円 同汽車 2.9 哩 14 銭
但吉野停車場より吉野小学校間 19 町徒歩
- 高雄台東間 176 哩 2 等 9 円 3 等 5 円 50 銭
台東花蓮港間 107 哩
高雄花蓮港間 257 哩 2 等 15 円 3 等 8 円 50 銭
- 紅頭嶼
花蓮港ニハ月一回（月末）寄港
午前五時着 後七時発 これに間にあはざれば 1 週以上 1 ヶ月滞在を余儀なくす
- 毎月南航定期船（基隆ヨリ 1 回 毎月一・二日）
〃 北航定期船（高雄ヨリ 七・八日）
- 基隆の次駅 八堵駅ニテ宜蘭線ニノリカヘ一雙溪（北白川宮御宿所）、澳底（同御上陸地）、壯嶺トンネル（台湾一）一羅東一宜蘭一蘇澳^{〔船〕}（炭鉱泉アリ）下車 一連絡線宮崎丸乗船一夜十時出航、翌朝五時着（六二哩一蘇澳八堵間）二等 6 円、三等 4 円、花蓮港ヨリ新城マテ自動車（前九、後三時発）約一時間里程
- 花蓮港小学校、同公学校（本島人公学校）、同農業補習学校（主トシテ蕃人ヲ収容スル特殊^{〔薄〕}学校）、蒲々小学校（平地蕃）、吉野校（移民）、寿小学校（製糖会社）、太巴塢公学校（平地蕃最大校、進化蕃社）、玉里校、同第二公学校（アミ、ブヌン）、新城公学校（タロコ蕃ノ外三種^{〔銅〕}族）、洞門小学校（警官子弟）、北埔蕃童教育所（タロコ蕃）
- 紅頭嶼 毎月南航定期船基隆ヨリ一日カ二日ニ一回、北行ハ同高雄ヨリ七、八日ニ一回
- 神戸ヨリ三等二乗船（ポチ）、蓬莱、芙蓉（大阪商船）、吉野丸（郵船）ヲ可トス
- 汽車ハ三等ハフケツ、但風俗ヲ見ルニハ可
- 花蓮港汽船ハ二等ガ可
- 花蓮港旅館ハ近江屋旅館（計 5 円）

○ 台北二流 一台北市本町通 摂津館

× × × ×

高砂、高山国

原田孫七郎、魚屋助左衛門（呂宋）堺の人

村山等安（長崎）、浜田彌兵衛、鄭成功

明治七年琉球備中人五十人殺さる、西郷従道征

討、玉置半右衛門従軍す

西洋人は小琉球、フオルモサと称す（美島の義）

台湾の称は明末の頃から

明治廿八年清国より譲受く

面積 九州島にひとし、人口は東京より少い

蕃人 10 万余、1 方里 1600 人平均

五州二庁 市、郡 街（町）庄（村）

第一峯 新高山、第二峯 シルビヤ山

台湾山脈中二、一万尺以上ノ高峰十七アリ

西部平野（台北盆地と下淡水溪平野との間）我
国第二の平野。

台東平野、平地は総面積の約三分の一

○ 帝国領となって以来 氷を見たことは唯一回

○ 桧、樟、ビンラウ樹の林

○ 牛、豚、水牛、鶏（牛ニハ水牛、黄牛、西洋
種、雑種）

○ 製糖、製塩（砂糖は内地消費高の二分の一を
占む）

○ 米、甘藷

○ 茶 七回より十一二回摘取る

○ 落花生

○ バナナ、パイナップル

（年額数百万円バナナ）

バナナのすぢは芭蕉布、パイナップルの葉の
すじは麻織物同様の用をなす

○ 苧麻、黄麻、大麻

○ 牛の総数ハ内地の多産地たる中国の四県に匹
敵

○ 豚は内地総数の五倍

○ 新高山の西方 阿里山林 明治三十二年発見

嘉義から阿里山線に接続

^{ヒバ}
扁柏、台湾桧、檜、樟

枝下二十間、直径二十一尺、三千年令

○ 恒春半島のガジマル 一タコノ樹の種類

○ ビンラウ樹 一土佐の蒲葵島、日向の青島に
もある

本島中部以南、実ヲカム

○ 竹と籐

○ 瑞芳（金山） 一基隆の東三里

^{〔瓜〕}
金瓜石の金銅山 一瑞芳の東一里

武丹（牡丹）^ハ 一東南一里

○ 石炭、石油

○ カツヲフシ、カラスミ、鯛デンプ、フカビレ

○ 製造 一（砂糖）（茶）（樟脳）

○ ^{〔烏龍〕} ウウロン茶、^{〔包種〕} ハウチョン茶、紅茶

^ハ ハウチョン茶ハ粗茶ノ香気足ラズ ^{エン} 秀英、
^{マクニシ} 茉莉、^{チウラン} 樹蘭、^{コウキイ} 黄枝などの草花をまぜおく

○ 樟脳 世界需要の半分を産す

鉄道

縦貫線 基隆一八堵一台北一竹南一追分一嘉

義一台南一高雄

宜蘭線一八堵一蘇澳

淡水線一大稲埕一淡水

台中線一竹南一台中一追分

潮州線一高雄一溪州

台東南線一台東新開園

台東北線一海岸一花蓮港一大庄

○ 無線電信局処在地 基隆、鳳山

○ タイヤル蕃 最モ開ケヌ孿猛ナモノ、シルビ
ヤ山ヲ中心ニ北部山地ニナル

ブヌン蕃 新高山の南北にすむ 質おだやか
最高地蕃

ツオウ蕃 阿里山蕃ともいふ

パイワン蕃 南部山地に住す 人口最多い

牡丹社は恒春半島にゐる 明治七年征伐せしもの
サイセツト蕃 新竹州南庄附近山中、最も少シ
アミ蕃 台東平野、農ヲハゲム
ヤミ蕃 紅頭嶼蕃ともいふ 至極おとなし

- 基隆ー起重機 本島第三の都会
- 台北ー城内ー清国時代の城壁内
マンカ 艋舺ー台北の旧市街（域内の西）
大稲埕（城内の北）（台北の新市街）
市の北端には台湾神社あり、隣りて円山公園
- 宜蘭平野 熟蕃と支那人の雑居が区別しがたい
- 新竹州桃園 内地の宇治、茶店ぞろひ
- 台中州大甲 タコノキ帽、下駄表、巻煙草入
- " 鹿港 新高製糖線を西に進むと鹿港
屋根ばかりで、町は見えない
- " 埔里 盆地の小学校と蕃童あり これより（日月潭）を遊覧す
- 台南州嘉義 附近二北回帰線標あり
阿里山鉄道ー鹿児島線のループ式以上のもの
- 台南 台北から汽車九時間、プロビデシチヤ城（赤崁楼）（紅毛城とも）
赤崁楼は赤崁楼城址に清国時代に建てたもの
明治 28 年 10 月 28 日崩御の御居間、市の南部にあり
市の郊外に明延平郡王祠あり、島民鄭成功を慕ひて立つ県社開山神社これ也
安平 ゼーランヂヤ城趾アリ
屏東 年三回米がとれる
恒春 高尾〔雄〕から本島沿岸航路船にのり
南に向ふと恒春の北方二里半の海口といふ処による カジマル、椰子など林をなす。冬シモを見ず、夏も九十度以上にならない 年

中常春。街は静かだ。熱帯植物試育場あり
明治七年の牡丹社は海口の東北三里半、高五六百米の山中である
台東庁 恒春半島の南方海上七星岩、これ帝国の南端

〔旅中日記：5 月 28 日～6 月 6 日〕

昭和二年五月二十八日 晴 海軍記念日ニツキ
一条ノ訓話ヲナシ次テ約一時間旗取、蹴鞠、綱引ヲナサシム 河西支庁ニ参庁 近田〔留四郎〕課長、高橋〔綱三郎〕視学ソノ他ニ出張ノアイサツヲナス 那須〔正夫〕支庁長ニハ病臥セラ
ル、ニツキ官舎ニ御目舞ノ祝ヲ述ヘ一応帰着、
午後九時半佐々木父子三人ノ見送ニテ出発ス
伏古ヨリスル予定ヲ変更シテ帯広午後十時四十七分ニテ発。清田惇作氏態々見送ラル 帯広町長、青柳氏、松浦藤十郎氏、小池〔仁郎〕代議士見送ノタメ在駅 清惇氏、畑中氏等ニモ会ス
川西村長川内源吉氏ノ上京ト同車ス 現代ハ何モカモ手ヲヌイテ名ヲナシ事ヲ遂ケヨウトノミアセル一日運動シテ一日休ムトイフヨウナ始末
デハナイカナド一杯キゲンノ言論デアツタ 混雑ノタメ同氏ト睦ヲ交フルヲ得ス 余ハ小倉氏ノ親切ニ貸サレタル鉄道案内ヲヒモトク ソノ挿絵ノ雅麗喜フヘキテアル 数日ノネブソニツカレテネムイガナカナカネムレヌガ イツシカウツラウツラトナル 国境ヲコエテ下フラノデハ夜ガアケタ
車中ソバロニウタッタモノガ二十首

* ○ 列車中ノ読書者

○ " ノ撒水

高砂沖にてきく 砲のあと関ヶ原

* テヌグイ台東ホテル

五月二十八日 朝窓ニ緑野ヲナガメツ、七時二十三分札幌ニ下車 直チニ道庁ニ出頭 池田〔繁治〕学務部長、寺本〔菊次郎〕、若木〔作蔵〕両視学、小柳〔藤太郎〕属ニ〔ツキ〕面会、台湾旅程三五日ノ承認並ニ諸事ノ指示ヲ受ク、道史編纂室ニ竹内運平氏ヲ訪ウテ ソノ蒐集セラレタ資料ヲ一見シ氏ノ主任トシテ編纂ノ使命、意見ヲ拝聴スルヲ得タ 十一時カラ氏ハ特ニイソガハシキ時間ヲクリアハセ余ヲ円山札幌神社ノ参拝ニ案内セラレタ 十二時半帰着 高階〔研一〕宮司ハ上京不在 太田〔紀〕氏応接サレタ ソノ所蔵ノアイヌ器物ヲ見ル 往復電車でデ史学ノ意見ニツキ閑談ヲナシ愉快デアツタ 一時辞シテ書状ヲ認メ午後七時三十五分、再び車中ノ人トナツタ 因ニ陳述書ハ明日ノ小樽紙ニ掲載スヘク支局ニ小柳氏ハ持参サレタノデアツ〔タ〕 午後七時三十五分車中の人となつた かけめぐつたつかれと夜陰とで窓外ハ眺望断念、読書もものうく、小樽の大夜景を窓の硝子になかめつゝ列車は進む 函館通の旭川老商某氏と話對手になつて四十年前の函館の話をしをえた。当時外国人にビール一本五拾銭（日本値は十三銭）といふ高価でうつた この□談ですべて外人には四倍の高値であつた 市民は華奢になつて甲斐絹総裏張の羽織をきるをほこり、カケモノノ表装をはいで裏に争つてやつたと、ひとり相馬哲平氏のみスゲノ巻緒の下駄で絹物は一切用ゐぬ、兄弟は利益財産を分けようとしてもそれはゆるさぬ 却つて合資会社といふものをたてるに合資することをすゝめた 又大森海岸の荒地をもらひ、そこにごみをなげさせて今では立派な家を沢山たててしまった。いらい□かう話してゐる中にくるしながらもゆめの人となつたのは午后十一時頃。

五月二十九日 ゆめうつゝからふと車中の我に

かへれば、おとしべに停車してゐた。こゝで久方ぶりの噴火湾に接した。ゆくゆく駒か嶽大沼の奇勝をめでて例の老人と物語りつゝ、今年のさきのこれる山桜ををちこちにながめた。沢山認められた山桜はいかにも将来にきもちよい。

午前六時二十分函館駅下車。荷をあづけ、单身市役所にゆく。門が閉ちてゐたのでふと日曜と心づいた。時に七時、そこで素志の通り市長公舎に市長を訪ふ。閑静な見はらしに七時十五分、玄関に通され応接室に待つことしばし、十年振の氏は白髪をまじひられて和服で出てこれ、椅子によつて往年のお話になる。今回の視察につき台湾方面の便宜を伺ふ。上山〔満之進〕総督はよくしつてゐる、福井県の警部をした某氏は今どこに居るか、やはり郡長格で台湾にをるだらう、高等商業にもおぼえてゐるものがある云々。さて〔市内の〕往年詩稿を送つてあつたがとの仰故、いつか学校に記念のため御揮毫をいたゞいておきたいことをのべた。次に保導関係等を承り且図書〔館〕の改築のこと等も承り、岡田健蔵氏の市会議員として努力の由もきゝ、約三十分たつと、ふと岡田さんからお手紙ですと、今朝から応対のお嬢さんと思はるゝが（十七八才）とりつがれたので、余はとりいそぎ暇乞をし、一路公園に向つた。

望遠鏡で眺望し、改新築の図書館の外廓を見、ふるぼけた図書館裏に岡田健蔵氏を訪ふて初対面のあいさつをなす。閉館の処で資料は見なかつた、氏は一昨年六月高雄から台北にゆき、また北投や基隆を通じて高雄にもどりてかへつた当時の感想談あり。時しも参考になつた。石鈿石棒を博物館で見た上、台中で古代土器同様のを蕃人がつくつて使用してをることや高雄のテツパイのことなどきいた。しかし蕃人の方は全然見なかつたよしで、談は之れに及ばなかつた。退去して谷地頭から電車にのつて大門前でおり、

書店から大森学校の処在をきき、地図をもとめてほつほつとあるく。弁天社の附近遊郭町をぬつて海岸に出ると日曜の日和に遊参の人がぞろぞろとつづく。ゆきすごして無電所からもどつて大森校につく。なるほど古ぼけた校舎で、見おとす方が尤かしらぬ。

大掃除で先生佐藤校長は□□方と上を下への御混雑、市長より承つたといつて〔教〕事務室に通せられ大体のせつめいを承る。不思議に三野隆太郎氏と師範では同学だつたと、三野氏の不遇や表彰を話されて、人生の測るべからざるをいつてゐた。養兎業をきく。それから徒歩で駅までもどつて更に日曜故、湯の川清遊を思ひたち十一時十六分停車場前から乗電、同十一時四十分湯の川着、直ちに湯の川ホテルの千人ぶろにひたる。あによい気分だ。簡易昼食パンにようかんをほき、筆を走らせて日記をしたぐめ、更に二度目の浴をとつてのんびりした気分になつた。この快味を妻子にもわかつてやりたい、じぶんがもどつたら夏ゆっくりと皆をたのませてやらう。

日中のことで若い女や奥様は男女混浴を余儀なくするのをいやがつて自然ともじもじして入らぬ。かつして入るひまがなく男ばかり専有のかたち気の毒だ。浴客の一人が余にいふ。

大正六七八年頃、大阪難波島の造船工事に一軒に百二十人もつめこむ大入の当時、朝鮮人が沢山入りこんだ、その湯屋に男女の界の板を度々ナイフデキツツケテヌイテアル、ドウシテカトキクト、カウセスト客ガ半分モ減ズルカラダト、スキミスルノデ半数ノ客ハ繁昌スルノダトアツタ。又広島デノ男女ノ浴室ハ湯壺ヲ分ツテ居ルケレド、脱衣場ノ区別ノシテナカツタヨシ、亦サウイウコトデアラウ、ト。この休憩室ハ間口六間、奥行八間、九十六畳のへやだ。

けさ大沼でカバンからしまひ忘れの万年筆が出た。自分ながらあきれたりよろこんだり。

午後三時ホテルを出て湯の川停留場三時半発、四時函館駅にもどり、午後五時三十分れんらく船津軽丸にて出帆。

数年前とは殊り船内の設備応待には遺憾なく三千五百噸の汽船たゞみの上に茶をのみ歌集をひもとき甲板上になぎをながめ夕やみにつままれて静かにねむる。数日来よくねむれぬから七時より十時までゆつくりねむれたのはうれしい。青森棧橋駅から乗づき奥羽本線によつて午後十一時十分発車、夜行故窓外をのぞかず鉄道案内で

津がる富士は浪岡碇か関間□□□まず林檎の
青森川部弘前

汽車の中は大方東北線急行に旅客かすはれて我々の車さびしきまでのんびりした。ゆつくりくつろげて書見にふけるねむさめの□□

向ひゐるこの味きなさ　きのきいた□□□

一ついひえぬ人と

午後10時青森着、11時十分発　奥羽本線による車中は東北線に吸とられて殆乗合がなく寂しい。書見やらでいつとなくねむつた。前四時秋田で停車、めざめた。

*○秋田平野の水田　○桑畑　○屋造トヌリカタ

○ていしやのひゞき、動揺ぶり　○キリノハナ
〔象潟〕
*キサカタノエンドウ、タイナ　ムキ一尺二
三寸　ダイコンカブ、スナゴコヒ
キサカタヨリミナミハ海〔景〕ケイヨシ

*瓦ヤネ　ハツタウエ（吹浦）＝田植盛ナリ
自転車　ネギ　トマト　シイダケ　酒田
辺ノ学生

〔水原〕
*酒田ヲコシテ　レンゲサウヲミル　スキバラ
高天ヶ原ノ□　モガミ川コシテ　田植ニコ
ンチ

＊羽前三ツはし 学校児童 女ハモンペイ
長岡ヨリサキ更ニ二階立石ヲアゲヒサシヲ
ツケタモノガ多イ〔スケッチ〕



瓦ブキハ ヘツテアル
牛二田□□□

＊中条付近より作物成育ス、メリ
(クハ)(キリ)(茶)等心地よきまで

＊中条5日間
□ハアトデヒカル

沿道の屋造、田植作物等に目をはなさず午後七時富山の日ぐれを境まで裏日本の風光に心ゆくまで親した。雲煙遙かに佐渡島を望みて順徳上皇の御陵を涙と共に遥拝す。

〈一日吉野丸出帆を小樽新聞で一見した〉

中条で室川与一君一行百二十七人ノト乗合せる。けふは長岡に一同下車した。篠原部長をたづねた。富山からの夜景は断念してねむつた。福井金沢はどよめきにめざめたため車窓から失敬する。

三十一日 晴。前四時米原で目ざめ、それからうすらうすらして六年ぶり琵琶湖の光景を見る。五時三十分大阪に下車、電車で府庁に出頭する。府庁では玉田〔昇次郎〕前道庁社会課長が偶然当教育課長で居られたので来意をき、早速北野〔勝太郎〕属と打合せを了し有隣尋常小学校を訪問することに電話で照介^{〔会〕}された。十時单身同校を訪ふ。

首席の先生〔が〕に応接室に通せられてやゝすると学校長奥田貞三氏が見えた。十年来の旧知、

早速医務室、浴室、手工〔作業〕実習室、講堂、裁縫室、手工兼理科室等を順次に案内された。手工、裁縫はソノ授業中であり、殊に手工実習は卒業後の補習生の指導であつて〔簡〕タンス、イス、本箱や、日常の家具の実地製作中であつた。沢山の作品を一々見るに立派な出来だ。のみならず〔当地で〕本道での取引ねだんの三四分の一位についてゐる。とに角かうして職業をわがものと取得出来るのは至極仕合せである。最後に屋上〔展望〕運動場に上つて全市の展望をかね目ぼしい建物地点を指呼説明された。雄大なるながめである。聞けば〔あすは〕けふ限り校名が変更され、あすからは有隣勤労学校となるのだとのこと。府当局と電話などでひんばんに交渉で首席先生大に御多忙。実は取りそぎで辞しようとする、けふは児童に食事をやる日だから一つ同じ品をたべてくれと御親切にも御馳走にあづかる。エンドウのごはんのドンブリに、玉子の水物。これでは勿体ない程だ。

午後一時退出。電車で梅田駅にもどり、午後時 分発で三の宮に下車。明日の出帆吉野丸の申込を大黒屋旅館ですまし、神戸に出て買物をなし小包にして不要品と共に投ずる。この雑踏の地、連日の疲に十分の休眠をとるを得ない。止むなく午後七時須磨行電車にのりて七時半下車、日ぐれの海岸を散歩し、附近を求めてとうとう八時頃須磨寺境内の須磨温泉旅館に投ずることゝした。一泊が一円と二円の間、食事は一食三十銭乃至五十銭、各人の随意だ。早速湯にひたる。別府鉱泉、女給なし、主人がボーイ^{〔ママ〕}を兼ねてるとは拾つたもの、十時から閑静な二階に錠をおろしてゆったりとねむる。

六月一日 五時にねざめた。昨夜はゆったり十分のねむりをとれてあたまも足も至つて好都合。たゞ朝空の鉛色の雲おもげに須磨の海上をとぎした。七時約束の朝食、湯上りで心地よく箸を

とる。七時半宿を出で須磨寺に参拝、宝物拝観、遊園地を一周して、八時十五分同地発、電車にて〔九時〕約三十分で神戸駅前に着。葉書などをしたゞめ九時四十分で三の宮に向かふ、同五十九分下車、大黒屋旅館について吉野丸まで案内を乞た。ボーイサンがついて荷や札までとつてくれた。

とかうする中に正午ともなり、煙霞やうやくはれた光隙を汽笛の音いさましく出帆した。年来あくがれた内海の光景、今まのあたりにながめた気分は実に言外のたのしみ。目もはなさず甲板の人となつた。あれよこれよと地図にひきあて四国や山陽方面の都市などの地点を□ぎめにながめ、時に乗合者や船員にたしかめて見る。そこにいの一番にボーイさん気をきかして新しい湯の中に案内してくれた。湯にひたりながら内海の光景を船窓にのぞくも一興。更に船まかなひのめしをとる。なぎのよきこと限なく、それに船体も大きく頗る安全だ。限りなき面白き光景につられて日ぐれまで甲板に佇むと七時にも近く益船は佳境にかゝり丸亀沖あたりと思ふ頃にはもううらくなつたので断念して床につく。二三時間休眠、十時出て見ると四国も伊予沖か

対岸の電灯頗るにきらやかにならんでゐる。三十銭の大なしとサイダー一本をたへらげる。なしは神戸で求めたもの。岡山県上道郡雄神村、石源浄方で産したもの。味よし。

六月二日 午前五時門司入港。空は雨雲重けに見えた。メリケンコ、ソノ他沢山つみこんだ。舟ノニギハヒ仲々ナものである。賄の品は大抵こゝでつみ込む(キャベツ、フキ、ソラマメ等)。出帆まで数時間あるので、見物のため上陸者が可なりにあつた。乗り合せた客と語る中に生蕃の現状を聴取するに頗るアイヌの近状に似たものである。

神戸出帆の時は一二三等を通して百九拾六名だつた。のりおりがあつ〔て〕こんどはこんだ。自分等は壺号室才定員九名、三坪九畳に三名で特別に湯を入れてくれ、朝はコーヒーを出してくれ、しきぶんまであてがつてくれる。こゝで五人ふえて八人のりになつた。午後二時から四時半までくつすりひるね。五時夕食、六時半船は肥前五島の沖合にさしかゝる。風なし、波少々つよくなりて舟は大きくゆれる。

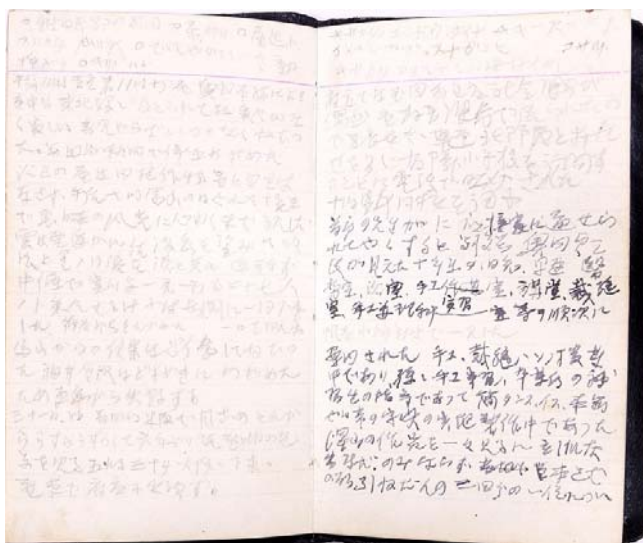
静かに旅程のことなど打ち案じ十時就床。

六月三日 午前六時ボーイの案内にて湯に入る。

甲板に上つて見ると一望際涯なき大海原、片影の陸を見ず。空くもれり。

豊満艶美の妖婦テーブルに向つて朝けしやう、人目をひく両乳房[を つや]のはりきれさうなうつくしき、見れば昨夜お尻をまる出しにしてゐた女であつた。人間にも艶美と醜惡と両方向あるをまぬかれぬ。

午前十時頃より天候危惡雨もやうとなつた。台中方面に低気圧ありとか、やゝ警戒する。波浪次第に



高く北方の風つよくなつた。時々甲板の展望をする。波のしぶき雨の如く壮快を極めた。湯につかつて午後十時就床。むしあつく船客ら皆扇うちはをつかふ。

六月四日 午前四時ねざめる。昨夜は動揺尤も甚しかつたさうだが自分熟碎して遂に知らなかつた。湯に入りて甲板にかけ上ると波濤のうねり大山小山をなして舟壁をうち傾斜甚しい。遙かに 神宮、神代明治両宮、大正御陵、宮城を遥拝す。一昼夜後の十時、海上平静に復し、アジンコートも刻一刻に近く□□に船内の婦人老人各たのしみよろこぶ様なり。

基隆沖のシケも次第にをさまりて船はいよいよ岸壁によこづけられた。午後二時、沢山の台湾土人の入りまじりてはたらく埠頭に下りた。直ちに基隆駅にゆく。流石に熱くて下着がだくだく、こみにこみあふ三等車の人となつた。一室四拾名許の室に余と三人の内地人、他は皆多くは跣足の台湾土人で附近農村の者どもと見える。晴衣を着た女どもも見えるがどうもげびて見える。一種のにほひがする。

行く行く列車の窓から見ると三月に植えられた稲はもう穂の出揃ひも多い。水牛の泥田に身をつけてゐる。目なれぬ青々とした主樹竹藪の中に点々れん瓦屋、瓦屋根の民家が隠見する中に台湾土人の立ち働くのが見えた。とに角好奇の目につられてゆく中に汽車は台北駅についた。こゝで下車、トランクを駅にあづけ、市内で書状を認めなどして、更に夜行で新北投に向つた。窓外くらくして見るをえない。台湾新娘二人盛装してのり合せた。いずれ良家のものと見える。二十数名乗合せた一室に内地人数名、他は土人で、酔漢も二名入りこんで盛にくだをまく。円山であつたか、停車すると附近にハーモニカをもてあそぶ児が吹奏する瑤曲は実に異国情調ともいひたい気分のする、家郷を思ふ切々の情に

たへぬものがあつた。空がくもつてゐるところをふと窓外に月光をのぞみえて、思へば旧三日月らしい、こゝにして月を見るも阿部仲磨呂ならぬ悲痛の思をした。

まもなく暗中灯火の明滅点々する間をぬつて下車する。附近はこんもりとした榕樹、やし、その他で、遊園地らしい。閑静な樹間をぬつて数十階の石階を上ると物さびた温泉旅館松濤園と記されてある。玄関から靴をぬきすてゝ三階の八畳間におさまる。茶、桜湯がはこばれる。温泉にひたつて疲を〔流〕洗ふ。ごはんがはこばれる。室内の電灯にむらがる小虫はと見れば白ありである。室内にはケラのやうな大きな虫がとびこむ。硝子戸にはやもりがはひまはる。成ほどこれが台湾味のある処。女中の一人が来てこはいことゝ箒ではらふ。十日ばかりのつかれに筆走らすのものうく、十時にはかやの中になる。いつの間にか雷雨となつた。

六月五日 五時頃めがさめた。昨夜来の雷雨なほ止まぬ。聞けばことし程一月から以来雨の多い年がない、わけて近来のふりつゞきには閉口だと女中がこぼしてゐた。

八時朝飯の箸もそこへにすてゝ宿を出た。豪雨の中にすぐ前の新北投駅につくと、青々した〔やし〕緑の榕樹や毒々しく赤い草花や様々の立ちならぶ庭園をながめまつこと三十分ばかり、八時半発車、昨夜暗中にとほつた沿線を見ると稲がよく成育してる。雨の光景はさながら梅雨時の気分を思はせる。こゝから――○〔後出の○印へ接続〕

淡水川は濁流溜々たる中に漁舟点々と浮んでタモで魚をつくふあたり正にこれ支那画そつくりだ。九時大雨の中に台北に下車。駅前自働車で自働車をやとひ、豪雨の中を一路北進する。十時宮前に下車、橋を渡つて第一の鳥居をくゞり

長き参道の左右石灯籠のならぶ中をずぶぬれ姿の自分があとにも前にも人かけを見ず、しょんぼりと立つゆくに心づいたほど、けふは日曜でも全く人出がない。うやうやしく礼拝をすまし、再び階を下りて双眼鏡に風景の台北を収めようとしたが濛々たる光景はめがねがくもつてだめであった。

公園内動物園をのぞくと入場者がいないので札売の女がポンカリとねむつてゐた処だつた。台湾特有の動物はさておき、公園の半を占められたこの広き地積に風致よく配置された心地よき場処も、名物台湾の大豪雨には蝙蝠傘をとほし外套をとほし靴〔を濁流を〕にひたり、実に苦しくてたまらなかつた。こゝから円山駅へ約三町、雨をぬつて辿りつくと、台北行は今発車した。あとのを三十分まつ。雨はいよいよ烈しい。約四十分をまちあはする。台湾土人の一人が駅夫と何か口角沫をとばして盛にいさかつてゐた。言葉の意味こそわからないが、我等と何らかはつた心理ではない。五六名の女兒が駅にをると日曜学校の僧侶さんらしいが二人までこの雨にわざわざ子供を見送つて来たのである。これは内地人だつた。先生さやうならゝゝゝゝをくりかへし――てわかれた。まもなく発車。ぬれにぬれた自分はこしもおろせず立つてゐた。外套もくつしたも悉皆しぼつたのであつた。＊〔後出の＊印に接続〕

○新北投の次駅北投で下車、駅より二丁先の北投公学校を訪ふ。左右雨にけぶつたうすくさい土人の店舗をなかめつゝ北投公学校の門をくぐる。れん瓦立瓦屋根の校舎の棟つゞきの樹草の花の間を事務室へと入る。校長先生はと尋ねると日曜のため二三の先生がつめてゐられて、その中の李訓導が出て応接される。校長は山口静吾と申しますが約二ヶ月の予定で満鮮視察に出

て不在ですとのこと。次の発車まで約一時間、学校の施設その他をおきゝして辞した。(○と○との間は五日朝台北へもどる途中の記事)

＊雨中駅から人力車をかつて本町摂津館に投宿する。□になほつて湯に入り番茶桜湯を喫した。身体の疲労動揺をおぼえて気がどつとせぬ。日ぐれから夜店をめぐり見てステッキや台湾物産品を見る。十一時就床。

六月六日 曇且雨 午前四時めざめた。更に六時半におきて湯に入る。八時宿を出て台湾人理髪店にて理髪。午前九時総督府に出頭。刺を通じて学務課長を面会。課長は種々懇切に教育状況を説明された。係の両氏は日程につき課長の内意を承け特に余の希望を参考として日程表をつくつてくれた。十一時より属案内の下に府専属の腕車にて蓬萊公学校、第三高女校、第一中学校、物産陳列所、中央研究所、専売局を順次案内の労をとられた。

午後四時十分一先づ府に引あげ、四時半帰館した。

けふはゆくわいに心かろくつかれもなく宿につくをえた。湯にひたりて夕食をとる。二十四才の昨日からの女中、山口生れのさうで、何が楽しみかときくに朝はやくよるおそいのでねむい、で一寸のひまにもとろとろとゐねむりする気分ほといふにいはれぬ気もちですと告白した。湯に入りゆつくりと葉書や日記をものし午後10時就床。

〔旅中メモ1〕

文具
裝飾品
実用品

金額	品 目	贈 呈 者
5 円	装飾品 実用 ステツキ	清田惇作
5 円	" " 茶ボン	園部亀三郎
1 円	" " 水牛肉入	安田 直
1 円	ボン	清水勘五郎
1 円	エハガキ	佐々木彦作
0.50	エハガキ	山村 守
1 円	エハガキ (タバコ入)	中村要吉
2 円 16.5	クスボン (2)	小倉三之助
7 円		小柳藤太郎
10 円	ステッキ (4.5)	寺本菊次郎
10 円	ステッキ (4.5) 茶ボン	高橋綱三郎
10	文具 水牛印材	那須正夫
10	ステツキ (4.5)	近田留四郎
5	茶器ボン	喜多章明
5	茶器ボン	金子英三
10		飯田誠一
3 円		児童一同
2 円		婦人会員
	水牛肉入	高田政弘
5 円		木幡富常
5 円		木幡小多郎
2 円		青柳聞天
2 円	水牛肉入	朝枝裕
2 円	水牛肉入	望月巖水
3 円 60	タバコ	三島桂五郎
4		新
10		シン
1		マサ
20		テイ
15 円		自己
計 156 円 10		

ステッキ 7 20 円

茶盆 6 10 円

文具 水牛・サンゴ 肉入

*タイワン帯広間 60 円		
島内車船	25	} 350
宿泊 10 日	60	
小使	20	
雑	85	
ミヤゲ	150	

旅行百話

- 吉野丸
- 作物と田植
- 気候、動植物
- 車中見物
- 裏日本の屋根
- 防砂
- 地名
- 学生
- 須磨の一夜
- セと内海
- 雲山万里家郷を思ふ
- 旅行と読書
- 旅行と知己
- 旅行と訪問

○ **吉野丸** 近海郵船会社所属、台湾線定期船吉野丸は、神戸基隆間航海船中可ナリ大型のものである。総噸数 8998 噸 82、端艇 12 艘、旅客 1 等室 42 人、2 等室 108 人、3 等 547 人、計 697 人ヲ定員とし、外に船員約 160 人、その中賄夫が約 60 人とのことである。

自分は今回渡台について、偶然この船に厄介になって神戸から基隆に渡った。船員の話によると、この汽船はもと独逸の仮装巡洋艦で、我が有に帰してから改造したものだと。普通汽船の木造部分に堅牢無比な鋼鉄板を使用してある強

堅なもので、建造以来十九年目になると。清潔が行届き、船員が親切で、三等にのっても特に日に二回の湯に案内され、朝は三食外にカーヒー、パンまでがそはる。いたってのり心地のよい汽船である。それに利がよく、殆ど昼夜で発着が出来る。

○ 汽車沿線の瞥見 根室線帯広駅を出発点とし、函館本線、奥羽本線、羽越線、信越線、北陸本線、北陸本線、東海道本線を連絡、延長し大阪から神戸を終点とした沿線を車窓から瞥見した。概要について述べて見よう。

田畑作物 七飯、桔梗附近は水田に苗を植えたのを見た。本土方面では〔以下空白〕

＊六月四日総乗船客四百拾七名

入港予定四日午後一時基隆港

同八日出帆 神戸門司ニ向フ

〔発信記録〕

6.15 日キイルン基隆館ヨリ投函エハガキ

広田竹蔵（熱帯植物）台北新公園

浅野由平 台北橋

松浦藤十郎 矢沢寺

清田惇作 竜山寺

伏根弘三 新高山頂

青柳鶴治 赤嵌楼

渡部京三郎 台湾鉄道ホテル

封書 野口課長 公文

" 近田課長、高橋視学 公文

" 寺本視学 "

" 樋口要司 "

" 安倍視学 "

基隆旅館にて

〔旅中日記：6月7日～10日〕

六月七日 雨 六時ねざめた。けふも朝から豪雨車軸の有様、これがたいわんの特色か。八時停車場にゆきて、不要荷〔をひ〕まとめ車をかりて摂津館にトランクを托し、九時半総督府に参庁、昨日のあいさつを述べ、且花蓮台東方面行時刻日程を打合せ、□書を受けて駅に向ふ。十一時十五分基隆行発車。

・台北ー松山間

カハラブキ レングワ造 時にワラヤ

水田いねみのれり カボチハナサキ キヤウ

チクタウハナザカリ タケヤブ ヨウジ^{〔榕樹〕}

ニハトリ アヒル アヒル （ネギ） 一白

サギ三四羽

カラカサヲサシテ水田ニ立つ男

・南港ヨリ汐止マデ

バセヲ スマウキクサ

泥川に屋根フキ舟に両手にかいをかく

〔スケッチ〕



白花ザカリ

・汐止から

室外ノ放尿。ツリバシ。

レングワヤネノ上ニ石ノ如クカハラヲ配置セ

ルアリ 〔スケッチ〕



クルミ。

ヒボテン

テツ橋

シダ、茶畑

- ・停車 ツリバシアリ タケノ皮ノカサ 竹ガ
キ テンソク婦人 ガマクサ
- ・八堵ヨリ基隆マデ
テツ橋、車内ノ放尿、トンネル
- ・基隆下車、〇時十五分
ここにて小柳氏へ書状を認め投函、駅前にて
昼食、カレーをしたため、再び雨中を
- ・午後一時三十分更に発車
八堵—暖々間 ハスイモ、ホコラ
〔暖々〕
・ダンダン—四脚亭—アヒル
〔四脚亭〕〔瑞芳〕
・シキヤクテイ ズイホウ間 タケヤブ山
〔猿洞〕
・瑞芳—三貂嶺（コードウ）間
ヤツデ、小学児童数名乗合セタ
茅屋—小祠、水源、奇岩石たり
- ・武丹坑より澳底まで
煉瓦の廟、茅屋白カベ、僅かにれん瓦を見る。
竹やぶの山もあり
山間の地方（貢寮庄）—コノ間□□
- ・頭囲 サツマイモ、トウキビ —モロコシ、
キウリ
- ・礁溪まで 魚ツル子 泥中の水牛
庭の入口でマキワリ、子供ノアソビ、円山温
泉、公共浴場、楓樹林あり、中山□松、バナ
ナ多し
- ・カゴガユクラミル —ムラサキ
〔スケッチ〕



- 〔四結〕
- ・しけつ—白衣の女二人のる（テンソク）
- ・タバコ、カゴ ダクスキケイ 宜蘭この附近
孔子廟、宜蘭公園、宜蘭神社、員山温泉あり、
東海岸昇降数第一か
太キクサアリ
- ・二結 ツリスル男浪ニ立テリ

・羅東 農業倉庫ヤケル

午後六時半蘇澳下車、直ちに連絡花蓮港行とき
わ丸に乗船す。十時出航までかなりの時間があ
る。甲板上では船長や船員一同夫々体験した妖
怪談が出る。つまりは夢や女のくだらない卑猥
な話になりをはつてしまつた。きくにたへぬの
であつた。この種従業員の教育程度も測られて
気の毒である。

十時の予定が最終の汽車九時四十五分下車のは
しけの客がおそいため結局十一時となる。小型
船である上、有名な荒浪のところでかなり動揺
した。自分は二等船客四人の一人でゆつくりね
むつた。

六月八日 午前五時着港、直ちに花蓮港近江屋
旅館に投宿。昨夜は雨ふりであつたが、今朝は
くもつた。まだ不安である。

七時花蓮港庁に出頭、府の紹介状を提出、来意
を通ず。〔参庁〕八時よりの執務によりて約一時
間町内を瞥見、高丘より太平洋を展望す。メム
ノ木の林は花とくに過ぎ、果樹ゆたかにしなり
を見せ、砂利運ぶ水牛の足並にぎはしく、跣足
の本島人、買物に店頭に立附近の蕃人、皆目あ
たらし。郵便局により、測候所に到り測候長に
面会する。重ねて参庁、内務省より出張ノ某氏
を案内の庁員にかね導かれて吉野蒲々の方面に
向ふ。時に九時、町を出ようとすると、三々伍々
跣足で異装した連中が、大きなきせるをくはい
て立ばなしをしてる。みればタイヤル高地蕃な
さうだ。その他こみあふ平地蕃、本島人、日本
人の展覧会を見るようだ。

沿道の稲作は見事なもので、反当り 27.4 斗、こ
れを米にすれば約半額とのこと。これはこの蕃
社の平地蕃アミ族の自作によるものとのこと。
ゆくゆく茅屋真直の蕃社をなかめつゝ左に折れ
て吉野校に着、校長山道氏迎へ出て久闊のあい

さつあり、大要を聴取、授業中を一巡する。折角昼食の用意までしておさへられたが、とりいそぎ退出。

氏の案内にて〔アミ蕃〕^{〔薄〕}蒲々蕃社の生活状態を実見する。それから学校につく。雨はふりつやみつ中々にをさまらぬ。船田〔定次郎〕校長は管内でも蕃人教育の耆宿とあつて、その話さるゝことがよく旧土人のそれと類似している。妙だ。約一時間ののち午后の授業がはじまった。一寸まどの外から一覽した。よみ方、算術、唱歌等であつた。それから正門にぬけて一直線に花蓮港にもどつのは午後二時だった。

こゝでひるをつかつて、湊属の案内で地元高女校、尋常高等小学校、公学校及農業補習の寄宿舎を〔巡〕視察、次でその実習園を見た。帰館は午後五時。湊属及門馬君と午後九時半まで歓談。

本日の視察に於て台湾とはいへ当町はいかにも日本風の町で、気分も大体さうした上、氣候がやわらかなので北海気分がした。

公学校の校長先生方は勤続年数割合に長く、且よく忍耐して安心の下この事業についてをられること、又、蕃人の子弟の農業教育の実際化の成功せる点、頗る参考となった。

天井のやもりがしきりになくに雨又しとととふる。

九日 朝来雨 七時湊属来訪せられ、手不足故案内者を出さぬから承知してくれと退出。余は午前九時の新城行自働車にのる。途中北埔にて停車四十分、次に先行自働車の泥中に入りて二回あとおしのため四十分、計一時間二十分の遅着、十一時に着。両校長出迎へられ、研海支庁に出頭、支庁長、警視に面会。庁前より自働車にてタッキリ橋まで案内を受け、タイヤル高山蕃の家庭生活を見る。もどりて殉難者招魂碑に謁し、山本校長の御厚意によりて昼食を受け、

更に教務室にて談を更に両職員と共にかたる。午後四時半併置校訪問。約一時間程会談、頭目の宅に案内を受く。夜は山本氏の厚意によりて宿る。台湾料理をふるまはる。午後十時就床。

六月十日 曇 午前五時起床、寄宿舎を見、教室を一覽し、支庁長官舎、天野校長にあいさつをなし、午前七時四十分自働車にて発、支庁長、両校長、宮沢〔矢作〕先生及警察官の見送を受く。同庁巡查岡部元三郎氏と同乗、市街まで沿道の状況及同地蕃社の説明を受く。八時四十五分近江旅館前に着、九時二十七分発台東行乗車、二等客室。

旅館女主人、番頭来りて見送る。

大庄中島〔真澄〕公学校長夫妻と同車す。校長は愛嬢の二才のを失ひ送葬して本日帰任の途中の由、気の毒に感じた。車中余の馬駄^{〔馬太鞍〕}安下車まで、窓外の地理、作物、沿革、植林、蕃社、風土、虫類、民俗、教育等詳細に渉り親切に説明の勞をとられたり。十時五十九分〔マタアン^{〔鳳林〕}に下車〕ホウリンテイ車、中島校長の紹介にて、出迎の木原〔徳治郎〕林田校長にあいさつをなして通過、十二時四十五分馬太鞍下車、校長〔牧内憲五郎〕の出迎ひにて直ちに駅より約十町の同校に着。一時半より三時半まで懇談、校長は再三カゴを持参せよと命ず。しばらくありて兩人かき来る。これにのりて行く。〈高女〉四時半タパロン着、校長〔西谷虎吉〕に面会、会談ののち、部落の家の中に案内さる。室内トウ造りのへやにしのかみどを見る。又、倉庫も見る。同五時半退出。カニカゴで悪路や川をこして、倶楽部につく。更に香川旅館に入り、ゐなか木賃宿を味ひ、一浴をとり、書状をしたゞめて、十時就床。コホロキ切りになく。

〔旅中メモ2〕

〔馬太鞍〕

馬タアン公学校

〔里〕

駅前10リ

〔齡〕

学レイ

13.3.31 設置

本島人	212 戸	△	}	506
男	493	45		
女	335	55		
計	828			
ニ 支那人	34 戸			
ハ 〔男〕	78	4		
ト 〔女〕	30	2		
リ 計	108	6		
蕃人	320			
ア 男	1026	198		
ヒ 〔女〕	1049	202		
ル	2075	400		

学級 8

内教員 3 名 蕃人

2100 円

教育費支出

寄生虫、消化不良、マラリヤ、トラホーム、皮膚病、呼吸器

手工ノ方面 トウ、竹細工ノ施設

領台前ハ蕃人ノカミヨ 以後ハ有史時代ダ

蕃人ハ本島人化シヤスイ故ニ内地人化サセル方法ヲトルガ尤モ大切ダ

本島 ラレロ ダデト

蕃 イキエエ

イノヌキダ エ

蕃語ト本島人語ガワラカヌ ソレヲ国語テムス
ビツケルノデ貴イ

運動ニギヤカラ好ム

蕃人ノ多神教、動植物〔ヲ崇〕ノ靈ヲ拝スル

忌ミキラウ日ガ多イクテコマル

カハス（物、夜）

蕃社ニ領台当時ノ首ガ十三アッタ 置物ヤ骨ヲ
ウヅム

迷信ヲ打破ス

皇太神宮及台湾神社ヲオマツリスルコト、神棚
ヲツクル

〔媽祖〕
本島人ハタレデモ（マソ）

五六月頃ハ尤モ多イ

熱帶熱、二日ねつ、三日ねつ

蕃人ノ〔特殊〕中等学校ヲ造ル

農業ヲ主トシ英語ヲ欠クー高女校

□□一主義ヲ欠ク

瑞穂校ハジメ寄宿舎ヲナス

蕃社大祭（9.15 日）アハマツリ

出席歩合

男 91.84

女 81.64

計 86.53

水牛ノ番ノタメ欠席多シ

昼食ハ持参ス 米食

カマドハ三百モアル

一昨年マデハ学用品ハヤッタ

昨年カラ教科書タケ

節約モ勤労モヤル 毎月十銭ヅ、ノ貯金スル
必要ナシ

タケツ、ニ入レテ土ニ秘藏スル習慣アリ

寄宿舎ヲ施設スル

*公共ヲ重セヨ、礼儀ヲヨクセヨ、清潔ニセ
ヨ、恩ヲワスルナ

*貯蓄ヲ秘藏

牧内マタアン公学校長の説明

牧内 73

香山三郎 60

宮本武男 55

友近常一訓 52 蕃人 30、9.4

伊藤留太郎 有資格 4

乞食 キツチヤ

牛糞 グーセイ

女人 ヤサシイ

ピシ 飼猫（男）

本島人

偶発事項

父ー

子ー○ー父

11ー3 月間 運動シーズン

瑞穂ノ附近ニ回帰線ヲミル

山本嘉造

稲葉花子 ^{〔ママ〕} 高 農

女尊男卑ー卑南

卑南公学校長

石上金治

	キセン	キシヤ
南行	15 円	28
	13 円	

北行 35 円

〔数字メモ 略〕

タパロン公学校長よりの説明

同情事項 医療機関ナク、キトウ者ヲ主トス

カナハヌカミノタトヘ マラリヤニカゝル

迷信 ^{〔空白〕} 川ガアル

多クツテスギルタケダ

唱歌遊戯ーヲコノム（科外ニヤル）

米ツキウタ、モリウタニモスゝム

女系相続ノアミ カカ天下

女の夜学会 母子ノ〔空白〕

クツテネルタケ 女子ノタパロン社トシテノウ

タヲツクリ、オドリヲヤルコト

四年寄宿舎ニ入レタ

男三一四	〕 在籍児童
女二一八	

自作 米、サツマイモ

平均シテクラシガヨイ

櫛風沐雨

*1 甲=1 町 未開地三十五円

ハラヒサケ

〔旅中日記：6月11日〕

六月十一日 六時半起床、曇けふも雨もやう、旅館主人旅人宿名簿帳の表紙を記念にかいて貰ひたいと申出につき悪筆をふるふ。

附近山上の蕃人は生ガ、カラシナ、アンコイモ、^{〔馬太鞍〕}芭蕉の実をもって、馬駄安市街に來りてこれを売る。酒をすくこと甚しく男女酒をのまぬ者殆ないといつてよい。且二三才の者にも強てのませる習慣であると。午前九時宿を出る。駅九時三十四分下り列車は水害の後とて十時十四分迄に延期（当分の間）。

駅には十数名の本島人蕃人入まじりて付合せ、各なにかわからぬことをさいづりつゝあり。いずれも女多く跣足で口々にタバコをくゆらしてゐる。女のたしなむさまおどろくばかりである。女は左右のうでに金環をはめ耳には環をはめてゐる。頭は黒布で髪をまきつゝんでゐる。タバコ入はカバンにしてつつてゐる。

アサガオ

頭部ニキセルヲハサム・カゴニトウキビ

（三笠駅）

早川校長ノ水牛ノエ

当時ノ次郎□ノ手ニナル

陛下 東宮にて台北ニ御行啓ノ節、全道公学校長ヲ代表シテ出^{〔北〕}台、御前にて当地アミ蕃兒童をつれてゆきて、御前授業をなしたる時の記念画なり。

8年前創立 — 三学級 — 100食（寄宿費）イモ

学校地 二歩 ソサイ 三分 （ ）ハラワン

マラワンスラの語義は 父三笠ノ方カラ余生レタトキキテ将来仕合せナモノニナルヤウニトノ

407 300人

（ウサイ）の室内ヲヨクミル 〔スケッチ 略〕

テワス — 酒ヲソナヘル

200年5代先ノヂイサンノ時ニ製作

正午、汽車は小降の中を玉里に停車、奥村〔純太郎〕玉里尋常高等小学校長出迎ひらる。某公学校長に紹介せらる。璞石閣の宿引に不用品を手渡す。即時同校長の御案内にて同校に向ふ。時しも雨やゝはれて日を仰くに全く頭の真上にあり。余生れて太陽を頭上にいたゞくは只今ははじめにして恐らくこれ再びなかるべきによき記念なりとかたりつゝ同校教員室に入りて少憩。職員は男三女二、これに校長を加へて六名。事務室はせまけれどどうやらとゝのへて気分よし。日本人の学校なればなるべし。校長住宅にて昼食の御饗応に預る。庭のせんだん、クロトンに目をうつし種々のお話を承る。木瓜をおくさんがもて来て御馳走下さる。床には樟の花台、紅頭嶼ヤミ族の製になる大土器の珍品、またと得かたきものをおかれた。木瓜はかぼちやの皮をむけるが如く、味ひ柿にて、また味瓜のそれにも似たり。午后二時より玉里第二公学校を訪ふ。奥村校長案内せらる。学校は僅かに二町を距るのみ。土曜日にて既に放課後なり。学校長池田申平氏は三日前に赴任せられたる由にて、これより通学区域内の蕃社へゆくとのこと。これ幸と同行を求むるに、同校教員山本六郎氏はアミ蕃社出身にて非常によこび雨中をしひて余の行かんことを望むを幸ひ、奥村校長と同人同行す。途中よりアミ蕃のカニカゴにゆられてゆく。余はこれに二回目なるに両先生は御本尊なから今日がはじめての由、閉口の体なり。行くこと二十数町、見れば一段の高みに男女青年団員四十名二列になりて整列して出迎へたり。一人の号令下にたちまち一斉に敬礼をなす。中

にこの四十余戸の下勝湾溪部落の頭目山本嘉造君あり。先導にてこれが通訳は山本六郎氏即頭目の子なり。頭目及先覚者六郎君等の熱心なる指導の下に出来たる山上の公園は各自の奉仕の作業よくもこれまでになれりと敬服の外なし。石階を上りつめて展望し、下りて(戸主ウサイ)の室内に入て見る。全部トウにて床をはれり。室内のくらきこと、アイヌの小屋に似たり。出て、ラワン第二夜学会場を見る。中央に一行に卓あり、向きあひて授業すべし。黒板名札あり又ツキガネあり。次に青年団のモミ貯蔵庫をみる。独立のものなきため、山本頭目の附属建物を充ててある由。をはりて本住宅に導かる。正面には陛下の御写真をかゝげ、左右には、右に祖霊をまつり灯明をあげ、左方には神だなをもうけ、なほ左右の壁間には社寺皇室にちなめる額をかけたり。中央に卓をおき、ビール、手製のもち、もも、肉汁、ヨーカン等、したゝかな馳走を山積しあり。余はビールをのみずと知りて、サイダー、茶をすゝめらる。山本君一の土器を取り出し、これを記念に余におくるといふ。今より五代前の祖父が凡二百年前に手製のものなりと。これに酒をもりめぐりに肉をならべて先祖の霊にたむけたる、デワスといふ器物なりと。加之臼杵を出して示すを見るに、臼は木製なれど、きねは石器にてにぎる処をトウニテまけるなり。珍なりといへば、先生もつていきませんかといふ。おもさ約一貫五六百匁。次に小さき臼と石杵を出す、これは老人は檳榔の実を歯なくてかめぬ故につきくだくものなりと。共にめづらし。次にトウゾルの大こりが出る。内にあるひざかけ及クビカザリをあはせて余におくるといふ。余よろこびてこれを受け、且金子一封を青年夜学会及公園建設金トシテ差しおく。時に屋外雨しきりなり。池田校長は校務のため滞在の由故、奥村校長と辞してかへらんとすれ

ば、又々四人の青年こゝろよく走り出で、前の如くカニカゴにて見送りくれたり。

灰をとかせる如き泥川の中を渉り、三丁ほどの鉄橋の上をゆられて、璞石閣の玄関につきたるは午後六時。奥村校長は去らる。一浴をとりて夕げの膳に向ふ。そゝろにきく室外のガタガタ、電灯会との由。室外にはかへるのこゑ、天井には例のヤモリのこゑ、時に耳朶をうつて台湾旅愁切に郷里を思はしむ。八時奥村校長並に職員三名来訪、余の感想をたゝかる。所見を述べ、且意見を交換し、北海道の質問に答ふ。新城の宮沢〔矢作〕先生と同様、こゝにまたサオロ岳の位置につき地図に明記せられざることを質問せらる、且煙霞勝遊記の抜粋などをも示さる。余一々指点する処あり、快談時を移し午後十時半退出せらる。

＊北投公学校長 山口静吾

” 訓導 李瑪琇

〔旅中メモ3〕

中島〔真澄〕校長談

〔溪〕
清水ケイ ツ、ガムシ

花レン台東ノ境カラ パスカウケイマデ テツ
センガアル

ブヌンハマユゲヲヌク

〔薄〕
蒲々公学校長 船田定次郎

研海支庁勤務 岡部元三郎

大庄公学校長 中島真澄

玉里第二公学校長 池田申平

玉里尋常高等小学校長 奥村純太郎

〔公〕
 玉里第二小学校訓導 山本六郎
 花蓮港庁長 中田秀造
 庶務課長 和田博
 視学 緒方足躬
 属 湊増吉
 雇 〔空白〕
 財務属 門馬豊蔵
 〔常〕
 研海支庁長 助広三郎（港街新城通）
 （警視）地方 森野石之助
 新城公学校長 山本英雄
 新城尋常高等小学校 天野亮一
 同教員 宮澤〔謙介〕矢作
 ブセガン警察官吏巡査部長 研光利三郎
 北埔巡査 柴光治

〔農〕
 村富俊平（〔花蓮港〕実業補習学校）

渡辺□生

公立馬〔太〕鞍公学校長 牧内憲五郎
 太巴塢公学校長 西野寅吉
 花蓮港公学校長 坂本茂

*1 才 18
 2 才 12 モミデチロザウ一俵五斗米

〔旅中日記：6月12日～13日〕

六月十二日 午前六時二十三分玉里駅発車、駅頭に奥村校長、内田〔徳太〕先生、見送らる。途中、徒歩れんらくでてまどり、午後五時着。〈（ノリツギノ川ニジヤリウンパンノ生蕃処女連頭にてはこぶ）〉安倍視学の出迎を受く。腕車にて台東ホテルに入る。安倍視学の訪問にて印刷物一束を受く。自働車にて馬蘭公学校、並に家庭、頭目の家をとひ、次に卑南公学校及部落訪問。家庭には神棚あり、〔頭目〕部落には消防

ヒノミ（一ツ二千円）あり、共同精米所及附属養鶏所を見る。自給自足且貯蓄心あり。但卑南蕃ニカギリ年々減少ス、原因ハ種々アレドモ、バイドク及怠惰ニシテ□□シ女ノ勤労オドロクベシトイフ。

台北高女四年生イナバ花子の家はこの卑南バンから出た由。高等農林卒業生、教員等、可なり成功者ある由なり。約一時間半にて帰宿。宿にて安倍君と夕食をとり、再び尋常高等小学校、台東公学校校舎及公学校の寄宿舎生活及□□試作場の動植物を見、樋口課長を訪ひ、安倍氏公舎に彫刻を見、紅頭嶼ヤミの人形及サリセン蕃の刀（首切用）等を寄贈され、同行して庁舎内を一覧し、午後七時帰宿。八時より十時半まで来訪の視学と懇談す。

六月十三日 午前四時半起床。五時二十七分発車、花蓮港に向ふ。

〔移動記録〕

一四日 午後八・三二 下車
 八・三五 八堵ノリカヘ
 " 九・二〇 台北 着
 二八 発
 コレヨリ急行
 " 一二・〇〇 竹南 着
 十五日 " 一二・〇一 竹南 発
 前三・一三 彰化 着
 三・一八 " 発
 七・四五 高雄 着
 八・〇三 " 発
 九・〇二 屏東 着
 十五日午後 三時五十七分発 台北
 七・三六 着 竹南
 七・四一 発 竹南
 一一・二一 着 彰化

*三三五銭 スオウー台北間 二等汽車
一円 女中手当 キイルン
五〇銭 宿引手当 "

〔旅中メモ4〕

豊原郡小公学校長会議（6.2日主催 台中）

6.6 台湾日日新聞記載^{〔報〕}

諮問事項

1、徳育振興に関し前年度努力せし事項並に将来
実施すべき事項如何

1、各学校下に於ける青年指導の具体案如何
打合事項

1、公民教育資料編纂の件

1、本郡本年度教育研究に関する件

1、州主催学科研究会員選出の件

注意事項

1、実科教育に付て学態等の養成に付て年表調査
の件

1、教物に付き

1、州主催教育研究会ニ関スル件

1、学校衛生に関する件

1、公学校児童半途退学防止の件

1、児童文庫に関する件

1、青年団指導奨励ニ関スル件

1、国語普及事業奨励の件

1 帯広神戸間

2 神戸基隆間

3 蘇澳花蓮港

4 玉里－台東間

5 〔大和－台東間〕台東－花蓮港間

6 花蓮港－蘇澳間

7 蘇澳－台南間^{〔ママ〕}？

8 台南基隆間

9 基隆門司間

10 二日市間

11 門司帯広間

*60 銭 エハガキ 20 枚

*15 日 1 円 茶代 基隆旅館

〔旅中メモ5〕

札幌市運輸課旅客係長 斎藤忠

道路を造る

ひんこん者を〔以下空白〕

〔台東〕

東 台 尋常高等小学校長 保坂終治（台北師範）

蕃人汽車半額

〔ママ〕

卑南蛮ハ絶対ニチ、ヲヤ

酒タバコ

蕃刀 パイワン族南部

タマリ族ハ平地ニ出テ来タ

課長樋口要司殿

*日雨碌 売薬業

喜三郎

*露人 チョウマ コフ

アミノ中ニモ チョウマ コフ

〔芭蕉〕

キンチヨウ ノ フサ 5、6条20個位ヅ、

50 斤＝8 貫

〔旅中メモ6〕

アイサ

一ツ日ノ下ニ万民イク

大河ノ如し

氣候ト勉強

十二、三デ早婚 早熟

ヒニンノタメニ ^{バラ} 抜きノヤハラカナハヲニテ

ニジルヲノム

カレワン蕃ハ残少

三年毎に

バイドク多し

*クロトン

率先ハンヲ足ル ^{〔垂〕}

・共同耕作ニ来年ヨリヤル

・農業補習学校ノ実現

・平地蕃ハ従順

・本島人ニハ蕃先生

母ノ入レルモダスノモ

・マラリヤトキモノ

(□□ノ必要)

・父ノ ^{〔打擲〕} 丁チヤク 營養不良ニツキ寄宿舎ニ入ル

ナラル

・本島蕃ハ ^{〔静肅〕} セイシク 高蕃社ハサハグ

・本島人

ダ行 ラ行

ロロララケ

泥だらけ

・タマゴとタバコ

・玉里 ^{〔マ〕} タコゴトタバコ

・オボンニオチヤガノセテアリマス

られ

〔旅中メモ7〕

蕃人

俚謡民謡

〔スケッチ〕



上ヨリ

ヨコヨリ

学務課長殿

野口敏治氏

金色

青又ハ赤

玉里庄長 松尾温爾

庄助役 山口次人

六月六日

一、理髪 二、手帳ヲ求ム 三、辞令 クツシタ

名刺 四、参庁(車ニテ)

学務課—順路—資料

理蕃課—許可証

一、物産陳列所

〔纏足〕 テンソク 〔福建〕 フクケンノ女ガナマケル

酒売

蕃人ノ特徴

牛ヲ食セス

牛ニスキヲ用ヒス

同姓ハ婚セス

〔結納〕 ユイノフ ト チガフ 〔聘金〕 ヘイキン

女ヲヨロコブ

大家族制度

六十乃至百名位大家族制で分房だと

分産 男女サアリ

内地人ノ□□□一部

日蝕

(蕃族研究者)

府報一三二号六月一日

昭和二年六月一日

勲八等 山口静吾

従七位

〈台東ホテル〉

小杉周作先生 サホロ岳の質問

〔元〕岡本〔雄二〕先生

内田〔徳太〕先生

玉里尋常高等小学校

〔発信記録：5月28日～6月7日〕

途中ヨリ発信

5.28 吉田テイ宛 ハガキ 札幌駅前
広田巖水 " "
安田直章 " "
高田政弘 書状 "

5.29 小川鈴 婦人会員 ハガキ
清水勘五郎 岩崎キク "
広ノハル 平野 山村正夫、守 "
佐々木喜作 直作 弘太 "
新、シン宛 ツガル丸
エハガキ

6.1 〔河西支庁長〕
〔近田〕

神戸駅
吉田テイ 神戸ヨリ
児童一同 神戸エハガキ
婦人会員 "
寺本視学、辱知各位 "
小柳藤太郎 (神戸須磨の浜)
竹内運平 同課員 楠公廟所碑文
朝枝氏御兩人 湊川神社
門崎、西田両氏 伊藤公銅像

〔森要人氏〕
6.1 那須氏 神戸(須磨遊園地エハガキ)
吉野丸にて
高田氏 係一同 同 洋館
近田課長 拝殿 湊川
金子属 " 海洋气象台
喜多属 " 三角公園

6.4 テイ 台北ヨリ
〔シンアラタ〕

- 〔安田〕
〔広田〕
- 6.5 清田惇作
森要人
〔小野保次〕
〔奥田貞三〕
〔□□□義〕
岡田健蔵
〔佐藤充雄〕
〔三島校長〕
青柳聞天
〔十勝毎日社〕
森義平
〔佐山融〔吉〕〕
奥田貞三
小倉三之助
〔佐藤孝三郎〕
飯田町長 台湾神社
岸收入係
鈴木助役 台湾神社
三条鶴一
山本芳江
小野保次
佐藤充雄
- 6.6 台北ヨリ 森要人 神戸エハガキ
テイシン新 バナナエハガキ（着色）
池田繁治 台湾総督府（"）
那須支庁長 台北植物園（"）
佐藤市長 本島人アヒルカヒ（"）
三島校長 台湾神社一の鳥居
- 6.7 小柳属 キイルンヨリ 封書

*新北投ヨリ北投八分
台北へ7哩6分

〔発信記録：6月9日～14日〕

- 6.9 花蓮港ヨリ テイ シン アラタ宛 水牛
エハガキ
- 6.10 マタアン香川方より 湊増吉属
" " 山本新城校長
- 6.13 □□ 台東 安倍明義 書状
" 鳳林ニテ 渡辺校長 書状
- 14 近江屋ヨリ 山道校長 "
- " " 渡辺校長 "
- " 三島校長（花蓮港海岸エハガキ）
〔常磐〕
ときは丸
- " 佐山融吉（謝將軍、范將軍） "
- " 林茂（新高山の遠望） "
- " 渡部守治（水牛と土塊家屋）
- " 児童一同（平地蕃のオドリ）
- " テイ シン 新（旧城門と轎）
以上トキハ船中
- " 園部亀三郎（ラウシの桜）
〔蘇澳行き〕
ソオウイキにて
- " 中村要吉（謝將軍、范將軍）
- " 土田丑之丞 台北新公園（熱帯植物）
キイルンニテ
- " 金耕太郎 新高山頂 キイルンニテ
- " 朝枝文裕 次高山 "

〔出納記録：5月27日～6月7日〕 〔略〕

*山根囑託 博物館ニテ五日午後五時ヨリ
我が上古史と台湾蕃族
纏頭（チツプ）

〔出納記録：6月7日～6月11日〕 〔略〕

〔出納記録：6月13日～6月14日〕 〔略〕

*クチナシ（花白） チリギハ キイロニナル
香リイトヨシ 台湾人ノ女ガ〔以下
空白〕

*レオ・ノフ
自分 父ノ名

露人レオノフ

〔短歌1：6月4日～7日〕

すかれたる畑のなかめのおもしろさ心にめぐむ
春のよろこび
めづらしやポプラ花さく帯広の公会堂の春のあ
けほの
夏帽はまた見えねとも汽車の中台湾行の己れひ
とりのみ（五・二八シントクラコシテ）
汽車の中さわめくこゑの鎮もりてきしる音のみ
さよふけにけり
日本海大海戦の記念日にかしま立つ身の心おと
るも
あしたよりはれしみそらを仰きつゝたのしきけ
ふをまたくらしけり
うちまもる人のねむけさ我ながら我を忘れてゆ
めに入るかも
汽車ならて空気枕の心地よさいかてかたらむう
ちゆられつゝ
かりかちの山も車にまかせつゝ身はやすやすと
〔忘れ〕こえにけるかな
ねさめたる朝目にすゝしゆく汽車の硝子にうつ
る窓の山々（ボンモシリにて 以下二八日）
家にあればなほもふしとにありつらむ汽車のあ
さけねさめのねむくもあるかな
宵の雨名残を見せて瑞々と青き林の夜はあけに
けり
水田の底に富士あり春の汽車小町田の水
のりすてし汽車に心のひかれつゝ名残ををしむ

春の人々
うぐひつる竿のみ見えて若葉かけ人のけはひも
あらぬ川岸
石狩の山は十勝に先立て春の光に雪とけにけり
朝日かけをがむもうれし六年ぶり有珠も虻田も
目の前にして（以下二九日 落部にて夜あけ
て）
さきのこる桜の花さびしきに大方山の春そくれ
ゆく
しだの葉も尺にのびたり笹原のふきやよもきの
中にましりて

*途中ヨリノ知己

札幌 竹内、水原、川島、寺本、若木、小
柳、西田豊平、門寄文一、小樽支局、十
勝毎日支局
函館 佐藤市長、岡田健蔵、佐藤充雄

（大沼より見たるこまがたけ げに自分の広重
のゑにはも似たるそのまま也）
けふも亦是れしみ空を仰きてたのしや春の汽車
の旅する
かしましき巷をさけてカツコウのこゑきゝなが
ら湯にひたるかな（湯の川）
つかれたる足をのぼして湯にひたる心地のよさ
を何にたとへむ（湯の川）
我が舟は波にうくとも知らぬまで和きになぎた
る津軽海峡（津軽丸舟上）
木の葉〔かと〕よと魚つる舟を笑ふなよ軽き命
の主は乗らなく（＼）
翼なき身をは悔まじ海山の千里もやすくこゆる
代なれば
なきもよし舟も昔の舟ならず渉るに容き津軽海
峡^{〔ママ〕}
ぶらんこに乗りし昔〔の〕をおもひいて〔たの
しく渉る〕舟路たのしや津軽海峡

茶をくみて歌集ひもとく津軽丸船の中とはおも
ほへなくに
〔醉〕
糸 はさりし人は己を疑ひぬ舟路はかくも安き
ものかと（午後十時十分青森上陸）
蛙なくこゑのまとよりふき入りて汽車の旅すゝ
しまよ中にして（三十日零時一〇分弘前停車）
四つ手あみひけとかゝらすゆるやかに流れもや
らぬ夕月のかけ
にこりたる水にうつして見し富士は小町のかほ
に墨ぬれるごと
津軽女の「かほの」みめはりんごの色ににて白
きあかきかつぶらかに見ゆ
まよ中におつる涙の雫かと硝子のつゆをうたか
ひにける
天地は今しかたつをのみほしてあるかとはかり
夜の静もれる
たちつゝくいくその松か我が汽車を送り迎へて
黙しゐるかも
砂山の松のうねりに浜風のあらきあたりと見て
ぞしらるゝ（三十日土崎）
はれつゝく空のうれしさけふも亦吾れ「はかり」
のみいそく旅にあらねと
御物川渡りつくせは小松山つゝしさきたり藤も
さきたり
〔時〕〔願〕
左べん右こ走る車窓にいとまなき春のなかめの
しほらしき哉
ふち乙女つゝしをとめのほこらかにゑみてにき
はふ晩春の山
すくへと肥えたる土ゆなりいてし作物に似て
家ゆたかなり
雪白き鳥海山の頂にのこれる冬のさむさをそ思
ふ
一目たに見おとすをしと海山のながめをきざむ
旅心かな（羽後本荘）
思出に何をのこさん海山をうつしゑならできざ
む心に（西目）

草刈の馬追ふさまのおもしろやせなにつまれし
春の花草（金浦）
いつかわかゆめにあそひし砂浜のなかめににた
るこのあたりかな（吹浦） ノボリ
石地藏三基ならひて ちこ 二人立ちましらひて
〔稚児〕
汽車見送るも（酒田）
とる人のこしのいたさも知らぬ身はうゝるさな
へのたゝおもしろき（余目）
むらさきに春をうつしてゆめのこと桐の林は花
のけむれる
きりぎしにさからふ波もたゝぬ日は（ノボリ）
〔五十川〕
かもめのとぶもねむけくし見ゆ（いさがは）
トンネルをくゝりぬけてはパノラマをうち見る
ことし日本海岸（あつみ）
〔温海〕
大空をのみほす沖の荒波もねむるかけふのなぎ
になぎたる（府屋） コンチ
はらむへき風もなき日のほかけ舟動かぬ沖のけ
ふの静けさ
ヤネニ石ヲノセタリ、又瓦多し
箱庭にうつさば小くなりぬともこの岩山の海松
もかな
礼文花のそれによくにし岩山よとどの生えぬが
たゝにさびしき
佐渡が鳥空にかゝりてくものことかすめるさま
のすてかたきかな
はまなしの花のゆらめくまつかけにしはしいこ
ひてゆかましものを
こけら雲はるかに見えて松原つゝじの色も春の
うせゆく
人のすむ島にしあれば北海の熊あらねどもなど
か台湾
笹うち伏し小松はらはふ砂山のくつれへし
〔鯨波〕
（くじらなみ） 2時40分海に出る
ゆきかよふ道やすくはなりぬれと昔忘るなおや
しらす険

もしやとて携へ□見しかゝもりの昨日もけふも
□をかきつゝ

山は皆青葉に若葉にけふれるを湯殿山のみ雪ま
だらなり〔能生〕（のふ）

手をあけて見送る子等の愛らしさ我がのるき車
をうちまもりつゝ

（ノボリ） 〔梶屋敷〕
（かちやしき）

イトイ川（レンゲノ田）

桐れんげ見つゝ昔のこえきいて幼きおりの心にはして

*勝木（かつぎ） 寒川（カンガハ）
エチコ□ カヤ 〔煙出〕
ケムダシ
アホドリ □□□□（桑川）

〔早川〕
*はやがは

ココデコンノボウシ 女ノツキ

コンチトミラレタ

順徳宮御陵遥拝

間島 マジマ ジテンシヤ〔スケッチ〕

戸間名屋シサンしり

君が代のこゑのきこえぬ里もなし津々浦々に
ひゞきわたりて（親不知）
くりからと駄夫のこゑをきくたにもうちすきか
てにまとあけて見る（夜くりから）
しらみたる琵琶の湖ほのへときゝなみ見えて
夜はあけんとて（三一）
六年ぶり相見し山は若葉して〔かすめるみね〕
みとりのまゆに朝かすみせり（向日をこえて）
たけやぶのこんもりならふ山崎〔のみとり〕の
家廻々白壁の見ゆ
京の山かすみのまゆにみとりしているとる花の
かほうつくしき

なつかしや六年の昔京に来てたつねしさまのお
もかはりして（山崎）

立ちつゝく瓦かやふき白かへの見え〔つかくれ
つ〕かくれゆく竹やぶの里（たかつき）

ねふかりしまなこひらきぬ新しき朝の空氣に心
あらひて

日の出する近江の湖の朝風にかほふかせつゝ吾
か汽車ゆくも

晩春の花もかすみもうすぐもりかなたのそらは
うるこ雲せり

*桑ノ古畑

茶（間島）畑、桐

山崎 〔宮家〕
カヤヤ

*3826 千円、イタリヤ産大理石

55×46＝□ 3年6ヶ月

25万人 6階 土下屋上8階

大毎紙

ネンリヨウ 1日一万三千円

三カマ

*東区

大手前

物忘れ忘るゝくせの繁くして吾から吾を吾のあ
きるゝ（三一日・神崎）

はれつゝく空と海とのなぎの中を花やかにゆく
我が吉野丸（六月一日正午）

小さな双眼鏡を手にとりて絵の如く見るせと
の内海

小さなめがねの中にせとの海をさめて見れば
絵の如きかな

源平の昔は代々にかたられておもかはりゆくせ
との海山

船窓ゆせとの海山ながめつゝゆあむる旅ののど

かなるかな（昼食をとりてゆに入りて）
きい和泉くもにかくれてわからねどそなたにあ
またほかけ舟見ゆ
汐風はなこみて涼し六月の淡路島山うすみどり
して
前うしろひとつからだのいとまなさみのがすま
しとせとの兩岸
せとの海ねむるはかりの和の上を波たてゝゆく
「我が」これの大船
見晴るかすせとの海つら波風のなきに心のもの
たらぬかな

＊修徳館（感化事業）

豊崎勤労学校

土門学園 → 駅前 汽車

波風のなきかにくしと思ふまでせとの舟路のな
きになきたる
心地よく清められたる甲板に六月の日のさすか
すゝしき
湯あかりをそゝろありけば甲板にあさ心地よし
門司の港は（二日門司）
人山の海に浮ひてはしけ舟浮つ沈みつきかけ
りゆく
波荒き玄海灘ときゝしかとけふの風には張合も
なし（玄海沖）
あおみとり白のしぼりのゆかた地の一重をりな
す浪のいろよき（＼）

＊下の関平戸間玄海ナダ

波の上舟安らけき旅にゐてかはりなきかと家ぬ
ちを思ふ（夕げのゝち甲板上散歩して）
けふも亦あそびつかれて新はもねさめに吾をた
つねてやある
大海の暗をひたゆく我が船はうちよる波の音ば

かりして（午後十時）
目にさゆる島のかけたに見えぬ也大海原の甲板
の上（三日・午前八時遥かに上海の沖合にて）
大舟に身をはまかせてわたのはら沈むもうくも
身はやすきかな（十時より雨ふりいて海上波
のうねり大きくなる）
ばり板の上をすべれる心地して速さははやし吾
が吉野丸（午後五時）三七五ノット
西東北も南もはてしなきみそらにつゝく大海の
中
北斉の筆に写さばをかしからむ荒波狂ふ東支那
海（四日海大にあれけふ午前七時半）
恥らはし名は乙女子の吉野丸迎ふる波のなふり
なふるも
まちにまちしアジンコートの近づきて舟みない
さむ港入かな（十二時）
港入近つくまゝに舟は皆よろこびとよむ基隆の
沖
海神の吾はとりことならすして八重の海山こと
むけて来し
くもりたる人の心もはれやかに港入する昼のに
きはひ（正午）
珊瑚とる基隆沖の岩山にトウダイたてりアジン
コートの
あらなみはたけりくるへと吉野丸やさしく直く
おのか舟路ゆく
北投の空に出てあふけは三日月の久方ふりの□
□なつかしきかな
湯の宿の静けき朝のゆめさめててけぶれる雨に
花のにはひる（夜北投温泉松濤園にて）五日
水牛の泥にひたりてあるもよし汽車の窓より台
湾のけい
酒一つのむにもあらずされ一ついふにもあらず
旅めぐりゆく（五日摂津館）
（基隆八堵間）ぬれけふる車窓にひとりゆられ
つゝ台湾人のことさやくきく（七日）

むしあつき汽車にゆられて硝子戸のくもりけふ
れる雨の中ゆく

＊本町生蕃屋

＊講堂 二万永久（アヒヤノ） 293 名
（60 坪）

時計□

リュウガン

2 町歩

8 年□□

1 万円

キシクシヤ

〔短歌 2：6 月 7 日〕

- 山川は雨にけふりて油絵をうち見る如き様に
もあるかな（武丹坑をこして上流の溪谷にて）
頂双溪のほとり
- 水牛にのれる二人の水に入りて草はますさま
のおもしろきかな
- かへ土を〔流〕とかせるなして山川のみどり
の中をながれゆく見ゆ
- とんねるのくらがりぬけてふと見れば太平洋
の波白きかな（澳底にて）
- 竹やぶのみどりにけふる六月の雨の中ゆく汽
車の山越（まもなくとんねるをくゝれば海に
出づ）こゝ大里也
- くもぎりのかゝれる嶺のいたゝきにみどりを
ぬひて瀧のかゝれる（大里）

大里大溪間 漁村の家のやね〔スケッチ〕



海と山と岩壁の景よろし

- 六月の山のみどりの涼しけに〔たき〕雲かと
見てんたきのかゝれる
- 海もよし山のなかめもさらによしいつれをす
てん汽車の窓より
かゝし互にたおり
- きざん^{〔亀山〕}ー外澳間 カボチャ花さけり
- 水牛をひける少女の大み^{〔糞〕}のに雨おもたけに
かゝりたるかな（頭圍）
- しるびやの山のいたゝき雲きりのかゝりて雨
のふりへたてたる
頭を窓外に出す まとをあけはなし

〔短歌 3：6 月 7 日～8 日〕

- 見晴の青田に黒くうこめくは雨にくれゆく水
牛のむれ（冬山）

さぎ十五羽 クヒツバメ数十羽

オチウ（黒島産）

青木校長 羅東

地理 歴史 算術

唱歌 体操 アソブ

十五才 氏名

ネムノキ

ソウシジュ

六・六 高橋視学 博物館エハガキ
小柳藤太郎 封書キイルニテ
寺本氏
十勝毎日新聞社長

- ・ 花蓮港朝なき渉る海のまにけさのりすてし常
磐丸見ゆ（八日朝同港上陸展望）
- ・ 八日
ポクポク社、坪井作太郎ツウバイ 玄関白カ
ベ向って右日本式ノ間 左トウツルバリノ室

・アスハアハマツリ

一頭目ガ アハヲカラネバ タレモカラヌ
ヤスンデヨイカ トノコト

・カポツク

・四三年支庁ニテ学校ヲマウケタルモ蕃人ノ土
匪ヤキウチアリテ今ハソノ趾ヲ残ス

・六月の雨にけふれる青の原くさはめる見ゆ水
牛かな（六・九）

＊新城で三男児下車す。一寸ことばをかけた
ばかりで車中と車外とで答礼していつた。
かはいらしい。

【短歌4：6月9日】

水牛のせなにゆられて雨の中ながれゆくよかう
もりの人（六・九）北埔ニテ

仏双げあざやかにさくかききはによりてながむ
る自働車の窓

水牛の雨にうたれてうれしけにをれり耳ふりく
さはめる見ゆ

〔銅〕
洞門さんさんをすぎて自働車おりておすこと二
回時間を空ヒス

すゝむしのこゑのゆかしさ新城の海と山との草
の中原（夜新城学校のほとりの鈴虫をきゝて）

＊タロク 果敢

【短歌5：6月10日～12日】

棚引ける雲の上にも家見えてタイヤル住める山
のけたかさ（十日新城より花蓮港への途中自
働車にて）

〔太〕
（馬駄鞍公学校より太巴塢公学校の間カニカゴ
にのりて）

カニカゴに身をはかゝれて雨の中アミの蕃社を
見れひとゆく

きいろにもさけるカンナのかなしげに雨にうた

れてくれゆく川へ

よつであみかけてはあれど主あらで雨のみほそ
しきゝ川の水

うつとりと夏の気分にひたりつゝはれたるのへ
を汽車にゆられゆく（十二日 玉里より台東
の車中、大原にて）

ブヌンらかきりひらきたる中腹の粟畑きはむ大
原の山

【短歌6：6月12日～14日】

首狩りて首を洗ひしきゝ川の川の上ゆく汽車の
みよかな（十二日）

もたれつゝ車窓ゆ山をながむれば蕃社の粟のみ
のりたるかも（十三日台東バラン間）

粟きばむ蕃社の山の山畑にコアチンふける家と
ころどころ

仏相花耳にさゝれて生蕃のかざりとなるもおも
しろき哉（鹿ノニテ乗車蕃女）

大原ときくたにひろき心地して打ち見るのべの
ふかみとりかな（大原）

たきかゝる山のながめのうるはしき志にこそに
つれくもわきのほる（大埔）

青山のみどりを白くけつりつゝ雲の嶺よりたき
たきりおつ

汽車汽船宿停車場のひまひまに筆とる旅の繁く
もあるかな（里らん）

台東やかかけの町の涼しさに雨さへけふる五月
雨のころ（＃）

流れおつる瀧のしぶきは見えねともくもきりふ
かき山の涼しさ（新武呂一この附近のバン人
ブヌンノ眼カスルドシ）

ハレワタル山のみとりの枝つゝき涼しき蟬を汽
車ながらきく（頭人埔）

むしあつきとんねる出でゝ枝つゝき蟬のこゑき
く汽車の窓かな（アヒル五六十羽むれおり本
島人の飼育かーあんきよの下にて）

こゑたてゝよへときこえぬさかえなり心の中に
名をよひて見む（頭人埔をすぎて）
諸共につゝかなかれといのりたる心は同じ北に
南に（安通）

玉里は相当に休憩時間あり。先しの下ラワンを
ながめ、十六台のセメントの上のテツキヤウを
わたりて着。こゝはあらまし下車。同車一名の
警部補も下車。新に二等、女二名、男児一名、
計三、自分とも四名になる。

うれしげに水にひたりて水牛のつのぬらしあり
門口の壕
すゝしけに川にひたりてくさ食める水牛見れば
夏としもなし（瑞穂）
花蓮港海への屋根の遠のきて吾が乗る舟は沖に
出にけり（十四日宮崎甲板上）
見送の友の姿を見送れば帽うちふるか遙かにも
見ゆ

〔短歌 7：6 月 14 日〕

千丈の山のきりぎし波ほゆる太平洋にそびえた
つ見ゆ
東洋に名をうたはるゝ切岸の下ゆく波に舟うち
ゆるゝ
すむ人もなしと思しき岸のかなたさびしく
鳥のとふ見ゆ
小さな島をはなれてのんびりと太平洋の波に
ゆらるゝ
家一つ人の一人も見えねども〔こ〕かの切岸に
路の〔かかれ〕ひらける（研海の断崖おや知
らずの比にもあらず）
見晴らしの稲田のみとりさゆらきて窓になけ入
る風のすゝしさ（礒溪）
支那の町支那の田舎をゆくとのみ思ひてありぬ
台湾のたび（外澳）

北南千里へたてゝかくはかりにしはらからのす
むかあやしき（亀山）キザン島
島山をつゝめるくもにほんのりと夕月さして海
の涼しき（たいけい）
家にある子等しのぼるゝ夕なり旅のうはさに吾
をまつらし（貢燎庄）（日くる）

*林田 クビガリ コゝマデ タイヤル蓄
林田ヨリ南八色クロキ

*大庄附近ニ クスノ純林アリ
鳳林のつゝがノ虫
コアチン（カベに用）

〔旅中メモ：表紙見返し〕

〔五〕
七、二九日

佐藤市長 公舎応接室

〔卑南〕
ピナン大溪ヲワタツテ
〔秀姑巒溪〕 〔花蓮〕
シウコランケイ（クワレン）

新武呂駅にて電線ヲミル 水牛ガカ、ル

社団法人函館慈恵院附属 大森尋常小学校

室に入いつて来てそうと私をたきしめて私の一
生大切なみさをやふりすてたのです
其れから私の心がいっぺん致してしまいましたた
夜になると其の心がをさへてをく事が出来なく
なるのですから前夜ここに來た男の入いるを待
つて居ります（〔五〕七、二九、朝 函館駅ベンジ
ョ）

5 〔台湾視察手帖 2〕(目録番号 I-i-B-4)

- ▶ 7.8cm×13.5cm×1.2cm、茶色表紙。万年筆、鉛筆書き。1927年6月13日から6月30日までの旅行記録および復命書執筆準備のメモ等。
「台湾視察手帖1」の記録によれば、この手帖は、6月6日に旅先で購入(【I-i-B-3】)。

〔見出し一覧〕

- 1 旅中メモ(表紙見返し)
- 2 旅中メモ8
- 3 旅中日記:6月13日～6月30日
- 4 短歌8:6月15日～28日
- 5 短歌9:6月29日～30日
- 6 発信記録:6月16日～25日
- 7 出納記録:6月15日～29日〔略〕
- 8 出納記録:6月29日～30日〔略〕
- 9 旅後メモ1
- 10 出納記録
- 11 復命書草稿
- 12 旅後メモ2
- 13 旅後メモ(表紙見返し)

〔旅中メモ(表紙見返し)〕

タイホク

タイワン サウトク フ ガ クムカ

ニ。ツシンシヨ、ウガ ク、カウチャウ、ツ
ツシミテ タイダ イ、チュウ ノ ゴ、カウ
グ、ウヲシンシ、ヤシ カクキ、ノ ゴ ケン
シ、ヨウライノ、ル

〔台北／台湾総督府学務課／日新小学校長 謹
みて 滞台中の御厚遇を深謝し各位の御健勝を
祈る〕

〔旅中メモ8〕

ローボ 口笛

トット(キセル)

ロツクスルモアン(衣服)

シクン(貝入衣服) ピントアン

ロツコス ラタン(式服ボタン)

台北 2.35 発

後 4.15 士林発

*忘れ 台中尋常高等小学校 帽子

台中塩田旅館 万年筆

*台中駅発見 万年筆遺失

角板山 傘 薫風 エンピツ テヌグヒ

〔旅中日記:6月13日～6月30日〕

昭和二年六月十三日 午前四時起床。腕車にて
ホテルを後にし駅につく。五時二十七分発、昨
日見し沿線更に親しむも面白い。二等室とはい
へ、本土方面の三等にも相当し且石炭粉の飛び
散るには閉口、速力もにぶく、いはゞ軽便鐵道
の感がある。同車の本島人男一人、初鹿尾で下
車。それから池上まで一人車中に眺望をほしい
まゝにする。池上から警部補が同車、玉里で下
車。初鹿尾は新武呂から蕃人防備の鉄線が汽車
中より見られる。初鹿尾の次駅稲葉の間、首洗
川を渉り稲葉鹿野間徒歩聯絡する。こゝまでは
山間の寂しき駅に人煙少ない。次駅大原から次
第に田園も人煙もはれやかになる。月野を過ぎ
里壠に來ると乗り降りがやゝ賑ふ。新武呂は鉄
線の入口で、例のブヌン高山蕃の頗る眼光人を
射る者がけふも汽車を見つめてゐた。新武呂か
ら投網をかける本島人を見受けた。〔新武呂〕溪
の鉄橋をこえて池上につく。この池周二十六丁、
大きな自然鯉がをる由。安通から先日カニカゴ

でゆられた大鉄橋を渉りて車窓に下ラワン蕃社を見て玉里につくと、璞石閣の番頭さんが居た。尋常高等、公学校を左右に見て北進する。玉里は昇降者もやゝ多く花蓮台東の間ではよい方だ。これから馬太鞍の駅の先で又候徒歩れんらくする。天候は急悪となつて雷鳴やら車軸の雨となつた。かくて雨中をゆられゆられ、午后四時半花蓮港下車、番頭に荷をあつて宿につく。夜に入るも雷雨やまず、物すごき好景であつた。昨日は久方ぶりの晴天、本日も午前中は可なりむしあつかつた。夜は降っても可なりのあつき。湯に入りてくつろげるまもなく門馬豊蔵君が訪ねてくれる。ビールをくむ。書状をしたゝかかいて出さうとしたが、十一時となつたからきりあげて就床。

六月十四日 晴 午前五時起床。理髪をして、朝食をとり、花蓮港庁に出頭、経過を報告する。十時出帆の第一常磐丸にて出帆。今朝庁にて門馬経 属に面会。なほ視学にも初面会。門馬君や学務の厚意で二個のデワスやエハガキを受けて記念とする。山道校長から見送りが出来ぬとて電話が来る。十時出帆、なぎいたつてよく、有名な世界の陰を双眼鏡にて眼前に眺望しつゝ、船は三時安着、蘇澳に上陸した。二等船客は余と七名であつた。四時十五分発台北行まで一時間余のいとまをぬすみて蘇澳の市街を見めぐる。晋安宮とか旧弊な建物に二人の工人が一心に金箔をおく処であつた。魚市場にうらるゝ太刀魚、サメ、小アハビ、たひ、いせゑびを見た。何も見るべき程のものはない。石造やれん瓦の陋屋内にすむ台湾人の生活は概して不潔に見えた。汽船中同行の二等客〔四〕七名に、更に数名乗合せて発車。沿線の風景人物にそゞろ支那味を味ひ、〔蘭陽〕溪をわたつて宜蘭に停車。こゝはやゝにぎはふ。次第に展望よく、亀山島の景趣格別のものあり。満月に近い。海上に虹を見る。

澳底のトンネルをすぎて、貢寮庄から日がくれた。〔九〕八時五十分基隆に下車、基隆旅館番頭に導かれて投宿。本日は雨なく、あつきかはり気もちよき海陸の行程であつた。車中には二ツのせんふうきをかけてあり、投入る稲田の風が涼しかつた。この中に支那味を味はふ自分はそゞろに家郷を忍ばるゝのであつた。水牛などは例によつてあちこちに首ばかり出して水浴をほしいまゝにしてゐるのも無理はない。船中では汽車とちがつてゆっくり絵葉書数枚がかけた。車中を通じ同乗の人に木瓜の馳走を受く。

六月十五日 前五時起床。遥かに札幌神社を遥拝する。一瀉千里的に十数通の公私文書をかきなぐつて、十時宿を出で、公園地に上る。途中支那人の公設市場を見る。いづれも濃厚な気分は彼等をかたるものだ。駅前待合で更に視察事項の整理をやつて発車をまつ。〈(前十一時五十分発)〉

二等室は余と他に一名、台北から乗車を加へて丁度八名。汽車沿線基隆から台北までは三度目にて格別のこともなし。台北より南進するに随つて家屋は台湾式で東部海岸よりも町なみもそろひ且脂がのつてゐるやうに見え、台北平野の水田の如きは実に見事な出来であつた。概して開発は東部に比すべくもなく、古き歴史を有するからであらう。しかし変化は東部の如くでなく単調に見えた。

午後五時二十九分追分でのかへ、五時四十分彰化で下車。直ちに彰化郡役所に出頭。案内を得て孔子廟、公園、八卦山、北白川宮殿下御遺跡記念碑を巡り拝し、公園わき小倉乙吉氏を訪ふ。氏は明治二十七年渡台、当時の血なまぐさき時がありて、以来苦心経営、今日料理店業を営み、且製氷株式会社の支配人として、市の公職者として、夫々尽瘁せられる立志伝中の一人だ。宏大なヒノキの香かんばしき奥の座敷にせ

んふうきをかけられた中に夕げの馳走を受け、且種々の物語を聞き、厚意によりて湯に入り、ゆつくりくつろげてやすむ。

今宵は陰暦十六夜の由。日本晴の空には満月かゝりて、三笠山の月ならねと、つくつく懐郷の情にたへない。すゝめらるゝまゝにかやに入りたるものゝねむりやられず。

六月十六日 晴 昨夜来とうとうねむらないでゐると、二時小倉氏の好意による腕車が来た。涼しい市中をゆられ月光をあびて駅に下車。約三十分ハガキなどを認めて、午前三時〔十八〕分で発車。これから六時までは夢の中にうとうと。嘉義で朝日ををかみ、神宮その他遥拝する。二、三例の駄作をする。東海岸とちがつて面白味はうすい。屏東直行を変更し、七時四十五分高雄に下車。州庁に出頭、教育課長、視学に面会して、短時間につき実地の視察を略し、駅前陳列場で蕃産品数種をあさつて、十一時五十五分発にて高雄を辞する。

沿線稲刈りをへて、その始末である。けさ嘉義では、第二期田植を見たのであつた。東洋一の鉄橋を渡り、まもなく屏東駅に着く。午前十一時十分駅前にサイダーをのみ、同三十分屏東郡役所に出頭。^{〔渡辺猛郎〕}視学に面会、管内の状況を承る。(午前十一時十分下車)昼食の御配慮を蒙りたるも、これを辞して、御案内をえて町内公園、神社、農事試験場、パイワン族石室内に生活(食事、寝状〔 〕)を見、次に公学校にて菅虎吉校長と面会、所感を承る。午後二時二十分発、屏東をのちにす。ホームには視学及菅校長見送りせらる。

高雄にて約一時間次の発車をまつ。この時間を以て、港湾の状を見学。駅前よりシヤシンエハガキをあさり、再び発車す。午後六時十分台南に着。腕車をかりて、州庁及市役所に出頭、予定時間前に着の旨を届く。然るに明日は施政記

念日にて公休日の由。よりて葬式の案内を受くる旨打合せて退出。七時半森氏宅に入る。二十三年ぶりの面会、何からの話をしてよいやら、たゞ感慨無量だ。湯に入り、くつろげて山海の馳走を受く。十時より夜の台南即裏台南の案内を受く。腕車でひかれて朝鮮、支那人の青樓を見る。内部まで二ヶ処を案内して室内現場まで示さる。更に池畔から夜店のにぎはひを示され、銀座通ともいふべき一流の本町レストラン楼上、風のふき通す処でカルピスの御馳走に預る。ゆつくりアイヌ地名を談じて下り、更に関羽廟の案内を受け、ビーフン店の表に立より、十二時帰着。湯に入りて就床、五人巡査事件の話をきゝてね入る。

六月十七日 晴 前六時めざめて湯に入る。昨夜は終夜むしあつかつたが、つかれてぐつすりねむる。朝、沢山の御馳走をされて、八時から腕車で市内の案内をされた。まづ、孔子廟、県社開山神社、台南神社、ゼランヂヤ城趾の順序であつた。台南神社では丁度始政記念日の神前祭式の最中だつた。森氏は一々これ等を背景にして余を撮影さるゝのであつた。たゞ台南神社^{〔堵〕}だけは各学校職員児童の略列参拜中で不可能だつた。かくて安平港行のため町内発着所より台車にのせらる。約一里余、気分よく風を受けつゝ南進する。終点でをりて、ゼーランヂヤ城趾の展望台に登りて、西南の海を見る。頭上にはホウボクねむく涼しく花ひらきて心地がよい。この城趾の一部は目下税関官舎になつて居る。森氏、砦の北より更に安仁へ天日の塩製造を案内せうとのこと。だがけふは時間が許さないので辞したので、では海岸をおりてかへらうかと水にそふて来ると、あるはあるわ、非常な埧だ。皆その判をおなじくする。その説明をきく。十時四十五分再び台車の人となつて、零時二十分頃帰着。かへりに媽祖に案内された。

森氏宅にもどつて、湯に入り、ウナギドンブリの馳走を受け、田中〔郁〕視学宅を訪ひ、州庁、市役所に出頭、夫々あいさつをなし、午後二時四十五分台南発、列車の人となる。森要人氏見送らる。

途中、バナナの林、水牛の泥あみ、第二期水田の早苗、水牛の草食めるせなにとまれるオウチウ、肩かごの去来を見て、彰化に着したときは日くれた。こゝで十数分休憩、更に午後八時半、台中に下車。駅前駐在所のとりもちで、塩田旅館に投宿。湯に入り、午後十時就床。

六月十八日 午前六時起床。七時退出、市役所及州庁を訪ふ。星〔万寿雄〕市視学の案内にて、台中公学校、台中〔第一〕尋常高等小学校を訪ふ。公学校二十六学級一千六百名、授業を一覧、緊張気分を欠く。第一校は自学自習の研究に実施、よく活動せり。一年の算術及読方はかなりの出来ばえ、スゴクノサイノゴトキものにて自発的計算おもしろい。歴史、理科、国語の自習また見るべしだ。講堂はふるい。公学校のは三万円をかけたコンクリート。併置校は一万坪の校地を有する。行啓記念台ものこつてゐる。こゝを出てバナナ市場を見る。次に市経営のバナナ市場を見る。年額 1200 万円、内地の価格□額を算する。高橋〔寛〕氏の説明によつて大要を知り、印刷物エハガキを贈らる。次に行啓記念館（公休日）を特に見せてもらひ、市場を二つのぞきて、州庁及市役所に出頭。州視学（信夫郡出身）及市課長遠藤氏と面談、所感を述べ、正午駅に來り、午後一時三十八分発新竹行列車をまつ。

定刻発。潭子駅に停車すれば、草花にて地上に駅名や東西南北の文字をあらはせる、目をひく。且構内立樹をかりこみて、花がめ、イス、トンネル、屋根などの形にせる、おもしろし。豊原駅にて下車すれば、驟雨沛然として旅客をおど

ろかした。次駅では晴れた。午後四時三十分新竹下車。直ちに駅前塚廻屋に投宿。湯に入り、〔新竹第一〕公学校長村木末一氏（伊勢）宅をとひ、あいさつし、約一時間にして退出。十時就床する。同氏は、視学不在につき出迎案内を托されたる由。

六月十九日 日曜 曇 前五時起床。七時新竹公学校にゆく。校長の案内にて大成殿教場を見る。八時十九分発桃園に向ふ。沿道、黒布もてかぶれる笠の上をほゝかむりせる婦人のさとうきび畑におりたてるを見る。二等室も新竹にて二十名内、多くは楊梅で乗降りする。うちすごして桃園に十時下車。駅出迎の桃園郡視学木村凡夫氏の案内にて、即時大溪行自働車に乗る。沿道心地よき眺望也。更に十一時半大溪に自働車をのりすつれば、郡庶務課長外属四名の出迎あり。即時台車に乗る。スキーの如き滑走を試みつゝ山を登ること約六里。夕立沛然として車軸を流したが、四時半角板山薫風館に入る。一憩ののち、巡查駐在所を訪ひ、案内を得て蕃童教育所にゆく。数名の先着客がある。外国人も一名見えてた。

日曜にかゝはらず寄宿生四十名を集め、算術、読方、話方、唱歌と、順次指揮の下にやつた。ちゃんと献立が出来てをるのだ。即席の書方をおくられた。

一条のあいさつとして所感をのべた。

主任巡查の案内で家庭を見る。清浄されてとても気分がよかつた。物品交易所にて教育参考品を物色して、六時帰宿する。夜は当薫風館の記念揮毫画帖を一覧、亘理〔章三郎〕教授や氏家守廉君のなどが見えた。〔書〕エハガキなどをしたゞめて、十時半就床。

〔六月二十日〕 午前五時起床。海拔二千百尺の浩然の気をすひ、巡查駐在所に挨拶をなし、午前六時台車の人となる。朝の気を吸ひつゝ、

山又山の斜面に茶摘人々を見つゝゆられゆくに書房あり。師見えず、席に収まれる児童の口々にのゝしれるのみ。進んで牛角南山 秩父宮殿下御休憩所よりは殆滑走スキーの如く快速力を以て一瀉千里、〔九〕八時四十五分大溪に着。郡役所に出頭、あいさつをなして、九時自動車にのり、十時桃園に着、十一時半台北に下車。すぐに本町で理髪し、蕃産品を求め物産陳列所を訪ふ。然るに公休日で閉館、特別を以て即売品をうつてもらふ。それから午后貳時三十五分台北発にて芝山巖を訪ふ。士林で下車、二時四十五分、それより腕車にて訪問、楼上に上りて暫時休憩。六氏殉難当時のことゞもをきゝ、まもなく駅にひきかへす。約三十分休憩。五時半台北に帰着。総督府に出頭の後、高岡〔義雄〕属及野口〔敏治〕課長をその官舎に訪ひ、謝辞を述ぶ。かくて摂津旅館に帰館。夕食をしたゝめ、八時退館。市内より土産品をあさり、十時納涼展覧会場を一覧し、十時停車場に入る。約三十分ののち発車。十一時暗中基隆旅館に入る。むさくるしさ、いはん方なし。疲労を医すべく、直ちに就床。

〔ママ〕本道旅行中カヤのなかりしは、この旅館のみなり。座布団もなければ机もなにもなし。それで昨夜の夜食もやらずに五円とはあきれた始末。六月二十一日 午前五時起床。市内の観覧をなし、且竹下属へ書状を投し、土産品をあさり、九時瑞穂丸船中の人となる。木原校長同船す。夏期休業にて帰省の途にありと。吉野丸は明後出帆の由、同岸壁に在り。瑞穂も相当の船なから、自分の座席が四囲取込み、□きうくつを感じた。これも三等のおかげ。

そらくもれり。舟の動揺相当に甚しい。乗合隣なにくれと話し合つた。高雄からの一人、七月号キングを示さる。中に、「小学校のころから政治に興味を持ち、二十七歳にして県会議員とな

り、九回も代議士に当選し、風采堂々雄弁滔々たる上埜安太郎氏云々」。又、守屋東氏の写真銅版が載せてあつた。

室内のあつくらしいのに閉口。汗だくだく。それで相当につかれてゐるためにねむることはねむつた。

テイが夢にあらはれて、たゞ簡単に少々手金をもらつて別居すると憤慨の体が見えた。

案するに、不在中さぞ万事に懊殺されて憔悴せるかと思はれる。

六月二十二日 午前四時ねざめたが、大もやで海上は弁ずることが出来ぬ。乗合の高雄州警部と談ず。船のゆるゝこと至つて甚しく、人々酔ふもの多し。終日島かげを見ず、うちふしがちなり。午後より雨、動揺甚しく、船員もゑふ。

六月二十三日 半晴 前六時起床。七時五島沖にさしかゝる。朝心地格別よし。十一時半六連島に達す。検査官こゝにて乗船、停船せずに検査あり。同乗井上氏とわかれ、木原徳治郎氏とわかれ、大串〔孫作〕警部と同行、門司に上陸は一時十分。それより約三十五分をまちて、一時四十五分長崎行のに乗車。大串氏は佐賀にゆくのであつたが、どこにのつたかわからなかつた。この時、朝来の曇天が雨天になつた。乗合せた二人の女が余の間に種々答へる。又、余の台湾談、北海道談をめづらしげにくりかへしてきく。向つて右が海、左は山や農村の変化多き田園をなかめつゝ、台湾とはちがふがけふやつと田植だつた。近來降雨がなくてこまつてゐるのだと。苗はのびてゐる。桑畑もよいあんばいに若葉がのびてゐた。^{〔折尾〕}をりをより南方の民家に、かややの上に鯉木形のわらたばが三又は五とおかれるのを見て、アイヌ式を発見して、殊更におもしろく感じた。家々のキョウチクトウの赤き花実はタイワンソツクリだ。水牛を見ないが、どこの田にも黄牛黒牛をしてすかせてゐるので

あつた。雨は強くよわく窓をうつた。あまりおいしくないキンチヨウの二、三房をくつて、台湾のにくらべる。二日市行往復の切符はもとめたものゝ、午後四時四十何分か博多着で下車することにした。

電車ですぐ宮崎八幡宮へ参拝する。雨は先日の台湾神社への参詣当日そつくりの大ふりだ。敵国降伏の御額、応神天皇の御襲衣、埋蔵の上の松などに昔をしのびて退出。雨中を今川橋まで電車で見物。おほりの蓮にふりにし昔をおもひ、更に駅へひきあげ、これから二日市へと見れば七時十五分、つひ三分に発車後だ。八時十分でなければ発車せぬ。自分は可なりぬれてもをる。九時過に二日市につくのなら、いつそあすいつて、少しでも今夜土産などあさるがよいと考へて、とうとう駅前の一等旅館と見てとつた朝日旅館にとびこむ。湯をあみ、夕めしの箸をすて、買物に出かけ、人形、ホテイ、相生などを求めた。それから蕃産株式会社までいつて電車で帰館。午後十時就床。

六月二十四日 晴 一等旅館二階一番室に収まつて頻々たる電車のきしる音を耳にしつゝ、つかれて夢に入る。かくて今朝六時まで前後を知らぬのであつた。

午前七時〔三十二〕分宿を辞し、汽車に飛びのり、八時下車、直ちに軌道に投ず。

車中、榎寺、天拝山、都府楼のあとを指呼しつゝ、まもなく下車。第一鳥居よりすゝむに悲壮なる公の昔をおもひて涙心よりこみあげて止まず。太鼓橋を渡りて神前にぬかづく。皎々たる大神鏡いと神々し。宝物殿に公の御筆蹟を拝す。出で、後園の梅林の間をぬひて菅公歴史館を見る。更に記念の撮影をなして、神境を辞す。徒歩観世音寺に公の御胸をいためし鐘楼のかねを見、都府楼跡に詳しく説明をきゝて瓦の昔をしのび、榎寺に公の薨去の御座所を拝し、滯泣去るにし

のびす。僅かに出て、正午四十五分前駅につく。午後零時四十三分発上り門司行の汽車をまつべく、駅前にて親子井をしたゝむ。

車中、天拝山、榎寺、観世昔寺、都府楼あとを心ゆくまでながめてまもなく博多駅につく。直ちに電車にて県庁に出頭。阿部幸六氏に面し、且社会課真鍋博愛氏に県下防貧施設等につきて意見を求む。多忙の中にて短時間にて退出、阿部氏の案内にて物産陳列場を一見し、わかれての余は中州町玉屋商店にて買物し、六階上の展望をなし、これにて博多の見学をうちきり駅に向ふ。

午後六時二十分特急門司行に乗る。

同八時門司下車。昨日托したる手荷物を在否タツネルニ、下ノ関中谷旅館ニアリト判、発船ヲマツ。九時十分発帆ス。

九時半〔中〕丸谷旅館の案内で丸谷支店に入る。数個の荷の整理分類で外出もせず。

六月二十六日 昨夜は、隣室の客、女中を手ごめにする段取で非常な喧噪を極めた為によくねむれず、今晚一時をきいてねる。六時めざめる。朝めしの箸をすてゝ、自動車で市内の案内を受けて源平の古戦場をさぐり、八時四十分発車急行にのる。沿道、瀬戸の風光絵を見る如く、田植盛なり。午後一時頃巖島を対岸に見て打ちすぐ。半曇にてむしあつし。姫路より日くれたり。午後十時よりねむりに入る。

六月二十七日 午前四時過、静岡に停車中にめざめた。この地方も目にとまるは田植だが、中国筋よりおくて、まだうゑぬ処も多い。

朝窓に富士の雄姿をまのあたりに見つゝも、やかて十時十分東京駅に下車した。荷の心配で、品川へ電車でゆき、要不要をえりわけ、不要を皆鉄道小荷物便に托送する。

かくて上野まで電車でもどつたのは午後五時半。本日は下車。宮城を拝した外は別に見物もせず。

只人波の山の不愉快さ、いはん方なしだ。女のおめかしやはいから男の山波がザラにある。これが復興東京かといやになる。

正午東京駅構内にて道庁に打電する。

午後五時より上野公園に上りて大東京のてんぼう、寛永寺にまうでる。池畔をめぐりて中島弁天堂にまうで、それより夜の店をみて、松坂店五階上よりてんぼう、買物をなし、九時上野広小路より電車にて人形町下車、それより徒歩、両国橋を渡り、更に八九丁をすぎて物くらき十時本所納骨堂に参詣、涙をたむけ、電車にて(柳島行)外手町のりかへ再び上野広小路に下車、公園西郷銅像前より夜の東京てんぼう、電灯エルミネーションきらびやかに、中にも尤も眼をひくは(仁丹のハミガキ、懷中等)松坂呉服店、ユニオンビール、ブルトーズ等である。涼風夜の東京のほひをふきしえならぬおもむきあり。たゞ吾一人の眺望をうらむのみ。静かに上野停車場に下らんとしてふりかへれば、西郷翁銅像黙してけしからんといはむおももちなるもゆかしや。

十一時二十分発車、涼しき暗をぬひて汽車の走るにゆられる。中々ねむれぬ。さうする中に翌暁となる。

六月二十八日 曇 午前二時二十二分下車、宇都宮停車場通りを一直線に見物する。三時頃、国幣中社二荒山神社に参拝し、四時鶏をきいて駅にもどる。まもなく午前六時十分の日光行に乗る。修学旅行の児童五十四名男女教員に引率されて同車。七時二十二分下車、直ちに乗合自動車に乗る。〔参道〕神橋まで約十分。大谷川の清流石にせかるゝところ、まことにこれ一幅の画幅だ。

*宇都宮地方ハ日光の影響か トタン屋根が多い。それからかや葺でも屋根にカツラギ

形のものを発見しない。

*マサヤ、カハラ、ワラの屋根が入りマジリ
テキル

婦人頭のゆひ方も相馬地方にちかい

参道より杉の並木の間をぬうて、順次奥の宮まで参拝し、十時十五分神橋から腕車で約二十分、日光駅前に下車。

十一時十五分宇都宮行発車をまつ。〈やがて宇都宮につく。のりつぎて〉定刻発車。窓外の風物たゞ何となく郷里相馬地方に似たる心地す。のり合せの人々の言葉つかひも、那須野あたりより東奥の発音を發揮す。白河はた色たゞよふ楽翁公の御城下。まもなくして〈四時十三分〉郡山に下車。こゝにて理髪店に入りひげをそり、六時急行をまつ。急行にのりて福島をすぐる程に日くれた。取こみにてむしあつく、座席なくてねむれず、苦痛す。

二十八日 つかれねむりにめざめたのは尻内、四時二十分だ。まもなく浅虫の奇景に来る。海上晴れて心地よし。太平洋の光景に心服をあらふ。此に午前〔六〕時青森に着車。これより約五十分、れんらく船翔鳳丸をまつ。〔待合に昼食を喫して〕静かに船室に投ず。和よく、汽車中よりも動揺なく、茶をすゝり手記をものするにいさゝかの支障なし。午前十一時十分着船、午後一時四十分発急行の下りをまつ。昼食ををへて、発車。途中、心ゆくまで羊蹄山をうちながめ、小沼をすぎて夜に入る。小樽ノ夜ノイルミネーションをのぞみ、九時四十二分札幌下車。一路、一等旅館山形屋に投宿した。湯にも入らず、つかれた足をきぬの布団に投じて、十一時就床。

六月二十九日 〈晴〉 前六時起床。八時参庁、学務部に若木視学、小柳属、門崎属、西田囑託等を訪ひ、旅行帰任あいさつをなす。編纂室に

主任竹内氏を訪ふ。十一時半一先退出。午後一三十分時再び同氏を訪ひ、八田博士を訪ふ。植物園には御不在、大学に御出勤に付欠礼。園内を漫步し、陳列館を一覧す。二時半編纂室にもどり、道庁を辞す。直ちに電車にて行啓通りに白雲山莊主品川義介氏を訪ひ、それより中島公園地をぬひて、電車にて四丁目に出で下車。㊦五階上に展望、ミヤゲをしたゞめ、京屋にて更に夕食をしたゞめた。

午後九時四十二分の急行にて発車、立錫の地なく終夜いねず。

三十日 新得でうすあかりくなる。午前六時帯広駅下車。本日研究会囑託として栗山周一氏の来帯を出迎へられた金校長に御厄介になり、腕車に荷を全部入れて一足先にはこばせ、町役場、金校長、支庁に出頭して、午前八時頃帰校す。

〔短歌 8 : 6 月 15 日～28 日〕

- 赤煉瓦たゞみし家屋竹藪の緑さゆらき白鷺のとぶ（樹林）六月十五日
- つやゝかにみのりよろしき台東の平野の稲に青き風ふく（桃園）
- 赤瓦くたきし如き赤土の上に緑の茶の畑哉（新竹）
- 双思樹の繁れる山のこゝかしこアチンふける家まばらなり（竹南にいたるトンネルのあたり）
- 相思樹の並木のゆらきさやへと窓にふき入る風の涼しさ（大山脚より後龍）
- 波あらき東支那海西に見てつまさきのぼり吾が汽車のゆく（大山脚より後龍間）
- 荒波の〔以下空白〕
- 新高の山か見ゆるとつまたちぬ汽車のまといり外をなかめて（十六日嘉義にて）
- 雲つゝむ五百重の山のいたゞきをひくゝも見つる吾かまなこかな（〃）
- 朝日かけ上るを見ればあかへと嘉義の回帰の線そめてけり
- 朝畑におりたつ人もねむげなりおとろかしゆく汽車をながめて〔童〕
- はらはへの草をはませてゆるやかにむちふるいをり水牛のあと（新營）
- かり入れしあとに早くも苗うゑて今年再び実りまつなり
- 水牛の草はむせなに鳥驚のとまれるさまのおもしろき哉（六月十七日新營後壁間）
- 黄牛のくさはむせなにとまりたる小さき鳥の名は知らねとも
- 物干の庭のかけ竿一の字にかけを投げこむ日の当りかな（斗六）
- 竹藪のむれ立つ村をゆく汽車にかくれて見えて白鷺のとふ（林田）
- 立ちつゝくバナナの林一ふさもほしとなかめて我が汽車のゆく（二水）
- 幾度か吾か目にふれし花なれと忘れてきゝぬいかだかつらを（田中）
- ゆられつゝけふもつれへ日はくれぬ汽車の中にて思ふふるさと（花壇）
- 夜となれば月にあかりさえわたる女のかほのうつくしきかな（大方皆下車して花壇えきにては若き女四人と外国の女一人と余と五名なり）
- 大安溪渡りつくしてトンネルを六つすきくれば十六份駅（六月十八日）
- 南勢から苗栗に来るに苗栗の附近のカハラヤネの家造はまるで越後ノ国イトイ川附近近のそれとそつくりだのにおどろいた。しかし他は台湾をあるくきぶんはしない。台湾人の田園ひらけて気分がよい。内地の農村を汽車でゆくやうなきぶんだ。しかも二三の婦女は黒きコンチのやうなものをかぶつてゐた。

- 白雲のかけにありともしらざりき晴れたる空
に新高の山（苗栗）
- 桃園のみどり茶畑の畔道みればれんくわにに
たりあか土のいろ
- 双思樹の花盛なる山畑に女あまたか茶をつみ
てあり（楊梅より中壢）
- 台中の夜はあけたれと心にはくもりのはれぬ
ゆめのあとかな（＂）
（これはあさ心にかゝる「家の」テイのうらめ
るさまをゆめに見て）
- 台湾の人も中々見れゆとぬ山の蕃社もきは
めける哉
- 自働車の走る田舎の並木道並木盛の花の双
子樹（桃園大溪間）
- 茶畑に茶つむを見つゝ双思樹の花の下ゆく自
働車の道哉
- 沿道の緑並木と涼風と送り迎ふる我か台車哉
- 大溪の見晴しよろし吾ひとり甲板山にゆら
るゝ台車
- 水牛の水にひたるをうち見れば心地よげなり
涼しく見えて
- 幾うねりのほり下りて我台車角板山にいそき
いそくも
- せみのねは涼しく風にふき入りて台車の中に
むるけもよほす
- 名もしらぬ花の数々さきほこるつゝら山道吾
台車ゆく
- 台車おす二人の人夫何やらんかたれと知らず
吾黙しきく
- 紅なせる山の斜面の土色に色とりすゝし葉々
のみとりは
- 秩父宮殿下の休憩地にて拝礼。人夫二人が不
敬。
- 狩勝の峠を下る心地して吾が乗る台車風の如
しも

- 人すまぬ境とおもひし奥山に茶畑盛て家とみ
て在り
- 名も知らぬ花のみあまたさきほこる山の下道
吾黙しゆく



- 巡査派出所をすぎて夕立沛然として至る
大溪郡蕃地水流東七番戸 葉阿寛
店頭でしばらくやすむ。タイヤルの女がキセ
ルくはいて子をおへるものその他拾数名店頭
にある。雷鳴もひどい。
- きゝなれぬせみのこゑこそきこえたれ角板山
の雨の山越
- 奥山にうたふ鶏こゑきけば故里人にあふ心地
する
- ねさめても昔のゆめを忘るなよ血にそみきて
ふ枕頭の山（薫風館にて）
- 枕頭の山に對ひてねさむれば薫風館のあさ心
地よさ（六・二〇）
（八徳書房に見る）
- 台車にて甲板山を下りゆく谷の朝風すそふき
はらふ
牛角南山より□下で滑走、一瀉千里
- 芝山巖にまうでゝ
身ですてゝ国にいさををのこしてしてみたまう
れしとあまかけるらむ

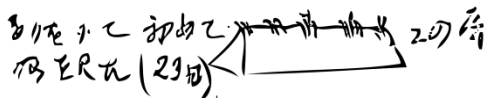
＊アリ山ヒノキ（バンキヤウ）ボン

公医 ^{〔宇都木〕} 宇月一郎 医専出身
妹 ユキ 看護婦 産婆
公医 ^{〔渡井〕} 渡合三郎 ガウガン

- 八十あまり見知らね花を「数へ」なかめ見つ
台湾島の六月の旅
- 十勝野のリリーも今かちりぬらし台湾島の花
を見しに（六月二十一日瑞穂丸にて）
- やよ鯨汐ふきて見よ玄海の灘うちすぐる吾を
知らずや（二十三日瑞穂丸甲板上にて）

をりをにて初めてこの屋根を見た（23日）

〔スケッチ〕



- 幾春か空しき風にさらされてひばりなくへ
〔都府楼〕
とふろうのあと（二十四日）
- 一本のこたかき松をめじるしに天拝山をそこ
とをろかむ
- 菅公のみむねいためしかねのねの観世音寺に
ひびくつめたさ
- 二日市汽車の窓よりをろかめは天拝山の松の
こだかさ
- 松かげの小くらき中にのこりけり千年かなし
きものがたりあと（榎寺）
- とふろふのあとにのこれるいしずゑをなてゝ
そしのふ古のこと
- 広前にぬかつく吾はうれしさに涙ばかりを手
向けゝるかな
- 瓦ふきかやぶき見えて白かへのくもり木の間
に見えがくれす（二十六日ハニフ）
〔羽生〕
- ゆけどへ田植盛の野へ山へうち見てすくる
汽車の窓哉
- あまりにも□□しき顔のもちぬしをみまもり
をれはよはふけにけり
- 巖島汽車の窓より伏し拝しかへりを急くこの
旅路かな（午後一時頃）
- とんねるのくらきをぬけて遥々と広げき海の

つゝくうれしさ（糸崎をすきて）

- 朝空に富士のみゆきを仰きつゝすゝしき野辺
を吾汽車のゆく（六〇二六日静岡をはなれて
北行中、富士を仰きつゝ）
- さきほこる花もうらるゝ身なりとはしらであ
るこそあはれなりけれ（松坂屋五階楼上）
- ゆたかなる利根の懐にかゝよひて涼しさあか
ぬエルミネーション（両国橋上にて九時半）
東京駅を発車して
- 歓楽の都をすてゝ吾か汽車は涼しき清き野路
山路ゆく
- 月なきをうらむべしやは電気灯昼をあざむく
夜のちまたは
- かはづなくこゑもわらびの里にしてきけはこ
ゑしきふるさとのこと（停車中）
- 妻も子もいかにまつらむたまさかにいてゝひ
さしき旅のかへりを
- うつしゑにめなれてありし台湾もうつゝに見
れはめづらしきかな（以上二十六日）
- 真夜中の汽車の停車に停車場の小荷物係さも
ねむけなり（二十七日午前二時二十二分宇都
宮駅下車）

*ヒフクヨリ外手町ノリカヘスグ上野広小路
下車ス

- 真夜中の汽車を離れて宇都の宮宿にもつかけ
夜をあかしけり
- はなやかに軒電「気」灯のかゝよひていねた
る町の静なるかな
- 真夜中の町の静けさひき破る車の音のかしま
しき哉
- ひさこのみひさく店あり電灯の下につまれし
だるまの山哉
- 丑満の草木もねむる真夜中を二荒の神にひと
りまうつる

- 広前にぬかつきをへて二荒山見おろす夜半の
宇都の宮哉
- ほえしきる犬の遠吠まよ中の電灯と共にもの
すき哉
- あらたなる神のみまへにぬかつけばいのらぬ
さきに身はきよきかな
- 心からきよめ人の口そゝき手洗ふとても神は
うけしな
- うら町のうすら電灯ねむけにもふけたる軒に
もやの流るゝ
- ふくろふのこゑさへ遠にきこえつゝ〔夜は〕
もやに夜ふかきうつのみやまち
- 電灯に歌をかゝむと立寄れば軒のつばめのお
どろきてなく
- まよ中〔を〕にそゝろありけば足〔をにき〕
をとをとがめてほゆる犬のかはゆさ
- 手にさせる傘にぼつ／＼音のして雨の夜道と
なりにけるかな

＊をかもとの次駅にて下車の十六七才の女子、
眉目どう見てもアイヌの混血児の特徴を示
してゐる。面貌も頭髮もさうだ。(6.28)

＊下野国河内郡宇都宮市

- うらおもて通りくらへて町なみのよさもあし
さも知らるゝ世の中
- のきにのみ星を見る夜の宇都の宮月なき空は
雨となりにけり
- 真夜中のやみを破りて汽笛のみこゑのさえた
る停車場のまち
- 雨の間にあくるともなくしらみゆくこのみち
かよのいたましき哉
- まよ中のすゝしきちまたありきつゝそゝろ歌
のみよみあかしける
- しらみぬと道ゆく女いそくなり吾かこそいね

ずあかしけらしも

- 旅の雨にくき心地もせさりけりあせさへあら
ふ夜の涼しさ
- あけなから電灯しらみ／＼つゝ朝になりゆく
宇都宮町
- あけぬれはそゝろにねむさ催してそゝろあり
きしよへのにくさよ
〔二荒山〕
- ふたらやま夜の宮居にぬかつきてかへる心の
すか／＼しさよ
- ねもやらてゆふへの風のふきかよふまに朝
まつ宿もありけり
(以上一時間二十六首三時より四時まで市内散
策中)
- 朝寒の肌におほえて北の国次第に近くなりも
ゆく哉
- 杉並木ひるもを暗き参道の神々しさを何にた
とへむ〔いまいち〕
〔今市〕
- ふるさとのなまりに似たる人あまたのりあは
せたるなつかしきかな(〃)
- ゐなかにもとたんからすの家見えてむかしに
かはる里居なりけり
- つゝじさく杉の小山の六月はうたによき処ゑ
によきところ
- 神杉の並木のかげの涼しさに夏なき里とおも
ひけるかな(かへりを参道にて汽車の中)
- 水車めくれる里ののとけさよけふれる雨のさ
みたれのころ
- 参道は杉の並木にはさまれてまうつる人の見
えかくれする
- 松かけに草をまくらにひるねせり田草とりた
るひるの休みを(矢板)
- はりつめし旅の心のゆるみてや〔津軽〕ふる
さと近くかせひきにけり(二十八日ホウセウ
丸船上)
〔翔風〕
- さら／＼ととんねるぬけてわか汽車は大海原

の岸うねりゆく

- ふきの葉のひろこる山のやふかけに汽車なからきくうくひすのこゑ〔黒松内〕（くろまつないをすぎて）
- 白雪の残れる山の頂はうら涼しくも見ゆる六月〔蘭越〕（らんこし）駅より山々を見て
- 白樺の森のこみとりくれそめてこかけに馬の草はめる見ゆ（蘭越をへて）
- まとちかく見えてうれしき蝦夷富士のすめくりゆく汽車にのりつゝ（こんぶよりゑそふしをのぞみていとよくはれたり）
- 山川にせかるゝ波のすゝしきを見つゝあふけは蝦夷富士の立つ
- 青葉かけ見えかくれつゝ汽車のまとそらに涼しき蝦夷富士のゆき
- 本字とるさへしく□□るのあるものを上りいそきたる吾か□□しこれ

〔短歌9：6月29日～30日〕

- 待ちつらん妻子の心おもふ時汽車より早く心走るも
- 海山の千里の旅も君が代のたまものなればやすくしありけり
- 家にまつ妻子もともによろこひて恙なかりし旅祝ふらし
- 君が代のたまものなれや数ならぬ吾か身の旅のつゝかなかりき
- えそふしのやさしきすかたはれやかに心おきなく「けふはなかめつ」なかめつる日よ（狩太）
- をれめくる汽車の窓よりすかたさへいくかはりする蝦夷富士乙女
- 山川に釣する人もしばらくは「なかめ」竿すてゝ見る蝦夷富士乙女

こんもりとふもとをつゝむ〔以下空白〕

- あこかれし蝦夷富士乙女汽車なから心おきなくなかめけるかな
- ゆきの肌すゝしくぬきて六月の空に立ちたり蝦夷富士乙女
- とんねるの長きを暗きくゝりぬけていつこと仰く蝦夷富士の山
- 五年の旅の昔のおもかけにおもかはりせぬ羊蹄の山
- 渚へのにふくみ山の「うし」はふやらむほりて立てる「すがた」心ならねば
- いたとりのはびこる山の六月に春を忘れぬうくひすのこゑ（クチヤン）
- しばらくは肩のこりさへ忘れしをこの旅をへはいかにあるへき
- おどろきの目をば見ばりてゐなか入都のちまたなかめ入りたる（二十九日札幌にて）
- にはかにもかたのいたみをおほゆるは心ゆるみししるしあるらし
恙なく吾か旅をへてかへりつときは妻子もよろこひぬへし
- 真夜中の汽車の中皆しつまりていびきのこゑのかすかきこゆる（三十日午前二時）
- ねしづまる汽車のまよ中「皆」われひとりさめゐてあるもさひしかりけり
- 朝日かけ立ちのほりたる平原のみとりの上に雲の白くはふ
- かりかちの峠をこゆる汽車のわさ人のわさともおもほへなくに
- 旅の幸ゆたかなりけるたまものを神にむかひてたゝへまつらむ
- 恙なくかへり来つれと家ぬちにかはりなきかと胸のとゝろく
- 三十日あまり五日見ぬまに草ものひ畑の青物のひにけるかな

○ 近づけは吾が舎ののきのいかにそと心そなた
にまつとひにける

〔出納記録：6月15日～29日〕 〔略〕

〔出納記録：6月29日～30日〕 〔略〕

〔発信記録：6月16日～25日〕

16 彰化駅 中川孫次郎 神居沼エハガキ
" 秋元貞陸 "

" 縄田円次 "

高雄駅 小倉乙吉 封書

安田直章氏 高雄港 "

摂津旅館 屏東駅ヨリフツウハガキ

河西支庁第一課辱知 高雄州庁ハガキ

互助組合幹部 高雄市街

山本儀三郎 タカラゲキ場

白井柳治郎 高ヲガンペキ

大橋渉 高ヲ貴賓館正門

那須支庁長 高雄第一小学校

河野常吉 日本唯一の泥大山

竹内運平氏一同 砲台アト（台南）

橘右 高雄郵便局（台南）

17 岡田熊太郎（アリ山神社エハガキ）
新竹ヨリ

土門玄吾（台中製糖工場） "

庄島鹿六（新高山の遠望） "

〔19 森要人 角板山貴ヒンクワン 角板山にて〕

18 上埜安太郎（阿里山二万平眺望） 新竹

18 星教村（台中樓橋より停車場ヲノゾム） "

18 木幡富常（台中市宝町通り）

18 木幡小多郎（台中分屯六隊）

19 畑中ミズホ（台車 角板山行）

19 森要人 角板山ニテ貴賓館
清田惇 〔角〕
甲板山脚下の溪流

19 三島校長（角板山蕃童教育所エハガキ）
角板山

20 木村凡夫（芝山巖エハガキ）

門馬豊蔵 キイルンヨリ

児童成績エハガキ

湊増吉 校舎校長エハガキ

緒方足躬 児童成績エハガキ

和田博 校舎校長エハガキ

中田秀造 児童成績エハガキ

中本勇昇 婦人会エハガキ

門馬経祐 校舎校長エハガキ

薫風館宛 フツウハガキ

23 教育課 無線電信 2回

24^日 博多駅にて 安部幸六 蕃人ノ田植の景

ハブン社蕃人 真鍋博愛

エハガキ " 伊藤兆司

25 電報 道庁 □□信 40
（通信 132）

〔旅後メモ〕

〔台湾産業概況 略〕

視察概要報告

一 日程 五月二十七日発 六月三十日着
五週間（日数予定通り）

二 順路 帯広－青森－秋田－山形－富山－金
沢－神戸－レンラクセン－基隆－台北－
〔北投〕－台北－東海岸－更ニ台北ニモド
リ屏東マデ直行－屏東ヨリキイルン－レン
ラクセン－門司着－（太宰府）－門司－山
陽線神戸－名古屋－東京－福島－仙台－盛
岡－函館－根室線

三 路程 約四千哩

汽車

汽船

電車

自働車

台車

カニカゴ

腕車

四 宿泊ソノ他

旅館 二十〔九〕泊（旅館 17、知己）

汽車中 8 泊

汽船中 6〔7〕泊

五 便宜

道庁、支庁関係各位ノ賜

総督府野口教育課長並ニ関係各位

州庁下各関係各位ノ賜

六 視察箇所

台湾

学校	小学校	内地人	六	25
	〔公学校〕	台湾人	八	
	教育所	蕃人	一七	
	補習	蕃人	一	
	中学校	女学校	二	
		中学校	一	

官庁	総督府	一	15
	州庁	四	
	庁	二	
	郡役所	二	
	支庁	二	
	市役所	三	
	役場	一	

その他	農事試験場	二	30 〔27〕
	専売局	一	
	測候所	一	
	博物館	一	
	神社	四	
	公園	〔四〕 五	
	市場	五	
	動物園	一	
	陳列所	二	
	遺跡	五	
	〔廟	三〕	

蕃社	部落	九	13
	交易所	一	
	精米所	一	
	頭目	二	

六ノ二

副産物の視察関係（徒歩下車地）

札幌、函館、神戸、博多、太宰府、赤間関、

東京、宇都宮、日光

以上九ヶ処見学

官衙	道庁	一	九
	府庁	二	
	市役所	二	
	博物館	一	
	陳列館	二	
	図書館	一	
学校		二	32
神社		七	
遺跡		一一	
御陵		一	
植物園		一	

見学総計 111ヶ処

七 旅費

宿泊料	92.65	〔81.650〕円	宿泊	17 円 50	
汽車	66.460 円		茶代	2275	
汽船	53.700 円		女中	18	
カニカゴ	120 銭		客引	11	
台車	480 銭				146 円 388
自働車	960 銭				
電車	168 銭				
人力車	394 銭				
昼食弁当等		201012			
荷物保管並ニ附属品		638			
通信		7 円 50			26 円 38
寄附		1250 銭			
計		280 円 53			

一ノ二

35 日中	日曜	5 日		6 日
	公休日	1 日		
	〔汽車汽船〕			

八 新知己 約 80 名

九 遺憾ナリシハ

多摩陵参拝ヲ欠キタルコト
23 年ノ郷里ニ墓参セザリキ

一〇 資料

印刷物	62 点		
図画	7		103 点
書方	22		
エハガキ	12		
記念寄贈品	15 (吉田□属)		

一一 実地授業ヲ見タルモノ

吉野校、台中第一校、有隣校	三
角板山、蒲々校、馬太鞍校	三
屏東、台中公学校	二
計	8
第三高女校	1
27 校ノ中僅カニ三分ノ一 即	計 9

一二 学制

領台前ハ支那ノ儒学ヲ授ケタ
明治二十八年六月十八日台北ニ開始
芝山巖ニ学堂ヲ移ス
六氏翌年元旦歿ス
国語学校ガ大正八年台北師範トナル
公学校ハ三十一年カラ施行
修業八年又ハ四年ナリシヲ廢シ 六年トシニ
年ノ実業科◎ヲ置ク

◎ 国民精神ノ涵養ト国語ノ習熟

蕃人公学校 三十八年規程發布
学務部一行政区ノ蕃人 (公学校)
警察一 蕃地蕃人 (教育所)

大正三年改正

修業年限四年

修、国、算、唱、体、実

同一年改正「蕃人」ノ名称ヲ省キ単ニ公学校
トシ一般ト取扱ヲ同ジクス

15 年 1 月現在

全島蕃童教育所数 176
児童数 4775 人

○ 普通教育上ノ特質

イ、義務教育ナラス

ロ、教育経費及諸給与ヲ州庁費地方費トス

○ 修業年限四年ノ公学校デハ地、歴、理ヲ省ケ
リ

- 中等校
 - 教員 文官
 - 奏人 5 割 判任 6 割 加俸
 - 宿舍料支給
- 書房 132

〔出納記録〕

一表 (520 円 22 銭)

汽車賃 [6442] 6830 ([26]27 回支払 急行
券とも)

汽船賃 [3880] 3995 (4 回支払)

赤帽手当	520 (10 回支払)
手荷物保管料	170 (11 回支払)
汽船中毛布代	125 (4 回支払)
ボーイ手当	1154 (6 回支払)
宿泊料	5510 (16 回支払)
	コノ中 9.70 饗応ス
茶代	2185 (17 回支払)
番頭	[998] 1148 (16 回支払)
女中	1820 (17 回支払)
謝礼金	[1820] 1835 ([5] 6 回支出)
寄附金	1366 (8 回支出)
謝礼土産 (在台)	1595 (7 回支出)
食費	2178 (66 回支払)
理髪	155 銭 (4 回支払)
	570 銭 (2 回支払)
自家ミヤゲ消耗	46.4 (6 回支出)
" 記念品	49.82 (37 回)
自動車	980 (9 回支払)
人力車	394 (14 回支払)
電車	168 (19 回支払)
台車	480 (2 回支払)
カニカゴ	120 (1 回支払)

荷運通	4 円 (1 回支払)
ムセンデンシン	2 円 (1 回)
電報	70 銭 (2 回)
切手ハガキ	91 (5 回)
小包	84 (2 回)
色巻紙	298 (11 回支払)
エハガキ	[1015] 988 (28 回支払)
シャシンエハガキ	255 (3 回支払)
案内地図等	185 (9 回支払)
書籍	240 (2 回支払)
シンブン	15 銭 (3 回)
記念ミヤゲ	49.75 (39 点)
自己ヒフク等	13.06 (10 回払)

第二表

通行税一切	153.36
宿泊謝礼金	141.33
通信ヒ経ヒ	7.83
寄附金	13.66
食費	21.78
衛生費	7.25
他家土産	49.75
自家記念品	112.90
自家消耗品	13.21
帰来	521 円 12
饗応、披露宴	12 円 視学外 5 名
部落民一同饗応茶菓	4 円
三島校長へ礼品	350 銭

第三表

帰任後礼状と謝品を贈りし分

宛先	物品	価格
安倍明義	巻蓆入アイヌ細工	1 円 000
	アイヌ民話	1.500
	印刷両部	
	エハガキ 1 部	
	アイヌ盆 1 個	1.00
門馬常蔵	アイヌ盆 2 個	1.55
中本勇昇	アイヌ盆 1 個	1.00
	アイヌ人形 1 個	1.00
	茶托 1 個	1.00
和田博	アイヌ民話 1 冊	1.50
緒方視学	"	1.50
湊増吉	"	1.50
樋口要司	アイヌ民話	1.50
	印刷両部	
	エハガキ 1 部	
野口敏治	アイヌ民話	1.50
高岡義雄	アイヌ民話	1.50
竹下六郎	アイヌ民話	1.50
高山長太郎	アイヌ民話	1.50
李瑪琚	両部印刷物 2 部づつ	
	エハガキ 2 部づつ	
橋本八三郎	十勝石印機 1 個	1.60
	印刷両部	
角板山教育所	エハガキ風景・アイヌ二組	50
本野演暢	印刷物両部	

〔復命書草稿〕

旅行日数 往復三十五日

本土一台湾間 往復日数 十八日

台湾視察日数 十七日

○ 目的

イ、普通教育の中 生蕃人教育状況

附帯

本島人教育、内地人教育、中等教育

ロ、蕃人生活状態

ハ、ソノ他一般事項

教育施設

○ 副目的

〔空白〕

気候風土

本年度は十一年三十三年の週期降雨とあつて、台湾は一月以降六月中旬まで、殆連日ふりつづいた。晴天僅かに十日とか。降雨は車軸を流すが如く、又雷光雷鳴もはげしく長つゞきする。

中央山脈以東は以西より雨が多かつた。

五月二十九日頃は花蓮港台東庁下水害甚しかつた。

降雨のため曇天つゞきて清涼だかはれまへや夜間は可なり高温で、嘉義台南以南は室内八十九度ヲ昇降、台北でも八十四五度。

台湾の気象観測所にて、東三区域に分つてある中で、花蓮港庁区は尤理想的の健康風土だと。

新竹は風のつよい名物がある。

澎湖島も同様立木がそだたぬ。

毎年夏至には太陽が直下に影ない、且嘉義以南は太陽を北に見るわけである。自分は太陽直下にさらされ、且太陽を北方に仰いだ一人である。地震は先年嘉義に相当つよいのがおこつたことがあるさうだが、さうつよいのや度数がひんぱんではない。

作物

五月下旬、函館七飯附近で植ゑられた水田を見たのをふり出しに、秋田、山形は丁度田植盛であつた。越後、越中はやゝおくれて、処によつてうゑてもいたが少かつた。

然るに、台湾に上陸、基隆、淡水方面は七月のかり入れとあつて、処によつては穂が出てゐた。三月に植ゑたとの話。

六月中旬、台湾東海岸方面は一齊に出穂そろひであつた。

六月下旬、台南、屏東あたりはもう第一期の刈入を終り、二期の田植最中もあれば、うゑてしまつた処もあつた。

然るに、下旬、博多福岡方面では、まだ水がないのでこれからうゑるのだと盛に牛に本田をすかせてをるのであつた。また、周防、長門、備前、備中、安芸のあたりは、盛に田植をやつてをるのであつた。静岡へんも、今田植でうゑをはつたのもあつた。宇都宮あたりは、うゑをはつて十五日程のものである。

南部、北部、東部、西部と四分すれば、作物にも多少の相違がある。

全部を通して見るものは、さとうきび。これは大抵昨年十月頃うゑたもので来年二月頃刈り取られる由。内地共通のものは里芋で、どこにもうゑられてゐる。

サツマイモも多くみられた。

特殊のものでは、アナナンのやうなもの。

動植物 附動植物園

全島を通して水牛の飼養は頗る盛だ。東海岸台東に少し黄牛を見たが、他は悉く水牛だ。西部は黄牛も半してゐるが、大体に於ては水牛だ。水田、畑の作業につかはれてゐる。よく泥や池水につかつて水をあびてゐた。東海岸の水牛は

順良だ。

田園の中によく見受けた野鳥はオウチウと白鷺だ。オウチウはツバメの大きなやうな黒い鳥で、益鳥の内。白鷺は群れてゐるのを時々見た。これの多い処は降雪の如き觀を呈した処もある由。汽車におどろいてとびたつ処がかはいらしい。アヒルはよく飼はれてある。したがつて卵も食用に供せられる。豚も相当にかはれてゐた。犬は蕃人の中に飼はれてゐるも今は多くはない。やもりトあぶらむしトハ旅館のつききり、又愛嬌もある。毒蛇は所在多い。^{〔薄〕}蒲々の辺甚しい。ツツガ虫、蚊もオソルベシだ。

植物は春夏秋冬の区別分明ならぬやう四季を通して花を見るのもある。台北植物園、屏東農事試験場、〈台東、花れんかう、〉等にて特殊の台湾植物や熱帯植物を見ることが出来た。各街□路や民家の植物としては種々の花卉を見る。いづれも色彩濃厚なのが多い。鮮麗なのが多い。中にも目をひいてうつくしきはホウボク。カツラ。キヤウチクタウ。ブツサウゲ。などである。・名はきゝもらしたが角板山につゝじ色をした満山をかざる紫紅色の花を見た。双珠樹の林。・バナナはいはゆる芭蕉の実で、[台湾] 本島語で ^{キンチャウ} 莠 張 といつてゐる。東部海岸殊に多く見た。この実の市場では、台中市場が尤も特殊のものだ。

・動物園は円山公園内動物園を見た。大雷雨で思ふまゝに見られなかつた。

交通と乗物 → 里程

汽車

帯広・神戸間	一五〇四・四
基隆・新北投間	九・八
新北投・台北間	七・六

台北・ソオウ間	七六・八
花レンコウ・台東間（往復）	二
一四・二	
ソオウ・キイルン間	六
〇一・二	
基隆・屏東間（往復）	五二八・六
門司・二日市（往復）	一一六・四
門司・帯広間	一一七五・一
宇都宮日光間（往復）	五〇・二
計	三七四四哩三

汽船

門司基隆往復	一五〇四哩〇
門司神戸間	三四〇・〇
ソオウ、クワレン往復	八四
青森ハコダテ	一〇〇・〇〇
計	一九二八

電車、腕車、自働車
徒歩

カニカゴ	五里	二円
台車	一五里	二円
人力車	四里	十数円
電車	二〇里	
自働車	二〇里	四円
トホ	四〇里	
計	〈一〇四里二〇八〉	
	三七二〇哩	

〇約四千哩の行程

宿泊 十六泊
汽船 六泊
汽車 十二日
計 三十四夜 三十五日

交通と乗物

西部台湾は汽車交通便不行□なし。東部ハ汽車少ク且発車度数少ク不便ヲ感ス。

汽船航路ハ、神戸ヨリ基隆ニ近海郵船の大型吉野丸で行き、かへりは基隆から門司まで大阪商船瑞穂丸でとほす。前は三夜四日、後は二夜三日かゝつて愉快に迎着。吉野の如きは日に二回湯に入れてくれ、エハガキや御馳走をしてくれた。

舟には幸につよくよわなかつた。三食もまちかねる位にかゝさずたべた。

（たゞ旅行中一番こまつたのは手荷物のかさむとあげおろしに頭をなやましたことだ）

西部台湾のきいるん新北投間にはじめて三等にのつて風俗を見るをえたがこの往復以外は全島二等車でとほす。〈西部はとに角〉殊に東部地方は生蕃人、本島人のこみあひ、おしあひ、くさく、きたなく、びんろう一の皮をかみはきすてるのでたまらない。

三等はたしかに我々ののるべきでない。

台湾特殊の乗物は車窓より肩車を七八回見たかのつて見ない。

自分はカニカゴに生蕃人にかゝれたのと台車にのれたのはおもひでの種だ。

角板山より五里半下り五里半を本島人におされて上り下りしたか、あの下りの滑走の壮快は終生忘るへからぬ一つだ。

ランチヤン、テツハイも見たか、のらなかつた。

新知己

凡官公吏八十名

視察物件

- 一、総督府、博物館、中央研究所、専売局、第三高女、第一中学、物産陳列館、蓬萊公学校、納涼博覧会、台湾神社、動物園
- 二、新北投温泉、芝山岩、同公学校
- 三、花蓮港庁、測候所、第一学校、公学校、女学校、補習学校、同寄宿舎、実習園、ポクポク公学校○、吉野尋高校○、ポクポク部落○
玉里尋高校、同公学校
下ラワン部落青年婦人団、新城尋高校、公学校、両部落、研海支庁
- 四、マタアン公学校、タパロン公学校及部落
- 五、台東庁、農事試作場、卑南公学校部落、マラン公学校○、蕃人精米所
- 六、基隆一市場一公園一港湾
〈七、彰化 郡役所、孔子廟〉
- 八、屏東 郡役所、公学校、農事試験所、蕃人石住宅
- 九、高雄 州庁一港湾
台南 孔子、台南庁、市役所、孔子廟、赤崁楼、開山神社、台南神社
- 十、台中 台中庁、台中市役所、教育博物館、パ〔バ〕ナナ市場、公学校、尋常高等小学校、新高山、媽祖廟、閔帝廟、市場二
- 十一、新竹 新竹州公学校
- 一二、角板山、蕃童教育所、蕃社、物品交換所、大溪郡役所

種別

学校	二二
官衙	一三
神社	三
廟	〔四〕五
動物園	一
植物園	一
試作試験所、実習園	三

陳列館、博物館	三
研究所	一
市場、交易所	五
蕃社	九
名所遺趾	五
計	七一

外 太宰府と日光
博多—東京

教育

- 一、教育ノ出発点ガ悲壯ダ
- 二、同化策、融和教育ノ困難
〈(生蕃、本島人出身者ノ統御、反対意見)〉
- 三、緊張味ヲ欠ク(オマツリ気分)
- 四、自己ヲ以テ批評セントスルハタシカニアヤマレリ
- 五、勤続年数長ク叙位叙勲者多シ(官吏ナリ)
- 六、経費ハ豊満ニシテ待遇ヨシ
- 七、設備ハ校舎水道ノ如キ理想的ナリ(白アリとヤキ打)
- 八、本島人蕃人ノハダシ
- 九、角板山ノ芝居
- 十、衛生及整頓等ノ思想普及
- 十一、校地ノ広大ナルコト
ソノ利用相当ノ余地ナキカ
- 十二、蕃人ト神棚
- 十三、神前結婚
- 十四、〈書房と課誦〉

土俗

- 一、衣服ニ勞ナキコト
- 二、概シテ簡易生活ナリ
- 三、脂肪等濃厚食物ヲスク
- 四、生蕃人家屋器具ノアイヌ人ト類似

五、本島人ノセンタク、不潔。車中、ブタ、アヒル、水牛

六、生蕃人ノ住居ノ清潔。飲酒と喫烟（品より錢）

七、一般ノハダシ

八、蕃人ノ稲作

九、蕃人ノ石土器

一〇、ノキ下ガ通路

十一、蕃人ノ死葬

十二、マソノマツリ

十三、本島人ノ葬式

十四、青楼ノアリサマ

衛生

一、台北市ノ街路

二、接客者全部ノ検徴

三、〔空白〕

印象、感激

一、百聞ハ一見ニ如カス

支那画ト大溪澳底ノ山トタキ

（日光ノネムリ猫）

一、赤丹よし奈良の都の古と本島人の風俗

一、奥田、蓬萊両校長の談

一、菅公御遺趾ノ数々

一、日光廟

一、宮城、本所納骨堂

一、上野公園テンボウ

一、吉野丸ト瑞穂

一、送迎ノ親切、森氏、山本氏

一、旅館物語

一、不案内ノハヂ

一、下ノ関一覧

一、〈万年筆物語〉

珍味

ウナギカバヤキ 新北投

タイワンリョウリ 新城 山本氏

キンチョウ " "

アンコイモ

アヒル卵子 マタアン 香川

木瓜 奥村氏、台東、台東旅館

カリサ 台東

ウナギ ショウクワ 小倉

アユサシミ

アユノヤキモノ 角板山

ジンサイ

スキクワ

ドジョウ玉子とち 台北セッツ旅館

ブントアンツケ 台南 森氏

ウナギ井 "

ダンゴ 玉里ラワン

〔決算〕

宿泊料 凡 十七円五十銭

茶代 二十二円七十五銭

女中 十八円

番頭ボーイ 十七円五十銭

シヤレイ 二十三円四十銭

キフ 十二円五十銭

計 百十一円六十五銭

土産 〈百二十五円二十三銭〉

自家

〈エハガキ 十一円七十二銭〉

〔旅後メモ〕

26 日 午後 11.25 上ノ発
 27 日 午〔後 1 時青森行急行発〕103 列車
 前 2 時 24 分 宇都宮着
 同時 5 分宇都宮発
 後 3 時 分 宇都宮よりのりつぎ
 28 午前 6 時 25 分 青森着
 午後 9 時 36 分 札幌着 泊
 29 日 参庁

〔倍〕
 台東 安部視学
 課長

花蓮 中本
 門馬
 湊
 緒方
 門馬
 山本
 奥村
 彰化 小倉
 角板山 巡查
 台南 森要人
 北投公学校

□□ 24×

私どもの祖先

〔 発音
 カホカタチ
 キシツガ ニテキル
 センゾハ 兄弟ニニテキル
 秩父宮殿下

秩父宮殿下ノ御成

〔ゴゼン九ジ〕

二九にサンチョウス

ニッシンショウガクカウコウチョウ 35 歳

新竹州巡查部長 窪田栄次郎
 " 巡查 〔空白〕
 " 巡查（交易所） 高橋敬助
 " 榎本八三郎
 瑞穂丸にて 高雄州警部 大串孫作
 井上〔空白〕
 木原徳治郎

〔26.道庁教育課三書記 4 銭〕

1. 帰着アイサツ訪問
2. 挨拶状ヲ投ス
3. 不在中ノ信書ノ整頓
4. 学校報告物
5. 〔空白〕

彰化郡役所	秋元貞隆
彰化郡視学	中川孫次郎
彰化郡勤務	縄田円次
高雄州教育課長	名和仁一
州視学	小山慧
〔市〕 台南州視学	田中郁
台中州視学	牧野〔富治郎〕
台中市視学	星満寿雄
〔市尹〕 市課長	遠藤〔所六〕氏
〔新竹郡〕視学	秋山〔久七〕 □世
新竹公学校長	村木末一
桃園郡視学	木村凡夫
大溪郡庶務課長	
新竹州郡属	松隈梓
同郡勤務 "	原田芳之
"	
大溪公学校長	吉田次郎
新竹州巡查	本野演暢（教授担当）

〔表紙見返しメモ〕	2	○ 道庁
15 円 キシャ	1	○ 支庁
15 円 九州泊、ミヤゲ	1	○ 学務部長
20 円 テイ	1	○ 寺本視学
10 円 シン	1	○ 若木視学
5 円 マサ、アラタ	1	○ 小柳属
20 円 小使	1	○ 門崎属
	1	○ 西田囑託
ケイタイ	1	○ 竹内運平
手ニモツ	1	○ 那須氏
コニモツ	1	○ 迫田氏
	1	○ 高橋氏
野口課長	1	○ 北崎氏
佐久間町一丁目十二番	1	○ 喜多氏
竹下六郎属	1	○ 金子氏
高岡	1	○ 〔高橋〕正男氏
四丁目丙七ノ八室		
	○ 1	十勝教育会
	○ 1	十勝毎日
6 〔手帖 台湾談、秩父宮奉迎送〕(目録番号 I-i-B-5)	○ 1	十勝新報
	○ 1	十勝
▶ 7.8cm×13.5cm×0.6cm 赤褐色表紙。万年筆、鉛筆書き。台湾学事視察旅行および秩父宮奉迎に関するメモ。『吉田蔵藏品目録』によれば、作成時期は 1927 年。	○ 1	十勝日日
	○ 1	小樽
	○ 1	タイムス
	1	宮本〔富治郎〕
	1	坂井〔辰吉〕
〔見出し一覧〕	○ 1	松山〔亮〕
1 『台湾学事視察復命書(写)』寄贈者一覧	1	金〔耕太郎〕
2 視察談メモ	1	青柳〔鶴治〕
3 「趣味の台湾講話」構想メモ	○ 1	帯広校
〔『台湾学事視察復命書(写)』寄贈者一覧〕	1	飯田〔誠一〕町長
1 ○ 吉田	1	鈴木助役
1 ○ 日新校	1	大橋渉
18 ○ 1 町 17 村役場	1	奥田〔貞三〕
207 ○ 管内小学校全部	1	庄島〔鹿六〕
14 ○ 旧土人学校全部	1	白井〔柳治郎〕

中学校長	1 ○		
佐山〔融吉〕氏	1 ○	就学奨励法	
山本英雄氏	1	寄宿舎ヲ置ク	
森要人	1	無償乗車通学	
山崎恒一	1 ○		
渡部守〔治〕	1 ○	小学校公学校ノ別	
小林林〔藏〕	1	〔非〕 国語常用と比常用トニヨル	
佐藤孝三〔郎〕	1 ○		
保科〔孝一〕	1	義務制ヲ布カス	
川島〔次郎〕	1 ○	出席歩合ヨシ	
宮澤〔春文〕	1	---	
亘理〔章三郎〕	1	出張ト使命	
上埜〔安太郎〕	1 ○	印刷物配付ノ動機	
奥野〔小四郎〕	1		
徳富	1	台湾教育ノ特色	
半杭〔信雄〕	1	出発点悲愴 当事者ノ氣概	
八巻〔嘉作〕	1		
啓明会	[3] 1 ○		
		制度ノ上 内台蕃 ヲ通シテ義務制ヲシカズ 歩合ヨシ	
大野木〔繁太郎〕	1		
小笠原〔語咲〕	1		
十勝教育会	1 ○	国語常用非常用ニテ学校ヲ異ニシ何等種族の特 異ノ区別ナシ	
佐藤文吉	1		
小倉三之助	1		
帯広図書館 ○	1	経費ノ如キハワリアヒニヨシ	
[十勝教育会	1]	衛生体育校舎ノ施設	
		教員給与 加俸五割	
以上復命書写寄贈者		住宅料アリ 全部官吏ナリ	
---		年功加俸ナシ 退職額ニ入ラズ	
〔視察談メモ〕			
公学校教育ノ根本方針		以上ハ復命書写ニツキテ精覽ヲ乞フ	
国民精神ノ涵養			
国語ノ習熟		○ 以下少シク彼地ノ土俗慣習ヲノベ 最後ニ感 想ヲ加ヘム	
蕃童教育ノ方針			
父兄操縦ノタメ			

人口ノ割合

内地人 18 万
蕃人 15 万
台湾人 347 万人

台湾人

二系統
大家族制度 女尊男卑
簡易生活
葬式
洗濯

蕃人

七種族
アミの文化－青年団ノ活動
服装－ハタオリ－角板山
ハダシ ピラウジュ
食物－アハマツリ
酒－タバコ
家屋－衛生
石土器 婦人ノ運搬
入墨
早婚早熟－エハガキ
埋葬 神前結婚
女頭目ノ優勢
□□－国語ハムスビツケル
運動好ト歌舞

壺ト貯金竹筒

命名

アイヌとの類似

○ 感想的批評

気候 風土 作物 動植物 交通 乗物

予備知識

百聞一見に如かず
滝と青丹よし

蕃人の開発

ブヌンに小万里長城
警官の神聖

首狩や焼討

統治上ノ困難

美談

珍話二則

内地教育アイヌ教育トノ握手

幾分ニテモ真相ヲ伝ヘタルヲヨロコブ

○ 遺趾

台湾神社
台南神社^{〔施〕}（始政記念日）
八卦山御遺趾
芝山巖（北投）二九、一、一
角板山、新城の遺趾

○ 衛生施設

○ 復命書に別記のケ条

【「趣味の台湾講話」構想メモ】

趣味の台湾講話

1. 樺太ノバナナ
2. サホロ嶽

- 3.内地ノ蕃人
- 4.キチキチ虫
- 5.台湾ノアリ
- 6.奈良ノ都ノ修理
- 7.古人ノ画我ヲ欺カズ（百聞一見ニ如カズ）
- 8.墓地ニ傘
- 9.札幌行ガ三十五回
- 10.家モ仏モタベル虫
- 11.メデタイ葬式
- 12.今万里ノ長城
- 13.女ナラデハ夜モ明ケヌ島
- 14.洗ッテ干スノガ洗濯ナリ
- 15.国語ノ話
- 16.水牛ノ順不順
- 17.金持ノ由来
支那南昌府ノ^{ゴンゾウ}鱸 三
白銀三千枚
七十余歳 ネムルガ如クユク
玉帝ノ命トシテ
台湾ノ林ニ生レサセ 大富ヲ与ヘ
官欽者ニ任ジ厚ク□ヲ享ケシム
竹筒貯金
- 18.メノコノニセ写真
- 19.タマゴガタバコ
- 20.児童ノ代理ガ父ノ出席
- 21.壺ト釜ノ運搬

＊一年二億万斤〔一億〕二千万円
十五年間二十億強ノ産額
バナナ一本ハ卵一個半ニ当ル
三千年ノ昔「ロヒニー」ノ溪谷デオ釈迦様
ガ芭蕉ノ葉カゲデオ弟子ヲアツメテ頭上ノ
実ヲトツテタバナガラ為人救世ノ道ヲ講ジ
タタメコノ名ガツケラレタトイフコトデア
ル
気温ノ変化ニ敏感ダ

青イシブイモノ

室デハツカウサセテ イロツケスル
台湾ハバナナノ温室
ムサ、サピエンデーム（植物学上ノ原名）

〔以下、秩父宮送迎関係メモ 略〕

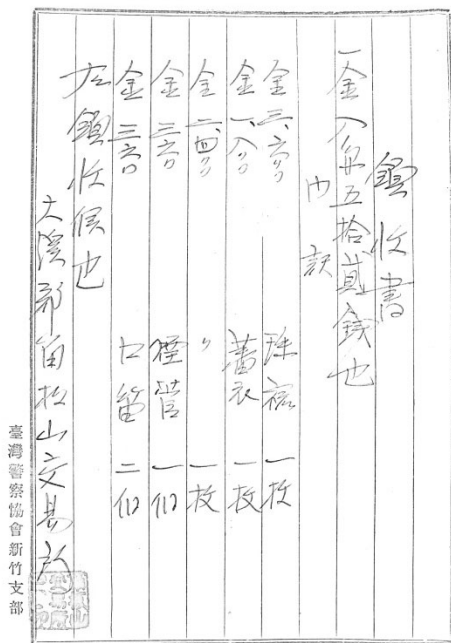
▶ 1927年9月24日付北海道庁属小柳藤太郎宛
の書翰に「趣味中心に執筆の「アイヌと蕃人」
を単行本としてまとめる心づもりのあること
が記されており（【I-i-A-3-40】）、「趣味の台
湾講話」構想メモ」はその草案にあたるもの
かと思われる。同趣旨のもと刊行された著作
は見当たらないけれども、たとえば、「メノコ
ノニセ写真」などの事項は、『心の碑』（1935
年）所収の「高砂国土産」に盛り込まれてい
る（【II-i-3】）。

7 〔購入物品一覧〕（目録番号 I-i-B-11）

二円七十五銭	〔雄〕 高ヲ蕃人作業五点
八円五十二銭	物品交易所にて
四円七十銭	水牛角ミヤゲ
十五円三十銭	台北物産館キブツミヤゲ
二十四円	キブツ 台北
十三円五十銭	アラタ キモノ ヤキモノ
五円	シン アラタ キモノ
五円二十五銭	ナスビ 茶入 ステツキ
十円三十銭	茶キ テフ入
五円五十銭	人形五個
一円	ウチハ 五枚
二十一円十五銭	ミヤゲ等多
四十銭	"
一円七十五銭	ダザイフ ケダイ ミヤゲ
三円八十銭	チヂミ 一反 松坂屋
二十五銭	百種切手
四十銭	ヌリ台
三十五銭	日光シヤシン帖

二十五銭	イトマキ ツノベラ
六円五十五銭	アイヌキブツ
二円三十銭	書画帖
一円七十五銭	モス 五尺
二十五銭	カミ
一円五銭	デンシヤオモチヤ
九十銭	三色カミカザリ
四十銭	印入
二円	本二冊

計 三十九円三十七銭



新竹州大溪郡角板山交易所の発行した領収書
(目録番号 I-i-D-26)。

台湾総督府が先住民集落に設置した交易所では、平地の商品を住民が購入するほか、視察・観光者向けに先住民の製造品を販売。警察職員が販売を担当。

本領収書は、「〔購入物品一覧〕」(目録番号 I-i-B-11)中の「八円五十二銭 物品交易所にて」に相当。吉田は、1927年6月19日に角板山を訪れ、教育所や交易所を見学し、一泊。「珠裙」「蕃衣」「煙管」「口笛〔口琴カ〕」を購入している。

8 〔購入絵はがき一覧〕(目録番号 I-i-B-12)

二十五銭	青森名所エハガキ
三十四銭	神戸エハガキ
二十銭	須磨絵葉書
二十銭	須磨寺エハガキ
一円四十四銭	台北エハガキ
四十五銭	円山神社動物園エハガキ
四十銭	博物館エハガキ
六十銭	台北ニテ エハガキ
十五銭	花レンカウ

シャシンエハガキ

二十銭	エハガキ
一円二十銭	タカラ
	シャシンエハガキ

二十一銭	エハガキ
一円二十銭	台南
	シャシンエハガキ

七十銭	台中エハガキ
六十銭	エハガキ 角板山
二十銭	エハガキ 芝山岩 ^{〔巖〕}

二十銭	下ノセキ
二十銭	門司
十五銭	宮崎
七十銭	博多
五十銭	エハガキ

三十銭	〃
三十五銭	東京
五十銭	日光
三十銭	〃
三十銭	郡山

二十五銭	青森
二十五銭	イノキデラ
六十銭	トフラフ

計十二円九十四銭

9 「蓬萊公学校長より聞きたる美談」(目

録番号 I-i-B-15)

台湾の某公学校の先生が公務出張〔のため、奥さんが留守居〕中のできごとで〔あつ〕した。台湾人の土匪が起つて其の学校を襲ひ焼討をくしまゝした。〔すると先生の〕すると子弟の一人が奥さんや家族の身の上を氣遣つて、急ぎ〔奥さんや子供さん〔を寝台の〕〔くに台湾人の〕〕自分らの衣服をまとはせ厄難地をおちのびさせた。奥さんはけなげにも 勸語謄本を身に奉じ僅かに免かれることが出来くましゝた。先生家族は無論内地人、子弟は台湾人で〔ある〕くありますゝ、そこに〔教育の〕薫化のゆかしい処がうかゞはれ〔る〕くますゝ。蓬萊公学校長く中野勝馬先生くから承つた美談〔である〕。

10 「「台湾視察」ニツキ講演要旨」(目録番号

I-i-B-17)

〔昭和二年七月二十四日〕

一

私ハ、本日、過般台湾視察ノ結果、皆様ガ国民トシテ遙カニ幸福デアリ、且一層自重奮励セネバナラストイフコトヲ希望センガタメニ、コニコ集ツテモラヒマシタコトヲ喜ビマス。

二

何ノ為台湾ニ行ツタカ、ソレハ私個人ガイッタノデハナイ、北海道庁トシテ台湾ノ現在ノ生蕃人ヤナド^{〔ママ〕}教育生活ノ實際ヲ調べテ、コレヲ参考ニシテ北海道教育ノ一部ナルアイヌ教育上ニ幾分ノ参考トナスノ必要ヲ認メラレ、特ニ道庁ヨリノ御命令ニヨツテソノ御使ヲ承ツタノデアル。随ツテ遊半分ノ私ノ旅行デハナク、全ク真剣ニ命ガケノ記念旅行デアツタ。

三

何デモ聞イタダケデハダメ、聞イテ極楽見テ地獄トイフタトヘモアリ、聞イタト見タトデハ全ク違ツテキル事ハ多イ。コノ度ノ旅行デ色々自分ガ感じタコト、イカニ百聞一見ニ如カズトイフ諺ヲ特ニ痛切ニ体験スルヲ得タノモ、賜ノ一ツデアツテ感謝スル次第デアル。

四

ツギニハ人ハ精神ノ緊張トイフコトガ尊イモノデアルコトモヨク体験シ得タ。元来私ハ至ツテ病身、日常頭痛ニナヤメラレ、痔ニナヤメラレ、時ニ不眠秘結肩凝ニ苦シメラレテキタ。ソノ者ガ、時モアラウ相当ニ暑イ往復四千湮ノ海陸ヲ、三十五日カケテノ旅、聞クガ如ク恐シキマラリヤ暑熱流行ノ地ニ行キテ、ソノ御土産ヲ得テ、弱キ体ハタチマチニシテ斃レルデアラウ、船酔ニハドンナニカ苦シメルルデアラウ、マシテヤ生蕃人ノ首狩ノ地、自分モ首ヲ狩ラレハセヌカトマデ、人様モ余計ニ御心配シテ下サレタ。ソレ程マデ色々取越苦勞シタ私デアツタ。私ハ何ノ幸カ船酔一ツセズ、持参ノ風〔邪〕薬一服吞マズ、首狩シタ人ニカゴヲカカセ案内サセテ、愉快ニ恙ナクモ使命ヲ果セル今日、皆様ト親シク語ルヲ得タコトハ、自分ナガラ天佑ト神明ノ加護トヲ謹ンデ九拜三拜イタストコロデアル。シカルニ戻ツテ十日間、ニハカニ左肩ガ凝ツテヤヤ不快ダツタ。コレマコトニ氣ノ緩ンダ崇リ、自分トシテハ三十五日海陸四千湮ノ昼夜ノ緊張ハ、ヨク自分ヲ健康ナラシメタコトヲ痛酷ニ感得セラレテ止マヌ次第デアル。

五

使命ヲ果スハ健康デナケレバナラス。今回コレヲ体験シタ。一生ノ使命ヲ果スモ亦一生ノ健康デアラネバナラス。コレニ要スルモ亦ヨロシク精神ノ緊張ト体力ノ充実トヲ要サネバナラス。

六

台湾ハ暑イ処ダ。ナル程私ハ一生ニハジメテ

逢ツタ、正午南ニ見ル太陽ヲ北ニ仰イダ。ソレハ台湾ノ南部嘉義カラ先ノ回帰線ノムカフデ遭ツタ。聞イタ如ク米ハ三度穫レルトシテ、ソコデハ私ノイツタ六月ノ中旬ニ一回ノ稲ヲコキオトシ二回目ノ田植ノ光景ヲマノアタリ見タ。ムロン熱帯圏デアル、北海道カラ考ヘテハ変ダ、百聞一見ニ如カズ。私ハ独見テ来タヤウナホラヲ吹クノデハナイ。皆サンニモ話スノミナラズ實際ミテモラフコトハ叶ハヌヲ遺憾トスル。

七

一口ニ台湾トイフ、オソロシイ首狩ノ国、生蕃ノ島ダトイフトハイヘ、見ヌ人ニハ想像ガ果シテ正シイノカ、私ハマノアタリ見テソノ真相ガワカツタ。私ドモ北海道ハイカガ、一口ニ内地人ハ熊トアイヌノ島ダト思ツテキル、言換ルトホンノ開ケナイ恐シイ藪ダト思ツテキル。アヘテ弁解スル迄モナク、一見セヌ人ノ百聞シテノ誤解デアル。私ハコノ誤解サレタル北海道ニアツテ年々何百ノ来観人ニ接シテ、コトニ痛切ニ感ジテ居タヤウニ、マタ台湾モコンナ誤解ヲ伝ヘラレテキルデアラウトヒソカニ想像シテ居タ。ソシテソノ想像ハ百聞一見ニ如カズ、今回ノ一見デ当ラズトイヘドモ遠カラヌコトヲ覺シタノデアツタ。同性相憐レム、北海道ト台湾トハ氣候風土ニ於テ異リ、地理人情ニ於テ異リ、歴史風物ニ於テ異ルケレドモ、共通ナ点モ多々アル。中ニモ奇シキ哉、蕃人ハアイヌノ活動写真ヲ見テ狂喜シテ止マナカツタト、曰ク内地ノ蕃人兄弟ヨト。ソノ風俗外貌ノ似タコトダケニテ、見聞単調ナ彼等ハ非常ニ強イ味方ガ、否、同胞ガアルコトヲヘキルムヲ通シテ見タ時ノ直覺デ狂喜止マナカツタノモ無理ハナイ。私ハソノ家屋ノ構造様式ヲ見、倉庫ノ制ヲ見、更ニ口琵琶ヲ手ニシタ時、コレハドウシテ偶然ノ一致ダトハ考ヘラレ「ヤ」「ヨ」ウ、奇シキ系統ノ潜メルコトヲ暗示サルルノデアツタ。南北二千里、

コノ間コノ暗合ハ暗合ニセヨ偶然ノ暗合デハナクテ、由来アル一致デアルコトヲ自覺セネバナラヌノデアル。

八

蕃人ニモ生蕃即高山蕃ト熟蕃即平地蕃トアル。ブヌンヤタイヤルノ如キ獯猛殆行政区外ノモアレバ、アミノ如キ至ツテ温和デ文化モ稍進ミタルモアル。北海道ニモ熊ガ居ル、台湾ニモ豹ガ居ル。開ケタノモ開ケナイノモアル。然シ台湾ハ領台後三十年ヲ僅カ越シタ、北海道ハ開拓使以後六十年ニ近イ。人ニシタラ、台湾ハ三十才ノ子、北海道ハ六十才ニ近イ親デアラネバナラヌ。父タル者、父タルタケノ資格ヲ持タネバナラヌ。生蕃人蕃人ノ中ニモ学校ヲ出テ優秀ナ成績デ小学校教員モ十人程、公医モ二人、高等農林卒業ヤ師範中学女学校ニ学生タルモ現ニアル。又、官公吏ニナラウトシテキル人モアル。一部落デ共同精米所ヲ持ツテ全部ノ自作米ヲ搗イテキルノモ見タ、消防ノ火ノ見ヤ梯ヲ供ヘテ活動シテルノモ見タ、自作水田ノ優秀ナ出来栄ヲモ沢山見タ。家柄ノ頭目ノ指揮ト蕃人ノ先生ガ、自分ノ村ヲ指揮シテ、崖ヲ切り崩シ參道ノ石階ヲツクリ、左右ニ立派ナ植樹ヲナシ、頂上ニハ四脚門ヲセメントデ土台ヲ固メ、近ク本殿ヲ二百円カケテ造ル、境内ヲ公園トシテ神社ヲ建設スル、工事八分ノ出来上ツタ処ニ案内シテ、得ガタキ風景ヲ展望セシメラレタ、下ラワンノアミ蕃社ナドモアル。結婚モ昔デハナラヌト神前結婚ヲ行ツタトイフ、ソノ日ニ台東ニ私が着イテ、今朝臨席サレタソコノ視学ヨリ有様ヲ承ツタ処モアツタ。自作米デ自給スル程ニナツテ、勤勞貯蓄トイフコトモ立派ニ充實シテ、余裕アル生活ヲナシツツアルコトモ知ツタ。皆デハ勿論ナイガ、私モ見セラレタ下ラワンノ前ノ頭目サンノ家デハ、和風ノ建築住宅ニ玄関ハコンクリート塗ツメ白壁ヲ以テ桎屋硝子戸入ノ改良作

リ。玄関内庭ノ中央ニ兩陛下ノ御写真ヲカケ、左右ニ神棚ト祖先ノ靈トヲ祭りテ灯明ヲ上ゲ、周りノ上壁間ニハ明治神宮、本願寺ナドノ大額ヲ十二、三懸ケラレテアルノヲ見タ。ソノ中央ニ卓子ヲ置キ、椅子ヲ置キ、余ヲ、ビール、サイダー、手製ノダンゴ、ヨーカン、桃ノ実、芭蕉ノ実ナド、山ニ盛り、茶マデ添ヘテ、歓待シテクレタ。異国異郷〔ノ〕クデハナイマデモ異国異郷ノ〃思切ナル椰子ノ島根テフ、ハジメテ往ツタ私ハ、サウシタ異国情緒纏綿タルモテナシヲ受ケテハ言フベカラザル感興ヲソソラズニハ居ラレナカッタ。手製ノダンゴヲ賞味スルト、帰路先刻ノ如キカニカゴニカカレテ送りクレル余ヲ追ヒカケテ雨ノ中ニ木ノ葉ニ包ンダー包ノ団子ヲ土産ニトテ贈リ届ケテ呉レタノデアツタ。珍ラシキ白石杵モ見セテ、コレテ造ツタ団子ヲ説明シ、キネモ土産ニトイフノデアツタ。一貫何百匁カノ杵、辞スルト更ニ小サキ臼杵ヲ更ヘル。コレモ辞スルト五代前ノ父祖ガ手製ノデワストイフ神前ニ水ヲ供ヘタ土器ヲ紀念ニト贈ラレル。厚意アマリニ氣ノ毒ニ受ケルト更ニ頸飾玉舞ノ前垂ナドマデ添ヘテ呉レタ。自分ハコンナ異郷デコンナ歓待ヲ心カラ受ケル、コノ雨中ニ濡レテカニカゴデ送迎シ、頭目ノ指揮〔テ〕〈ニ〉一村四十ノ老幼男女ノハナヤカナ送迎ヲ受ケヨウトハ全ク夢カト思ハレタ。ソノ儀礼ニ厚キ蕃人モ、カク聖代ノ恵ニ浴シタルカラ思フ時、顧ミテ我ガアイヌ同胞ハト心ヒソカニ思ハレザルヲ得ナカツタノdeal。

九

吾吾北海道八年ノ半ハ雪ノ中ニ埋レル、寒イコトハ寒イ、米ハ一毛作ダ、畑モサウダ、シカシ春モアレバ秋モアル、四季ノ変化氣候ノ変リニ慣レタル我等ハ実ニ幸福ダ。台湾ハ領台後、最北ノ地ニ結氷ヲ見タ事ハ唯一度ノミダトイフ、年中常春ダ、花コソハ咲ケ、雪ノ眺メ秋楓ノ眺

メサウシタ変化ガナイ一本調子ダ。經濟方面ハサテ置キ自然美愛好者タル我等カラ見テハ余リニ物足ラス。此ノ点カラハ北海道ニ生活スル我等ハ遙カニ幸福ナル位置ニ在リト誇リタイ、否、幸福ヲ祝セネバナラス、ソレタケ四時奮励努力奉仕セネバナラスト思フ。

十

然シ台湾ハ風土カラハカウテアル、コレニ伴フ虫害ナドニテ家屋ヤ衛生上ノ施設ガコレニ負ケズト進ンダノヲ見ルト、北海道デモコレニ對抗スル方面ハドウカト見ルト、ヤハリ夫々出来テハ居ルガ、台湾ニ比シテ父タリ兄姉タル年齢ニハマダ誇ルニ足ラヌデハナイカトモ考ヘラレヌデハナイ。台湾人ノ如キハ実ニ簡易生活、一日三食十錢ソコラデ生活スルトハ食物ノミダガ、跳足ニ雨合羽ト一重笠、ソレニ車夫ナラ独身デ人力車ニ寝起シテ太平楽ヲ謡ヒナホ且相当ノ貯蓄ヲ有スル、台湾人ノ貨殖ハ実ニ有名ダ。尤台湾人ニモ広東福建兩省ノ出身デ多少ハ違フガ、要スルニダラシナイ浪費ハセヌ、極端ニ蓄積スル、ソノ公共ニ投ズル等ノ点ハマダ考慮ノ余地コソアレ勤勞シテ積ムコトハ確ニ我々ノ親タルベシト思フ。皆ト共ニ猛省シテミ見タイ。

十一

我我生活ヲ本道ニ定メ、台湾ノ如キ一本調子デナイ四季ノ変化アル樂シキ本道ニアリテ、十分活動シ得ル好位置ナル道民ヤ我々ハ、台湾ヨリ父デアリ母デアリ兄姉デアツテ、シカモ先輩タル可キ我我皆ガ、世ニ後レ落伍セリナドト見ララルハ大ニ残念至極deal。蕃人ハ不幸ニシテ保護法ノ如キ給与地ハナイガ、ヤハリ自治モシ活動シテキル。然ルニ農耕地モアリ四季相当ノ活動ノ出来ル我我ハ、コノ北海道ヲ利用シテ大ニ国家ノタメ奉仕努力、後レタル趨勢ヲ引キ返シ奮励スベキデハナイカ。コレ本日土産トシテ皆ニ頒ツ私ノ言葉deal。

〔 空 白 〕
<(昭和二年七月二十四日・)>

- ▶ 日記には、1927年7月24日午後、日新尋小に集まった伏古部落の住民に対して2時間近く台湾視察談を語ったこと、その前日には伏根弘三ほか59名宛の案内状を作成し、児童を介して配付したことが記されている。

11 「帯広仏教青年会ニテ講演大要」(目録番号 I-i-B-18)

皆さん私は只今御紹介をたまはりました吉田巖であります。私は明治三十九年八月渡道爾來廿二年間アイヌ学校や部落に半生を送りつつあります。遠方の人は私をアイヌと思つて居る程それ程今ではアイヌと親しんで居ます。そのアイヌの先生がまた同じ 陛下を戴く生蕃人を視察し得たことを記念すべく皆様にその片端をだにお伝へすることの出来る機会をお与へ下されました高橋老校主様や諸先生方の御厚意を謹んで感謝いたす次第であります。

短時間に於きまして申上げるといふ事はお話の材料取捨に困じますので自然大切なことを逸し無駄なことを述べるやうになることをおそれます。

皆様は台湾に対する地理学上の知識は既に一通り御取得になって居る私はただ親しく見親しく聞き且体験し得たことを皆様に提供いたすまでですから一つなりと参考資料となりましたら私の満足と致す処であります。

期間と旅程

五月廿七日海軍記念日を振出しに六月卅日夏越の祓いの日を打切りに五周間の旅程でした。

順路は帯広から函館それから連絡船で青森に上陸、秋田山形から北陸線によって米原に出て神戸三の宮で台湾直航船吉野丸に乗って瀬戸内海玄界灘東支那海を経て基隆につきました。こ

の片道は普通一周間ですが途中二泊した為九日になりました。

基隆から汽車で台北に行きここから淡水線の北投に行き戻って基隆の次駅八堵から宜蘭線に乗り終点蘇澳から花蓮港に上陸これから台東線によって約一周間東台湾の蕃社蕃人の實際を視察し台東から台北まで同一旅程を繰返し縦貫鉄道にて彰化に下車、更に高尾^{〔雄〕}、屏東を終点として同一旅程を帰りながら台南、台中、新竹、角板山、芝山巖を歴巡して台北に戻りここに台湾一巡十七日にて帰航の途につき瑞穂丸にて門司に上陸、太宰府に詣で下関を一巡、山陽線で瀬戸内海を眺め、神戸より東海道線により名古屋を経、東京に下車、日光に詣でて一路帰北また九日を要しました。

気候と農作

十勝連峰はまだ雪があつたのに石狩の山々ははや消えてゐました。函館付近で植ゑられたばかりの早苗田を見秋田山形は田植盛、北越京阪神もそれからの田植でした。

基隆に上陸の六月四日には付近の稲は出そろつて居りそれから東海岸地方も大方出穂を見中旬嘉義から南では第一期の稲刈が終つて二期の田植でした。この二期の稲は十一月に刈入るのなさうです。一期のは三月に植ゑたさうです五箇月間で収穫さるるわけです。

戻りに九州ではやつと田植でした山陽地方もさうでした。

台湾の気候と風土

まづ台湾といへば熱い^{〔ママ〕}処と思ふ。成程領台三十二年に台北で氷を見た事は僅かに一度しかない。霜も高山には見らるるも殆平地には見られぬ。雪は新高山の頂に僅かに見るのみ。常春常夏の島だ。ホルモサといはるる常緑の島だ。

一箇年の気温によるに最高が七月摂氏二八・一。八月六月九月五月の順で札幌の八月二〇・

八が台湾の四月二〇・八と正に同じだ。

最低が二月一四・七殆札幌の六月一四・八に
対抗する。

私は五六月即台湾では北海道八月以上の気温
中を旅行したのです。

台湾の一箇年の気温平均は本道札幌の約三倍
を示して居ます。本年は十一年、三十三年の
〔ママ〕週期なさうで一月から五月末まで連日の降雨、
晴天僅かに十五日であったさうです。この珍ら
しき年に私は偶然に遭って名物雨につくづくと
台湾味を味ったのでした。台湾の雨はまた格別
であったことを忘ることは出来ません。統計
によると台北の一箇年の雨雪量は二一〇ミリ
メートル即札幌の一〇二一に対する約倍量を示
して居ます。

交通

私は海に陸に往復五千哩、毎日帯広から札幌
に汽車で往つた程三十五回を重ねた行程しかも
つくづく聖代の有難さを感じせずにはゐられま
せんでした。海の如きは一万噸級の速航汽船、
湯浴ながら瀬戸内海の風光を丸窓にながめる愉
快さ海上の楽しさを第一に述べねばなりません。
津軽海峡の如き実に室内にかはりません。これ
を廿四年前私がはじめて北海道十勝にまゐり往
復釧路函館間の海路不便と帰路イリモ沖で二百
十日の暴〔風〕くれ雨にあつた苦い体験とは実
に雲泥の差です。老校主様の御令嬢たりし鼓美
百合子様と御同船して親しく共に苦勞をしたこ
を思うて今昔の感にたへません。

然し台湾の汽車は縦貫線は内地本土のと変ら
ない程度ですが台東線や淡水線は二等が本土の
一等位且おそく石炭粉がとび室内は台湾人蕃人
の昇降者多くて不潔なのには驚かれます。皆総
督府の経営です。

何処にも電車はありあせん。自動車、人力車
が多く殊に人力車全盛といつてもよいのです。

電車でも出来たものならこの人力車夫さんの全
滅を見るゆゆしきことでせう。

台湾特有の轎、台車、蕃人のカニカゴこれは
また台湾味を味ふにはふさはしいものです。

竹筏やランチなどもここでは見られません。
おもむきのあるものです。

台湾の面積と人口（大正十三年末現在）

		男	女	百分比
総 数	400 万人	200 万人	196 万人	100.00
内地人	18 万人余	10 万人余	8 万人余	4.5
本島人	374 万	191 万	182 万	92.6
蕃 人	8.4996	4.2650	4.2346	2.1
外国人	3 万余	2 万余	7 千人余	0.08

右表中本島人の中に平地居住の蕃人 50243 人合
算されてゐる。而して蕃人の数は蕃地居住のみ
を示してゐます。

一方里平均 一七〇五人（台湾）

内地府県の密度より 一二二九人少し

朝鮮の密度より 四五五人多し

北海道の密度より 一二六三人多し

台湾周囲 三九九里

面積 二二三二方里 九州樺太の広さとほ
〔肩カ〕ぼ比献する。

学校

初等教育 { 小学校（内地人）国語常用者 }
 { 公学校（台湾人）国語非常用者 }

高等普通教育（全然共学）

義務教育ヲ布カズ 歩合九七以上（小学校）

台湾人

対岸支那からの移住者が多い。福建が花やか
で広東はじみであります。

福建人は帰属的美服纏足金銀珠玉を喜びます
広東人は平民的素衣粗食簡易生活を好みます
〔ママ〕福建人の送葬を台南で見てメデタイ式だと

疑ひました

又六十の婆さんが花嫁御の様に白髪をきらび

やかにかんざしなどで装飾して居ました。

広東の車夫の簡易生活には極端のものがあります。一日十銭の食費、衣服も何も簡易です。夜は家なくて自分の車に寝ます

何れも洗濯をいたしますが干すのがせんたくだと思はれます

生蕃に水牛やあひるをよくかってゐます

同姓はめとらず、水牛は食ひません。

台湾人は女尊男卑大家族制度であります

信仰は儒道仏齋の諸教で三千四百余の寺廟が現存してゐます。媽祖廟が最も著名です。台南の如きは領台当時八百余の廟があったさうです。

媽祖の祭日にはタパロン蕃社であひました。

書房といふのがあります。所謂台湾の寺小屋であります。

蕃人

蕃人には〔七〕〈九〉種族あります。人口の多少順に

一 アミス 二 アタイヤル 三 パイワン
四 ヴヌム 五 ツアリセン 六 プユマ
七 ツォォ 八 ヤミ 九 ピイポォ(熟蕃)

聖代今万里の長城 台東線新武呂から初鹿尾まで、電流線の垣、飛行機隊、機関銃隊の警備があり、主として行政区域外の蕃地に属するのであります。此处には駐在所があり、蕃童教育所があつて警察官吏が指導して居られます。その職務は、実に神聖なものであります。

台東線の車窓からこの蕃社の粟の黄ばんだ様が晴やかに見えてゐました。

此等の蕃地の蕃人を高山蕃又は高地蕃といつて平地蕃と区別してゐます。両者の文化は大に違ひます。

文化の最も進んだのはアミス族です。四万の地租納入者があります。生業は農を励み、水田段四俵以上の収穫をなし、甘蔗畑から千円以上も揚げて居る者があります。

衣服は、殆どはなかつたのがその以前四角のつぎを今では装飾となつて仕舞ひました。竹の皮の笠、棕櫚の蓑を用ふるがあります。織機を見ましたがアイヌのと似て居ます。

食物はバナナ、アンコイモ、その他の野菜肉類では魚などです。高山蕃は鹿をとつて喰ふさうです。

住居は、竹や籐が主材です。其の制内は暗くボクボクの如きは電気燈をつけて夜と昼とがあべこべでした。床は竹で高く涼しいのです。忍び窓や、おもしろい屋造りです。物置も鼠よけがあつて、アイヌのプとそつくりです。屋根はコアチンで葺いてゐます。

〔湯〕酒と煙草は男も女もおとな子供の別なくよく好みます。

男も女も種族によつて様式がかはつてゐますが入墨をし、耳に環や花を挿します。先生にも生徒にも見ました。みなはだしです。

頸飾もします。又歯を抜いて糸にとほして頸飾にもしてゐます。

ブヌンなどは眉毛を抜いてゐます。

また檳榔樹の樹皮を口々にかみます。男も女も。

髪は、散らしてゐますが、煙管を頭髮に挿してゐるのを見ました。

埋葬は、室の四隅にするさうです。そして塞がれば他にのきます。

高山に家を建てても水に不自由しません。木の露と雨水を呑んでゐるのですから。

十三四で結婚です。長生者は少いのです。神前結婚をするやうになりました。十五六の妙齡の蕃女が鉄道決壊箇所工事に頭で砂利を運ぶのを見て驚きました。俵大の荷を女が頭にのせて釣橋を渡るのなどは実に見あげたものです。

石器土器を現に使用してゐます。土器も土産におくられました。石の杵など中々めづらしい

ものです。弓矢などもアイヌのに似てゐます。頸斬刀も帯びてゐます。

女尊男卑は台湾人と同じです。女ならではの夜もあけぬ島、女学生諸君大に意を強うすべしです。殊に日章旗のかがやく女頭目の優勢さなど珍中の珍です。

女は姿勢が整つてゐます。

男女を通じて手工が特に上手です。刺繍図画など実に見事なものです。

唱歌は角板山でできました。美音まことにカレウヒンガノコエかとゆかしくきかれます。

発音も夫々混雑されてゐます。タバコかひを命ぜられた児童がタマゴを買つて来たなどの実例をききました。

国語も段々普及して来て今では夫を迎ふるにも国語の巧なものといふ条件がつくやうになって来ました。国語は台湾語と蕃語との中継、橋です。

命名にも色々おもしろいがあります。好んで汚い名を付けます。アイヌに似てゐます。

通じて運動好で歌舞を好みます。これで成功したタバロンの学校は一異彩です。

蕃人はピユマ（卑南）の外は通じて増加してるさうです。人物は快活で、あつさりして、態度風采よく内地人そっくりです。従順にして内地人を尊敬してゐます。首狩だのまたは焼討だのいふ蕃風は今や平地蕃にはなく、マタアンなどでも十三の首だなをこぼつた程です。して往々台湾人や支那人がこの禍にかかります。アイヌの熊送のなくなつたやうなものです。

粟祭といふのがあります。年中で大切な行事です。

ラワン蕃社などの活動は青年婦人を通じて奉仕的作業殊に見るべく感心しました。

台東のマランやピナンからは高等農林学校出の人、公医や師範出の人、女学生など立派な人々

がそろつてゐます。

此等を見るにつけ一日も早く高地蕃人がかう同化して今万里の長城がなくなるやうにほしいと祈って止まぬのであります。

マランでは共同精米所を建て白米を戸毎にたべ粃糠でよい養鶏をして貯金を団体でやってみました。各家庭も夫々貯蓄に力を入れてゐました。

昔から竹筒に入れて貯金をする土地に穴して埋める習慣であつたのを郵便〔局〕等に預けるやうに勧められてゐます。

又近來は仏教などに感化され又戸毎に神棚を安置して敬神敬仏の実が認められるやうになりました。で台東には親の墓に傘をさしかけた蕃人すらあるとききました。（昭和二年十月十三日夜稿）

- ▶ 前掲資料とともに「帯広市史編纂原稿用紙」を用いていることから、後年に転記したものと推察される。
- ▶ 日記には、1927年10月1日夜、西本願寺別院に出向き、日新尋小に集まつた伏古部落の住民に対して2時間近く台湾視察談を語ったこと、仏教青年会に参列し、約1時間半の「台湾蕃人講話」を行ったとある。本資料末尾の10月13日は浄書の日付か（同日の『吉田巖日記』は空白）。

12 「アイヌ学校教師の目に映じたる生蕃人」（目録番号 I-i-B-19）

〔欄外〕（ル）

アイヌ学校教師の目に映じたる生蕃人

北海道河西郡帯広町

基線西二十五番地

北海道庁立日新尋常小学校

吉田 巖

皆さん私は明治三十九年八月渡道爾来二十数年主としてアイヌ学校や部落に半生を送った者であります。遠方の人は私をアイヌと思つて居る程それだけ今ではアイヌと親しんで居ます。そのアイヌ学校の教師がまた同じ 陛下をいただく生蕃人の学校や部落を視察しえたことを記念すべく片鱗をお話いたませう。

蕃人には七種族あります（一）アミス（二）アタイヤル（三）パイワン（四）ヴヌム（五）ツアリセン（六）プヌマ（七）ピイポォ（熟蕃）で、人口の多いのから順に挙げました。

聖代今万里の長城 台東線新武呂から初鹿尾まで、電流線の垣、飛行機隊、機関銃隊の警備があり、主として行政区域外の蕃地に属するのです。此処には巡査駐在所があり、蕃童教育所があつて、警察官吏が指導をして居られます。其の職務は、実に神聖なものであります。

台東線の車窓からこの地方蕃社の黄ばんだ様が、晴やかに見えて居ました。

此等の蕃地の蕃人を、高山蕃又は高地蕃といつて、平地蕃と區別して居ます。両者の文化は大に違ひます。

文化の尤も進んだのはアミス族です。四万の地租納入者があります。生業は農業を励み、水田、反当り四俵以上の収穫をなし、甘蔗畑から千円以上も上げてゐる者があります。

衣服は、殆纏はなかつたのが、その以前四角のつぎを今では、装飾となつてしまつた。竹の皮の笠、棕櫚の蓑を用ふるのがあります。アタイヤルの女の織機を見ましたが、アイヌのと似て居ます。

食物はバナナ、アンコイモ其他の野菜、肉類では、魚などです。高山蕃は、鹿を捕つて食ふさうです。

住居は、竹や籐が主材です。其の制、内は暗く、花蓮港蒲々（ポクポク）蕃社の如きは電気

燈をつけて、夜と昼とが、あべこべでした。床は竹で高く、涼しいのです。忍び窓や、面白い屋造りです。物置には、鼠よけがあつて、アイヌの庫（ブ）そつくりです。屋根はコアチンで葺いてゐます。

酒は煙草と共に、男も女も、大人子供の別なくよく好みます。

男も女も種族によつて様式が、變つてゐますが、入墨をし、耳に輪や、花をさします。先生や、生徒の中にも見受けられました。

みな、跣足です。

頸飾もします。又歯をぬいて、糸に通して頸飾にもして居ます。

ブヌンなどは眉毛を抜いて居ます。

また男女とも檳榔樹の樹皮を口々に、かみま

す。髪は、散らしてゐますが、煙管を頭髮に挿してゐる女も見ました。

埋葬は、室の四隅にするさうです。そして一人づつ埋めてふさがれば他に移ります。

高山に家を建てても、水に不自由しません。木の露と、雨水を呑んで居るのですから。

十三、四歳で結婚です。長生者が少いのです。今では、神前結婚をするやうになりました。十五、六歳の妙齡の蕃女が、鉄道決壊箇処工事に、頭で、砂利を運ぶのを見て、驚きました。

俵大の荷を、女が頭に乘せて、釣橋を渡るのなどは、実に見あげたものです。

石器土器を現に使用して居ます。土器も土産に、贈られました。石の杵など、中々珍しいものです。弓矢などもアイヌのに似て居ます。頸切刀もまだ帯びてゐる処があります。

女尊男卑は、台湾本島人と同じです。女ならではの夜もあけぬ国、女学生諸子大に意を強うすべしですね。殊に日章旗の輝く女頭目の優勢さなど珍中の珍です。

女は姿勢が整って居ます。

男女を通じて手工が、特に上手です。刺繡、
図画、書方など、実に見事なものです。

唱歌は、角板山で、聴きました、美音ゆかし
くきかれます。

発音も夫々、混雑されて居ます。煙草買を命
ぜられて、卵を買って来たなどの実例を聞きました。

国語も段々普及して来て、今では夫を迎ふる
にも、国語の巧なものといふ条件がつくやうに
なつて来ました。国語は台湾語と、蕃語との中
継橋です。

命名にも、色々面白いのがあります。好んで
きたない名をつけます。アイヌに似てゐます。

通じて運動好で、歌舞を好みます。これで成
功したタパロンの学校が一異彩です。

蕃人はピユマ（卑南）の外は、通じて増加し
てるさうです。人物は快活で、あつさりして、
態度、風采よく内地人、そつくりです。従順で
内地人を尊敬してゐます。首狩だの、または焼
討だのいふ蕃風は、今や平地蕃にはなくマタア
ンなどでも十三の首棚をこぼつた程です。して
往々台湾人や支那人が、この禍にかかります。
アイヌの熊送のなくなつた様なものです。

粟祭といふのがあります。年中で大切な行事
です。

ラワン蕃社などの活動は、青年婦人を通じて、
奉仕的作業殊に見るべく感心しました。

台東のマランやピナンからは、高等農林学校
出の人、公医や師範出の人、女学生など立派な
人も揃つて居ます。

此等を見るにつけ一日も早く高地蕃人が、か
う同化して、今万里の長城がなくなるやうにあ
つて欲しいと祈るのであります。

マランでは、共同精米所を建て、白米を戸毎
に食べ、粿、糠で、養鶏をして、団体貯金をし

てゐました。各家庭も夫々貯蓄に力を入れて居
ました。

昔から竹筒に入れて、貯金をする土地に穴を
掘つて埋めかくす習慣であつたのを、郵便局な
どに預けるやうにすゝめられて居ます。

また近来は仏教などに感化され、又戸毎に、
神棚を奉置して、敬神、敬仏の実が認められる
やうになりました。で、台東では親の墓に傘を
さしかけた蕃人すらもあると聞きました。

▶ 前掲「帯広仏教青年会ニテ講演大要」（目
録番号 I-i-B-18）の草稿か。

13 「台湾学事関係文献資料」（目録番号 I-i-B-20）

台湾学事関係文献資料

台湾総督府学事第 23 年報（大正 13 年） 大正

15・9・30 発行 364 頁大冊

始政三十年記念 最近の台湾 大正 14・6 発行

教育状況（台中州） 大正 15 年

台東庁教育要覧 大正 15 年 12

花蓮港庁学事一覧 昭和 2 年

高雄州学事一覧 大正 15・10

台東庁第九統計書 昭和 2 年

こさくら 第参輯（台中第一尋高等学校編） 昭
和 2・ 492 頁

台湾の教育

台湾商品概説 昭和 2

花蓮港^{〔序〕}町勢 昭和 2

高尾州^{〔謹〕}屏東郡勢要覧 昭和 2

教育通信報 昭和 2 年 5 月号

台中州要覧 大正 15 年

台湾学事一覧 大正 15 年

台東庁案内

台中市案内

説明カード 36 枚

東台湾研究会誌 大正 14・ 7 冊

秩父宮跟随記 大正 14・

笹の雫 2 冊

花蓮港庁勢 昭 2

三移民村 大正 15

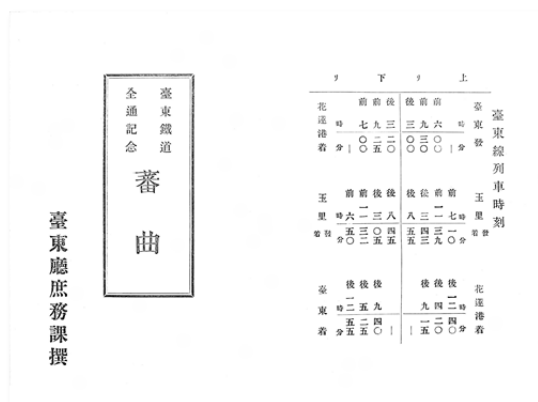
計 22 点 総重量 850 匁

- ▶ 24.8cm×35.5cm、「十勝支庁」罫紙、ペン書き。

14 「花蓮港庁新城公学校 種族別部落別児童一覧」(目録番号 I-i-C-1)

〔後掲〕

- ▶ 27.0cm×19.8cm。謄写版、青赤 2 色。地図中の数字はペン書き。
- ▶ 新城公学校は 1926 年 4 月創立。教員は山本英雄(校長兼訓導)、山本喜代。開設 2 年目の年度当初の在籍児童の概況を示す本資料からは、普通行政区域および特別行政区域にまたがる広範な地域から、タイヤル族、アミ族、平埔族、漢民族の児童を収容していたことがわかる。先住民民族児童を対象とする教育所が設置されていたタッキリ、プセガン、プスリンの各部落からの就学児童も少なくない。在籍児童は 3 学年あわせて 141 名(男 93・女 48)、民族ごとに男女差は顕著である。



台東庁庶務課撰「台東鉄道全通記念 蕃曲」

15 「台東鉄道全通記念 蕃曲」(目録番号 I-i-C-7)

〔後掲〕

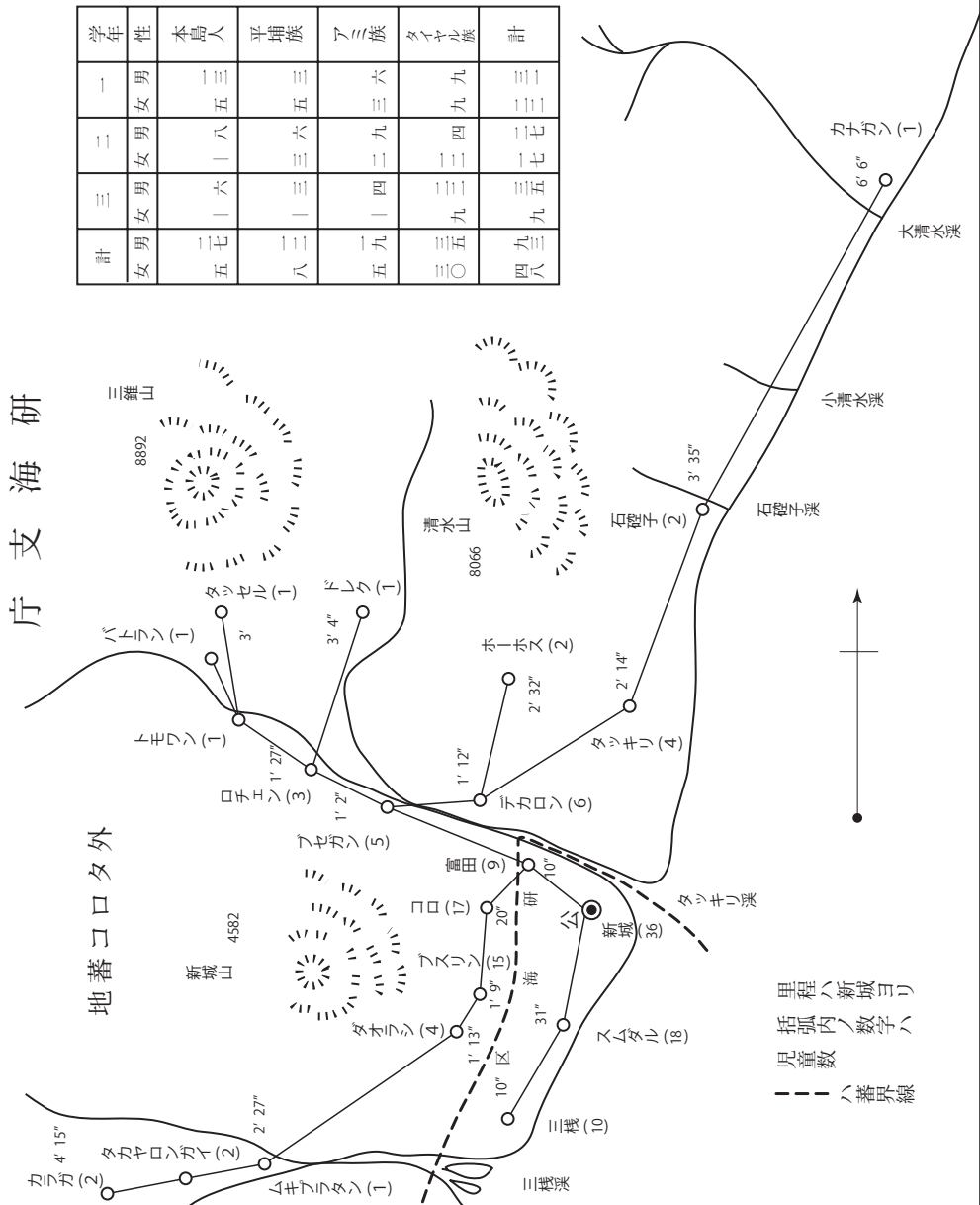
- ▶ 21.5cm×33.3cm、両面、四折り。表面に表題および「台東線列車時刻」(下掲写真)、裏面に歌曲の楽譜 4 点(いずれも数字譜)。
- ▶ 台湾鉄道台東線(花蓮港-台東)は、第一期工程(花蓮港-璞石閣区間、1909 年着工・1917 年竣工)、第二期工程(璞石閣(玉里)-台東区間、1921 年着工・1926 年竣工)を経て、1926 年全通。同年 3 月 27 日花蓮港庁玉里にて全通記念式典を挙げる。本資料は、この時期に作成されたものと推定される。
- ▶ 資料タイトルにある「蕃曲」という用語は、日本人が台湾先住民の歌曲を総称する際に用いたもの。載録曲には「馬蘭蕃曲」「卑南蕃曲」とあり、台東庁管内の馬蘭および卑南の両部落で採録した歌曲をもとに、編曲・作詞したものであろう。
- ▶ 阿倍明義編『蕃語研究』(蕃語研究会、1930 年)の附録「蕃語」には、本資料所収の 4 曲が載録されている。同書によれば、「吾が里の原曲」は、一條慎三郎の調査による。一條慎三郎(1870-1945)は、東京音楽大学卒後、1911 年渡台、台湾総督府国語学校(のち、台北師範学校、台北第一師範学校)の教諭・嘱託として最晩年まで音楽教育に従事し、台湾総督府編『公学校唱歌』の編纂等に関わったほか、「始政記念日」「台湾警察歌」「台北市民歌」等の作曲を手がけている。「平和な蕃社」については、「本蕃曲は知本社出身川村実によるところ多し」との注記がある。川村実(パントル)は、1922 年台北師範学校本科卒、台東庁管内の公学校に訓導として勤務。他の 2 曲については不詳だが、『蕃語研究』所収の歌曲には調査者や作詞者を記載しているものもあること、そのいずれもが学校関係者であること、阿倍は馬蘭公学校に勤務経験があること等から、阿倍による採譜・作詞の可能性もある。

花蓮港厅新城公学校

(昭和11年四月11日現在)

種族別部落別兒童一覽

学年	性	本島人	平埔族	アミ族	タギヤル族	計
一	男	一三	三	六	九	三二
	女	五	五	三	九	二二
二	男	八	六	二	四	二七
	女	一	三	九	一	七
三	男	六	三	四	二	一五
	女	一	一	一	三	五
計	男	二七	二二	一九	三五	九三
	女	五	八	五	三〇	四八



15 「台東鉄道全通記念 蕃曲」 (目録番号I-i-C-7)

勤 勉

八調 $\frac{4}{4}$

馬 蘭 蕃 曲

(片仮名は囉)

3 5 3 2 7	3 2 3 0	7 2 7 6 5 7	6 5 3 3	—
(ハイヨ-オ-ウイヨイヨ-)	ハイヨホ-ウイ	オ-ウイヤ-		
ひ た ひ に あ	せ し て	は た ら く	ち	こ れ
5 7 5 6 5 3	3 — . 0	7 6 5 6 7	7 —	
(ハイヨ-ウヨ-イウ)	ヤ-)	エヤホワイヤ-		
ひ と の つ と	め	—		
7 6 5 6 7 2 7 6	5 3 2 3	—		
エ ヤ ホワイ ヤ イ ヤー	ホ ワイ ヤー			

勤 勉

額に汗して 働くも これ人の務
 エヤ ホワイ ヤー
 エヤ ホワイ ヤイヤー ホワイヤー
 心砕きて いそしむも これ 国のため
 エヤ ホワイ ヤー
 エヤ ホワイ ヤイヤー ホワイヤー
 栄行く御代に 生れし 我等
 いさつとめなむ エヤ ホワイヤー
 エヤ ホワイ ヤイヤー ホワイヤー
 倦ます 携ます 心楽しく
 いそ励みなむ エヤ ホワイヤー
 エヤ ホワイ ヤイヤー ホワイヤー

吾 が 里

二調 $\frac{2}{4}$

馬 蘭 蕃 曲

(片仮名は囉)

(6 6)	(6 6)	6 5 3 2	3 3 2 1	6 —
エー	エー	エ ヤ ハ ハ	ハ イ アー	ハ-
6 5 3 2	3 3 2 1	6 6 3 3	2 2	2 —
あ し た に	ほ — し を	いた だ —	きて	—
6 5 6	3 3 2 1	2 3 2 1	6 6	6 —
ゆ ぶ ベ に	つ—き を	ふ み か —	える	—
6 6 6 6	5 5 3 5	6 5 3 2	2 2	2 —
へ い わ な	さ — と ぞ	わ れ ら が	ほ こ り	
6 5 6	3 3 2 1	6 6 1	2 3 2 1	6 —
エ ヤ ア	ハ イ アー	ハ イ アー	ア — アー	ハ-

平和な里
 エーエー エヤハハ
 ハイアー ハー
 晨に 星を
 い「た」だきて
 タベに 月を
 ふみかへる
 平和な里ぞ
 我等が 誇り
 エヤア ハイアー
 アー アー
 ハイア アー アー ハー

平和な蕃社

ハ調 $\frac{4}{4}$

卑南蕃曲 (片仮名は囃)

6	1̇	2̇	1̇	6	1̇	6	—	1̇	3	3	5	3	2	1̇	1̇	6	6	—	
ア	ロ	ワ	ン	ナ	イ	ナ	ヤ—	オ	イ	ナ	ロ	ワ	ン	ナ	イ	ナ	ヤ	オ	イ
か	が	や	く	—	み	い	—	つ	—	ばん	し	や	に	—	お	よ	び	—	

3	5	6	6	5	3	—	5	3	2	3	—	1̇	2̇	1̇	3	2̇	1̇	6	6	—	0
ベ	イ	ヨ—	オ	イ	ハ	ヤ	オ	ワ	イ	ヤ	ン	ハ	ヨ	オ—	イ	ヨ—	ワ	イ	ヤ	ン	

ぶ ん— か に— よ く す — わ が た い と — — — は —

夜学会修了の歌

ハ調 $\frac{4}{4}$

卑南蕃曲 (片仮名は囃)

3	3	3	3	—	6	5	6	—	7	6	6	—	5	3	3	—
め	ぐ	—	る	を	ぐ	—	る	—	ま	ゆ	め	—	の	ご	と	—
5	3	3	7	7	6	5	6	7	6	6	—	5	3	3	—	
い	つ	し	か	—	つ	き	ひ	も	ず	ぎ	—	ゆ	き	て	—	
7	3	2	3	—	7	3	2	3	7	—	6	5	6	7	6	6
わ	ぎ	な	し	—	な	り	—	ぬ	う	—	れ	し	—	や	う	れ

5	3	3	—	5	3	3	7	6	5	3	3	3	—	0
し	や	な	—	オ	ホ	ヤ	ン	オ	ホ	ヤ	ハ	—	ン	

平和な蕃社

輝く御陵威 蕃社に及び
 文化に浴す 我が台東は
 鉄路も通し 電灯光る
 此の大御代ぞ げに有り難や
 台東平野 見渡す限り
 切り開かれて 米粟実り
 いそしむ子等は 学びの道に
 いざ来て見よや 平和な蕃社

夜学会修了の歌

一、めぐる小車 夢の如
 何時しか 月日も 過ぎ行きて
 業^{シゴ}成し就りぬ うれしや うれしやな
 オホヤン オホホヤ ハー
 二、夜毎の疲れも 打ち忘れ
 我等を救へ 懇ろに
 導き給へる 師の情 有難や
 オホヤン オホホヤ ハー
 三、習ひ覚えし 言の葉に
 世の ことわりも わきまへて
 懐しやく 師の恵く
 オホヤン オホホヤ ハー

2. 書翰（吉田巖発翰）

1 絵はがき 日新尋常小学校児童一同宛

（1927年6月1日付）（目録番号Ⅲ-i-2）

〔消印〕三宮／2.6.1

〔表〕

北海道帯広町日新尋常小学校

児童一同殿

神戸市ニテ

吉田巖

私ハ ケフ、 コノ エノ 神戸カラ 吉野丸
トイフ キセンニ ノツテ タイワン ニ
ムカウノデス、 十日ゴロニハ 新高山ガ ミ
ラレルデセウ

ミナサン ヨク イヘ ノ テダスケ ト
ベンキヤウ トヲ シナサイ

六月一日

〔裏〕

THE GRAND SIGHT OF THE SHIPS AT ANCHOR IN THE
HARBOUR, KOBE.

（神戸）巨船岸壁に憩ふ神戸港の盛観

神戸出港前に日新児童宛に送った絵はがき



2 はがき 吉田テイ宛（1927年6月1日付）

（目録番号Ⅲ-i-3）

〔消印〕三宮／2.6.1

〔表〕

十勝国河西郡帯広局区内伏古 日新尋常小学校

吉田テイ殿

六月一日午前十一時

神戸市出張先ニテ 吉田

〔裏〕

途中無事 昨日神戸ニ着。本日 神戸デ レン
ラク船 吉野丸ニ乗り 正午出帆ノ予定。昨日
書留小包デ 「ハサミ、ウスバ、ホウチョウ」
ト「クワシ」少々オクル序ニ サシアタリ、モ
チアマシノ 本ヤソノ他ヲ 届ケタハズ。小倉
氏ヨリ オアヅカリノ テッドウ案内ハ タ
イセツニ シマツテ オカレタシ

毎日 ハレツバキ キカウモ ヨホド ス、
ンデキル ワリアヒニ 作物ハアマリ スス
ンデキナイ

イヘニキルトキノヤウニ カラダグアヒモ、サ
シテカハリナシ、アンシン アリタシ く（ベ
ツビン、児童一同アテ ノエハガキ一枚ハ 来
ル十日 コクバン ニ ケイジ スル ヤウ
ニ タノム）

シン モ ヨクベンキヤウセヨ、アラタ モ
キヲツケヨ マサコ モ ゲンキ ナルベシ、
キンジョ、ミナサマニ ヨロシク。

▶ 手帳の記録によれば、吉田は旅先から妻テイや子どもたちにこまめにハガキを書き送っているほか、日新尋小児童一同宛に神戸港と台湾東部から絵ハガキを送っている。目下、上掲2点の現存を確認済。

3. 「吉田巖日記」(「台湾学事視察旅行」関係 記事抜粋)

1926 年 10 月 12 日

午後九時四十分、高橋〔鋼三河西支庁〕視学及小柳〔藤太郎北海道庁学務部〕属来校。十一時半退出。種々の意見を陳述せる中に、道外視察の希望を提出すると、言下にそれはよからん、まづ貴殿が本年度にやっては如何、考慮すべく三百円は本年の中より融通し得べし、但し単独にてよからんと。〔中略〕夜、本日の後始末として、小柳宛送付の文書の調製をなした。

1926 年 11 月 1 日

放課後参場。停車場で台湾行、神戸、門司、基隆間の哩湮、運賃、航海並に汽車時間等一切調査す。

1926 年 11 月 9 日

放課後、河西支庁に出頭。金子〔英三〕属、石黒〔吉雄〕君は出張不在、近田〔留四郎第一〕課長に面会。府県出張の件協議。旅費は三百円でよからうとの話にて、且視学とよく打合せてもらひたいとあった。よって視学に面会の上にて、更に同一事をくりかへし、且通帳をも呈示した。旅行の件はなほよく考慮すとあって、提出の願書はそのまま受付あつかりとなった。

1926 年 11 月 11 日

三島〔桂五郎〕帯広中学校長、昨夜終列車にて約一ヶ月の予定台湾出張。

1926 年 11 月 23 日

新嘗祭であるが、けふも〔校長〕会議で出席。昨日と同刻から開会。視学が議長代理。十時半頃支庁長が見えられた。午後三時終了。

1926 年 11 月 24 日

再び支庁に來りて視学に面会。昨日支庁長よりお話の余の台湾にいつゆくつ^{〔もカ〕}のりかとのおたづねにつき、本学期のくくりをつけ、新年早々出張の希望。次で親しく那須〔正夫〕支庁長室にて、約十分同様の件を申し、あいさつをして退出。午後四時頃帰着。

1926 年 11 月 26 日

夜、台湾総督府学務部長宛視察依頼状を、小柳属宛あいさつ状を認む。

1926 年 12 月 6 日

夜、日程表を手帳に記入す。

1926 年 12 月 7 日

夜、旅行準備手帳に夫々要件調査記入。

1926 年 12 月 27 日

午後一時より出帶。直ちに参庁。視学に面会、視察出張日取につき打合せた。一課長や金子主任とも夫々会談す。帰着は夜になった。

1926 年 12 月 28 日

終日、報告書や視察出張認可書調製にてひきこもる。

1926 年 12 月 29 日

午前十時より出帶、参庁。金子属と会見す。

1927 年 1 月 1 日

夜は、旅行中留守居のテイに、公私のことども何くれ説明す。

1927 年 1 月 2 日

余は十時よりひとり静かに、秘庫のスター博士

の山陽行脚や、九州の行脚等をひもとき、且秘庫の整理をなす。芦花氏の「自然と人生」、これ一卷はポケットブックとして、旅行に行を共にすべく選出された。

1927年1月4日

十時半より出帯。三島桂五郎先生を訪ふ。一時半より四時まで台湾視察談拜聴。それから帯広駅にいて乗車割引券の記載方についてたしかめ、且神戸、門司の航路等をききただして、大通正直堂から茶を求めて七時帰着。

1927年1月5日

昨日から二十一通の公私文書を、午后二時出席のテイに投函せしむ。なほいろいろ整理し出発準備をなす。本日も公私八通認む。

1927年1月6日

十時半頃、先刻郵着せりとて小柳属よりの葉書披見。明日出発と自分きめにきめて居た処に二月中とあって、がっかりしたものゝ又推薦の廉を熟考すれば、まんざらさうも出来ず、心を冷静に命令に決心した。／午后一時より出帯。拓殖銀行により次に参庁して近田課長と台湾行きの件をはなし、高橋視学ともとくと打合せ、金金属等と話し合つて退出。

1927年1月9日

^{〔午カ〕}
九時より正后まで、台湾総督府文教局学務課長宛、道庁小柳属宛あいさつ状及森要人君、佐山融吉氏、山本〔英雄〕、山道〔万寿亀〕、奥村〔純太郎〕三公学校長宛台湾視察参考事項質問書を認める。

1927年1月20日

本日より向二十日間、例規による冬季休業だが、本年度に限り2月中よりの出張を見越して休業せず。特に午前三時間をかぎり、臨時時間割にて授業継続のこととせり。

1927年1月21日

余は参庁す。高橋視学に面会。経費流用の認可書を受く。

1927年1月25日

余は、公私二十数通の書状を認める。

1927年1月31日

小柳属よりハガキにて回答あり、バチラー辞書の件、学務部長不在にて余の出張最後の決定以前に云々とあり。

1927年2月2日

^{〔月カ〕}
先日九日発送の台湾三校長よりの回答書、午前九時頃同時に受付けた。山本氏の厚意、感謝にあまる。

1927年2月12日

放课后、趣味の小学地理中台湾地方の記事をよむ。

1927年2月13日

夜、趣味の小学地理日本の部下から、台湾の記事を旅行用手帖に抄録する。

1927年2月14日

例の某筋からの派遣通知、かいてもくないので、テイは沙汰止みになったのではないかと余に聞く。いはぬが花だ。

1927 年 2 月 21 日

正午にて切り上げ、午後一時半より出帯、参庁、俸給を受領。高橋視学は川合方面に一ヶ月程の予定、高田属も四日程、近田課長も出張と、そろひもそろって外勤。余の出張に関する内意はもとより聞くすべもなかった。

1927 年 2 月 22 日

本日までその筋の派遣辞令に接していないのを見ると、恐らく本年度内は沙汰なきものと推断される。よって児童にもその旨を父兄へも通ずるやう懇話してやった。

1927 年 2 月 24 日

午後二時より出帯、河西支庁に出頭す。課長は出張につき不在、高橋視学もよりにて物品の報告、予算の件で金子属と面談。次に高田属と面談。

1927 年 2 月 28 日

午後一時より授業打ち切り、明一日より二十日間休業。二十一日祭日、二十二日出席するように命ず。

1927 年 3 月 1 日

台湾総督府、山本外三、三島中学校長、青柳御老人、鳥取御老人夫々書状をしたため、二月末をこえて発令を見ざりしは、余の不明につき言責を謝する視認めた。

1927 年 4 月 17 日

七時半、音更校に徒歩出発、九時着。午後三時退出。それより官舎に高橋視学を訪ふ。道庁へ行って来たが、二月頃は学務部長もあまり日が短いので、季節がわるいといふ理由でそのままになって居たが、まづ詳細は君とあって、予備知識やその他の程度をかいて出してもらって

の上にと、宿題になった始末。熱もさめた今日、実は迷惑でもあるが、なほ考慮してといって退出。

1927 年 4 月 27 日

放課后、一時半より出帯、参庁す。四月分小切手受、視学に直接持参の旅行認可申請書提出。

1927 年 5 月 18 日

午前九時半郵着の小柳属よりの郵書にて、台湾出張命令組成たる旨を、はじめて承知す。放課后午後六時過まで日程や事務室取りかたづけをなし、夜は小柳属宛書状を認む。

1927 年 5 月 19 日

午前九時半、台湾学事調査のため出張命令書郵着。ここにはじめて一安堵。／放課后六時頃まで校務を処理す。

1927 年 5 月 21 日

午前十時過より出帯、参庁。支庁長、課長、視学は各出張その他にて御不在。御目にかからず高田属に面会。出張命令のあいさつ及二十七日頃出発の希望。道庁にその際立ち寄ることを打合せた。

1927 年 5 月 22 日

十時、園部金二郎氏来校。二十分許で退出。それより余出帯。小柳氏宛記念品小包を発送。一時帰着する。

1927 年 5 月 24 日

昼食をとらんとする処に安田直氏来られる。四時頃まで二十年前の在台当時の物語をし、四時退出。

1927 年 5 月 25 日

放課后、正午小倉巡查来校。鉄道案内一部持ち下された。

1927 年 5 月 26 日

午后三時より出帯。町役場出暇乞をなし、(町長、山本書記不在)小野、三条氏と打合せてのち帰校す。

1927 年 5 月 27 日

三時より出帯、即ち参庁。視学、近田課長と面会。出発の挨拶す。金子、喜多、高橋正男氏等夫々挨拶。支庁長御病気を官舎にお見舞ひし、中学校長を御宅にとひ、安田氏を訪ひ帰着。

1927 年 5 月 28 日より 6 月 30 日まで

五週間、台湾出張。手記は別に保存す。よりて本日記には省略す。

1927 年 7 月 1 日

午前八時より登校、児童三十四名に対して始業の辞と約一時間、台湾みやげ話を聞かせる。

1927 年 7 月 2 日

午后二時頃より出帯。高橋視学、那須支庁長、三島中学校長を歴訪す。

1927 年 7 月 3 日

午前中、高田、金子、喜多三氏を訪問す。正午帰着。〔中略〕午后二時頃より、帯広町^{〔町長カ〕}及近田一課長をその邸に訪ふ。

1927 年 7 月 10 日

午后五時より出帯。清田惇作氏宅の招待を受く。^{〔坂カ〕}六時より旅行談をなす。酒井辰吉氏、金耕太郎氏、松山亮氏、宮本富治郎氏と顔ぶれが七時半

頃そろふ。九時半まで飲み且くらひ、御馳走を受け、歓談ののち退出する。十一時帰着。

1927 年 7 月 13 日

正午、畑中、早坂両氏来校。台湾視察の質問を受く。そこに営林区署員来訪。これも台湾談をきかんとてだ。

1927 年 7 月 17 日

前九時より五十二回例会举行。森局長来、高橋視学も臨視官として来会。午前十一時より二時までにて退散。余の報告をなす(視察に関して)。

1927 年 7 月 23 日

伏根弘三外五十九名宛、部落に明日の案内状を謄写版に付し、児童をして発送せしむ。

1927 年 7 月 24 日

一時三十五分、小野君来校。同刻より集まりたる部落民に視察団^{〔談カ〕}を三時十五分まで一時四十分つづけて話す。〔参加者名略〕

1927 年 7 月 26 日

本日は、放課后より旅の詠草の部を整理にかかり、半分出来る。

1927 年 7 月 30 日

余は朝より資料整理に夜まで没頭する。

1927 年 7 月 31 日

午后より資料の整理に努めた。

1927 年 8 月 1 日

この疲労中にも余は終日復命書原稿の資料を執筆した。努力に努力して六時半。

1927年8月3日

終日復命書整理、終了。／午后二時より出帯、清田君の処で台湾の旅の印刷を托す。午后五時帰着。夜も整理に没頭する。

1927年8月4日

朝から復命書の整理と執筆。／〔中略〕復命書印刷原稿清田君に托して退出。午后九時半帰着する。

1927年8月9日

前八時より正午半まで第三日目の〔修身科講習〕受講終りて、高橋視学に面会、復命書印刷部数及経費の件打合せをなす。

1927年8月10日

前八時より正午にて講習終了。桜井君、荒五百五、伏見六郎三氏を案内して帰校。台湾の物語をなす。六郎君は四時退出。荒、桜井君は宿泊す。

1927年8月17日

台湾旅行中の「車中瞥見」の執筆^{〔筆カ〕}す。

1927年8月19日

台湾旅行中の見聞、感想録を執筆する。

1927年9月1日

復命書の印刷製本、出来のことのみに心にかかりて離れない。

1927年9月2日

午后より余出帯。清田印刷所の三十五円を支払ふ。喜多君の印刷物、印刷所で見せられる。

1927年9月4日

午前九時半、清田活版所より二名、三百部の印刷復命書持参受付く。夜、校正表をつくるに四時間を要す。

1927年9月5日

午後一時より出帯。支庁に視学を訪ひ、復命書二通及写一通を提出する。管内は各町村役場に移牒されることに内諾。清田活版所に校正印刷を托してかへる。伏根弘三にて休む。

1927年9月11日

午前中、二町十六ヶ村長宛の発送状、謄写版にて印刷。／昨夜小包にせし道庁宛小包を本局に持参。支庁、喜多、金子、高橋正男各属を訪ふ。喜多君の十勝アイヌ印刷物を受く。

1927年9月14日

帝国書院梅木君来観。本日姉妹校の岩淵先生から、余の台湾より帰着復命書写の件も見せられたのだといって、それを手づるに訪問された。〔中略〕／本日で二百二十五部、河西管内町村役場及各学校二百二十五ヵ所宛、全部記念印刷^{〔ママ〕}物を贈呈を了した。

1927年9月18日

午前十時半頃、清田印刷所より「台湾の旅」^{〔ママ〕}で来、三百部を自転車を持参一覧す。

1927年9月19日

放課后より夜まで、「台湾の旅」訂正加筆五十部、その中発送分を封入して夫々装訂す。

1927年9月21日

午後一時、参庁、清田印刷所にて勘定をすます。

1927 年 10 月 1 日

午後五時半より出帯。森義平氏を訪ふ。次いで
〔次カ〕
小野保治君を訪ふ。七時電信通り西本願寺別院
に参る。帯広仏教青年会に参列。七時半、森会
長の余の紹介にて、約一時間半の台湾蕃人講話
をなす。住永氏も参らる。十一時帰着。

1927 年 10 月 1 日

午後一時半頃、坂井辰吉氏案内、自動車にて東
京日日新聞社内国通信部長吉村広氏及同社編
輯副主幹岡崎鴻吉氏、計九名来観。事務室で説
明、山村正夫宅まで案内す。

1927 年 10 月 16 日

午前七時半出帯。それより音更開進校にゆき、
十時過着。金子、喜多両氏来。東京日日新聞に
余の記事が出た由、金子氏より聞く。

- ▶ 井上寿・吉田ヨシ子編『吉田巖日記 第十四』
(帯広叢書 No.33、1992 年)より関連箇所を
抄録。

4. 新聞記事(「台湾学事視察旅行」関係記事)

〔日新〕
1 「吉田新校長／蕃童学校視察」(『十勝毎日新
聞』1926 年 11 月 30 日付)(目録番号 V-1)

〔吉〕
伏古の日新小学校告日巖氏は本道における
旧土人教育に身を献げて以来既に二十余年
本道における第一人者として有名である同
氏は来月二日帯広出発三十五日間の予定を
以て台湾に至り同地における生蕃の児童を
如何に教育するかに就いて蕃童学校視察の
途に上ることになった

2 「生蕃教育調査」(『旭川新聞』1927 年 5 月
18 日付)(目録番号 V-2)

河西郡日新尋常小学校訓導兼校長吉田巖氏
は多年旧土人教育に従事し成績極めて良好
にして曩に斯教育の功労者として長官の表
彰も受たことあり今回台湾生蕃教育の実情
並に特殊教育施設の状況調査のため道庁よ
り十七日付で台湾に出張を命ぜられた

3 「日新小学校長／台湾出張」(『十勝毎日新聞』
1927 年 5 月 19 日付)(目録番号 V-3)

河西郡日新小学校訓導兼校長吉田巖氏は昨
十七日付道庁より学事調査の為台湾に出張
を命ぜられたが近く出発する由

4 「[消息]」(『小樽新聞』1927 年 5 月 29 日付)
(目録番号 V-4)

〔日新〕
(帯広電話) 帯広伏古土人学校内庁立日進
小学校長吉田巖氏は台湾の生蕃教育視察の
ため道庁から出張を命ぜられ廿六日午後十
時五十分発にて出発した

5 「愛奴研究の吉田先生が／生蕃研究の報告を
発表」(『十勝新報』1927年9月13日付)(目録
番号V-5)

旧土人の教育事業にふかき造詣を有し十九
年の永き間専らその教鞭に^{〔ママ〕}尽粹せる帯広町
伏古庁立日新小学校長吉田巖氏は本月五月
二十七日同庁より台湾の学事調査の命を受
け渡台せるが、その永き視察旅行中調査見聞
せる事を録して台湾学事調査復命書と名づ
ける冊子を刊行し各方面に寄贈せるが、その
内容は台湾における台湾人の教育、蕃人の教
育、内地人教育の沿革に^{〔ママ〕}等渡る興味多き教
育上の参考資料である

台湾の土人と北海道の土人とはその性格が
まるつきり反対で、あちらは粗暴ですが、こ
ちらは極めて従順なものです。従つてその教
化の方面にも、あちらでは何れかといへば抑
圧する傾向がありますが、こちらでは何処迄
も温情主義でやつてゐます。学校の成績は最
近非常によくなりまして、帯広の高等小学校
へ通学するものもあります。最近では部落の
婦人会まで出来ました云々(写真は吉田校長
の教授ふりと児童の成績です)。^{〔写真2葉〕}

6 「新刊紹介 台湾学事復命書(写)」(『十勝
新報』1927年9月18日付)(目録番号V-6)

本書は帯広町日新小学校長旧土人学校吉田
巖氏が去る五月十七日道庁よりの命令で台
湾に学事調査に行つた時の視察日程及経過
を書いたものであるが、詳細に統計沿革等
を入れてあるので台湾の情事一目然としてゐ
る(非売品)」

7 「帯広在伏古のアイヌ学校／吉田先生は校長
さんで／そうして小使さんだ」(『東京日日新聞』
1927年10月14日付、北海道・樺太版)(目録番
号V-12)

帯広の在に伏古といふ旧土人の部落があつ
て、その部落にしかも庁立の学校がある。そ
の名を日新尋常小学校といつて校長さんは
有名な吉田さんである。吉田校長はすこぶる
真面目なしかも温厚な篤志家で、奥さんと二
人で小使の役目から校長さんの役目までや
つてゐる。先般台湾の土人学校視察のためし
ばらく旅行中であつたが、このほど帰校して
語る。

帯広叢書別冊

吉田巖の「台湾学事視察旅行」関係資料

2014 年 1 月 31 日 発行

編 著 北村嘉恵

発 行 帯広市教育委員会

080-8670 帯広市西 5 条南 7 丁目 1

本書は、日本学術振興会より科学研究費補助金若手研究（A）「台湾先住民族の教育をめぐる歴史的動態」（2011～13 年度、研究代表者北村嘉恵、課題番号 23683022）の交付を受けて作成したものである。